

千野木 I・II 遺跡
池の下 遺跡
踊石 II 遺跡
中村道祖神 遺跡

Chinogi-I・II Site

Ikenoshita Site

Odoriishi-II Site

Nakamuradosozin Site

1990

山梨県明野村教育委員会

千野木 I・II 遺跡
池の下 遺跡
踊石 II 遺跡
中村道祖神 遺跡

Chinogi- I・II Site

Ikenoshita Site

Odoriishi- II Site

Nakamuradosozin Site

例　　言

1. 本書は、県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査の対象となった遺跡、調査期間、調査面積は、以下のとおりである。

千野木I遺跡（山梨県北巨摩郡明野村上手4001）

1989年6月7日～6月26日 600m²

千野木II遺跡（山梨県北巨摩郡明野村上手3806）

1989年6月14日～6月26日 325m²

池の下遺跡（山梨県北巨摩郡明野村浅尾3171）

1989年6月27日～8月8日 878m²

躍石II遺跡（山梨県北巨摩郡明野村浅尾1567）

1989年7月28日～8月22日 478m²

中村道祖神遺跡（山梨県北巨摩郡明野村浅尾178）

1989年7月14日～12月8日 4,783m²

3. 本書は、本編を大森隆志、付編を会田信行氏が執筆した。編集は、大森が行なった。ただし、陶磁器に関しては、田尾誠敏氏（東海大学）の観察結果を大森がまとめたものである。
4. 石器石材の鑑定は、柴田徹氏（東京都立青山高校教諭）に、また、中村道祖神遺跡の鉱物分析は、会田信行氏（千葉県立成田園芸高校教諭）にお願いした。
5. 本文挿図中の土層説明の色調は、『新版標準土色帖』（1967年 小山正忠・竹原秀雄）によった。
6. 発掘調査、報告書作成にあたって次の各位には、とくに御指導、御教示を賜った。記して謝意を表する次第である。

長沢宏昌 新津健 八巻與志夫 前田潮 吉岡弘樹 江崎武
秋原三雄 伊藤公明 白石太一郎 穂仁志 設楽博己 保坂康夫
田尾誠敏 中山誠二 外山秀一 (敬称略)

7. 本調査に関する資料の一切は、明野村教育委員会に保管されている。
8. 調査にあたった組織は以下のとおりである。

調査主体者 長田博徳 明野村教育委員会教育長

調査担当者 大森隆志 明野村教育委員会主事・文化財調査員

調査補助員 辻貴久 山梨大学学生

斎藤弘也 山梨大学学生

小宮山隆 筑波大学学生

事務局 明野村教育委員会

調査参加者

三塚てつ子 清水恵三子 深沢あさ子 篠原啓子 宮川 寛 篠原源一 長田節子
清水小春 阿部恵子 入戸野たかじ 入戸野つるじ 三井啓介 皆川和歌子 鈴木晶子
三井とも子 入戸野宏 水上治良 水上きく子 深沢のぶ子 清水美智子 皆川一子
入戸野とめ子 西沢 葵 篠原勝也 古屋信浩 駒井博樹 清水利英 遠藤光男
小林 学 長田俊治 入戸野きぬ代 入戸野フサコ 入戸野みづ子 篠原さかえ 水森広徳
輿水辰子 清水さゆり 清水真奈美 坂本富美子

本文目次

例 言

第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡	1
第2章 千野木I・千野木II遺跡の調査	
調査の概要	8
第3章 池の下遺跡の調査	
調査の概要	13
第4章 踏石II遺跡の調査	
第1節 縄文時代の遺物	21
第2節 中世の遺物	21
第3節 江戸時代の遺構と遺物	21
第1項 江戸時代の遺構	21
第2項 江戸時代の遺物	23
第4節 時期不明の遺構	23
第5章 中村道祖神遺跡の調査	
第1節 層序	28
第2節 縄文時代の遺物	28
第1項 土器	28
第2項 石器	28
第3節 弥生時代の遺構と遺物	29
第4節 平安時代の遺構と遺物	29
第5節 中世の遺構と遺物	36
第1項 地下式坑	36
第2項 土墳墓	48
第3項 土坑	75
第4項 埋設土器	75
第5項 土器・土製品・陶磁器	75
第6項 石器・石製品	79
第7項 古錢	80
第6節 時期不明の遺構	80
第7節 まとめ	99

参考文献	100
付編 中村道祖神遺跡の砂粒組成・重鉱物組成	102

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡の位置	3
Fig. 2 遺跡の位置	4
Fig. 3 千野木I遺跡・千野木II遺跡 調査範囲	7
Fig. 4 池の下遺跡調査範囲	11
Fig. 5 池の下遺跡遺構分布図	12
Fig. 6 1号住居址	14
Fig. 7 1号住居址カマド	14
Fig. 8 1号住居址出土土器	15
Fig. 9 1号住居址出土石器	16
Fig. 10 1号焼土	16
Fig. 11 踏石II遺跡調査範囲	19
Fig. 12 踏石II遺跡遺構分布図	20
Fig. 13 出土遺物	22
Fig. 14 土壙墓	23
Fig. 15 古銭	23
Fig. 16 振立柱建物跡	24
Fig. 17 中村道祖神遺跡調査範囲	27
Fig. 18 署序	28
Fig. 19 出土遺物（石器）	31
Fig. 20 出土遺物（石器・石製品・土器）	32
Fig. 21 1・2・3号住居址	33
Fig. 22 1・2・3号住居址出土土器	34
Fig. 23 3号住居址・93号土坑出土土器	35
Fig. 24 地下式坑（91号・88号）	49
Fig. 25 地下式坑（117号・3号）	50
Fig. 26 地下式坑（87号・2号）	51
Fig. 27 地下式坑（1号・4号）	52
Fig. 28 地下式坑（6号・18号・107号）	53
Fig. 29 地下式坑（7号・9号）	54
Fig. 30 地下式坑（5号・11号）	55
Fig. 31 地下式坑（17号・26号）	56
Fig. 32 地下式坑（39号・61号）	57
Fig. 33 地下式坑（43号・45号）	58
Fig. 34 地下式坑 (52号・44号・106号・65号)	59
Fig. 35 地下式坑 (52号・44号・106号・65号)	60
Fig. 36 地下式坑（36号・60号）	61
Fig. 37 地下式坑（35号・46号）	62
Fig. 38 地下式坑（169号・64号）	63
Fig. 39 地下式坑（69号・171号）	64
Fig. 40 地下式坑（148号・166号）	65
Fig. 41 地下式坑（147号・155号）	66
Fig. 42 地下式坑（168号・149号）	67
Fig. 43 地下式坑（153号・150号）	68
Fig. 44 地下式坑（154号・138号）	69
Fig. 45 地下式坑（152号・156号）	70
Fig. 46 土壙墓（1）	73
Fig. 47 上壙墓（2）	74
Fig. 48 埋設土器	75
Fig. 49 中世の土器・陶磁器	77

Fig. 50 中世の土器	78	Fig. 60 土坑(7)	95
Fig. 51 古銭(1)	83	Fig. 61 土坑(8)	96
Fig. 52 古銭(2)	84	Fig. 62 土坑(9)	97
Fig. 53 古銭(3)	85	Fig. 63 土坑(10)	98
Fig. 54 土坑(1)	89	Fig. 64 地下式坑の埋まりかた模式図	100
Fig. 55 土坑(2)	90	Fig. 65 地下式坑・土壙墓主軸方向	101
Fig. 56 土坑(3)	91	Fig. 66 分析試料の砂粒組成と重転物組成	105
Fig. 57 土坑(4)	92	Fig. 67 分析試料採取位置	106
Fig. 58 土坑(5)	93	Fig. 68 中村道祖神遺跡と白山I遺跡の対比	
Fig. 59 土坑(6)	94	Fig. 69 遺構分布図	別添図

付表目次

Tab. 1 古銭(1)	81	Tab. 3 土坑表(1)	86
Tab. 2 古銭(2)	82	Tab. 4 土坑表(2)	87
		Tab. 5 土坑表(3)	88

写真図版目次

PL. 1 遺跡の位置	PL. 10 踏石II遺跡出土遺物
PL. 2 千野木I・II遺跡調査風景・出土遺物	PL. 11 1号住居址・2号住居址
PL. 3 遺跡の位置	PL. 12 3号住居址・1号埋設土器
PL. 4 遺跡遠景・池の下遺跡調査風景	PL. 13 93号土坑 1・2・3号住居址出土遺物
PL. 5 1号住居址・遺物出土状況	PL. 14 3号住居址出土遺物・1号埋設土器
PL. 6 1号住居址出土土器・1号焼土	PL. 15 1・2・3号土坑
PL. 7 1号住居址出土遺物	PL. 16 4・5・6・18号土坑
PL. 8 振立柱建物跡	PL. 17 7・9・11号土坑
PL. 9 1・2号土壙墓	

- | | | | |
|--------|--------------------|--------|------------------|
| PL. 18 | 17・26・35号土坑 | PL. 29 | 8・25・113号土坑 |
| PL. 19 | 36・39・43号土坑 | PL. 30 | 29・41・53号土坑 |
| PL. 20 | 44・52・65・106号土坑 | PL. 31 | 59・66・68・139号土坑 |
| PL. 21 | 46号土坑 | PL. 32 | 70・109・131号土坑 |
| PL. 22 | 45・60・61号土坑 | PL. 33 | 48・93・135号土坑 |
| PL. 23 | 64・69・87・88号土坑 | PL. 34 | 地下式坑出土土器 |
| PL. 24 | 91・107・117・138号土坑 | PL. 35 | 地下式坑・土壤基・土坑出土遺物 |
| PL. 25 | 147・148・155・166号土坑 | PL. 36 | 古錢 |
| PL. 26 | 149・150号土坑 | PL. 37 | 石器・石製品 |
| PL. 27 | 152・153・154・156号土坑 | PL. 38 | 石製品・土製品・深掘りセクション |
| PL. 28 | 168・169・171号土坑 | PL. 39 | 遺跡全景 |

第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡

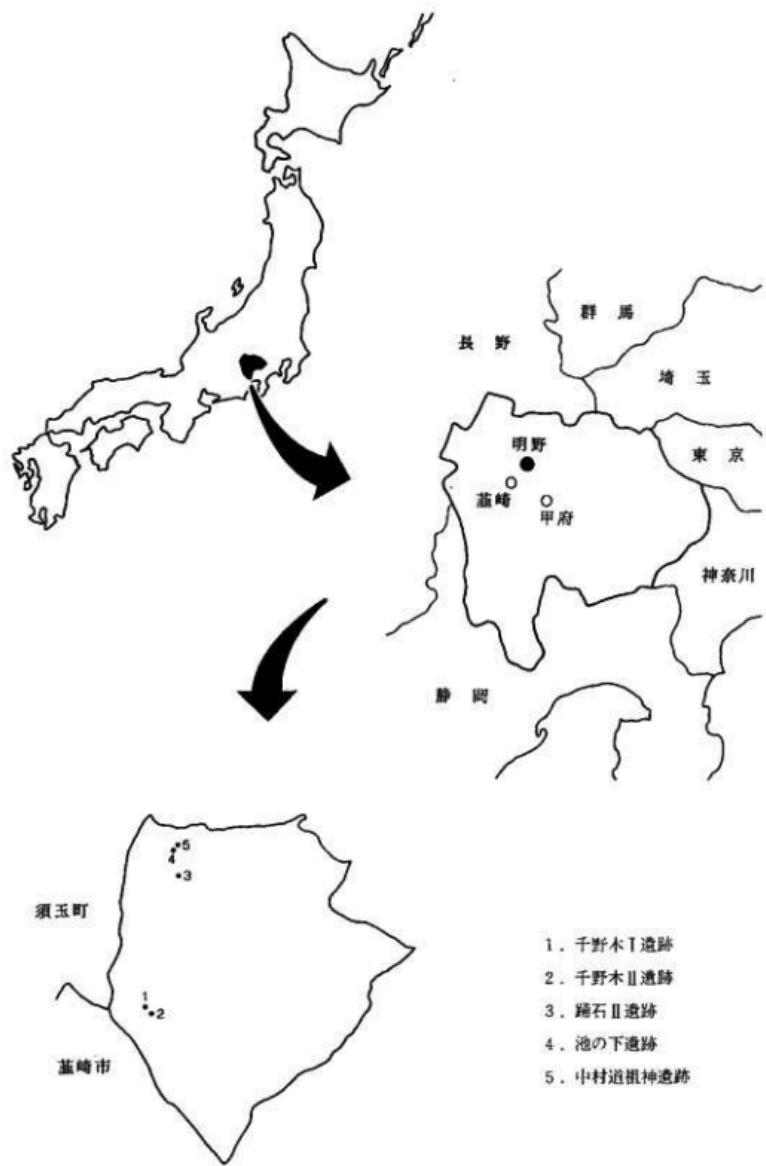


Fig. 1 遺跡の位置

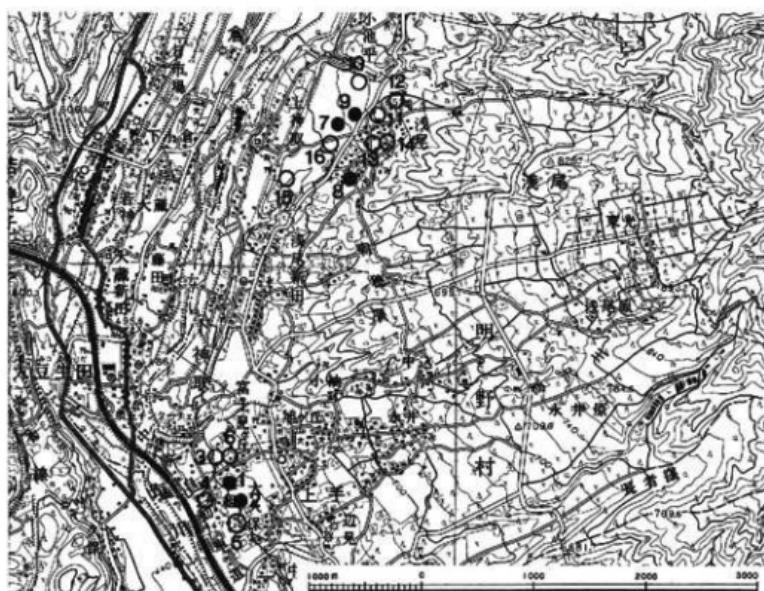
千野木Ⅰ・Ⅱ遺跡

茅ヶ岳西麓には塩川沿いに3段の明瞭な河岸段丘があるが、当該遺跡は塩川左岸、下位段丘面上の南西向き緩斜面に位置する。遺跡の標高は約505mで、塩川からの比高は65mである。周辺には、村之内遺跡（縄文中期後葉）、下反保遺跡（縄文）、屋敷添遺跡（縄文中期・平安）、三井氏屋敷跡（中世）などの遺跡がある。

躑躅Ⅱ・池の下・中村道祖神遺跡

躑躅Ⅱ遺跡は、塩川沿いの河岸段丘の上位段丘面上の北西向き緩斜面に位置し、また、池の下・中村道祖神遺跡は、河岸段丘の中位段丘面（小池平面）上に位置する。微視的に見れば池の下遺跡は南西向き緩斜面上にあり、中村道祖神遺跡は、南西向き緩斜面上にある、微高地の南向き緩斜面上に位置する。

これら3遺跡の周辺には、北原遺跡（平安）、吉良庭遺跡（縄文）、宮後遺跡（平安・中世）、薬師堂遺跡（縄文中期・平安）、白山Ⅰ遺跡（縄文・平安）、竹内遺跡、俵石遺跡（縄文）がある。しかし中世の集落遺跡は今のところ確認されていないので、中村道祖神遺跡の多くの地下式坑をつくった人々の生活については不明である。



1. 千野木Ⅰ
2. 千野木Ⅱ
3. 村之内
4. 下反保
5. 屋敷添
6. 三井氏屋敷跡
7. 池の下
8. 踵石Ⅱ
9. 中村道祖神
10. 北原
11. 宮後
12. 吉良庭
13. 竹内
14. 俵石
15. 白山Ⅰ
16. 薬師堂

Fig. 2 遺跡の位置

第2章 千野木I・千野木II遺跡の調査



Fig. 3 千野木I遺跡・千野木II遺跡調査範囲 ($1/2000$)

調査の概要

千野木 I 遺跡

約600m²を調査対象とした結果、縄文時代の土器、石器が出土した。そのうち主なものは、写真図版 PL. 2 に示した。以下、簡単な説明を加えよう（番号は、写真図版の番号と一致する）。
1～3：いづれも縄文時代中期中葉の土器。3には、押引文が施文されている。4：打製石斧。重さ63g。石質、砂岩。5～10：黒曜石製の剝片。

千野木 II 遺跡

約330m²を調査対象とした結果、縄文時代の土器、石器が出土した。そのうち主なものは、写真図版 PL. 2 に示した（土器は、小破片なので割愛した）。

11：黒曜石製の剝片。12：黒曜石製の石鏃。重さ 1 g。

第3章 池の下遺跡の調査



Fig. 4 池の下遺跡調査範囲 ($1/2000$) (XとYは第3種系の座標値)

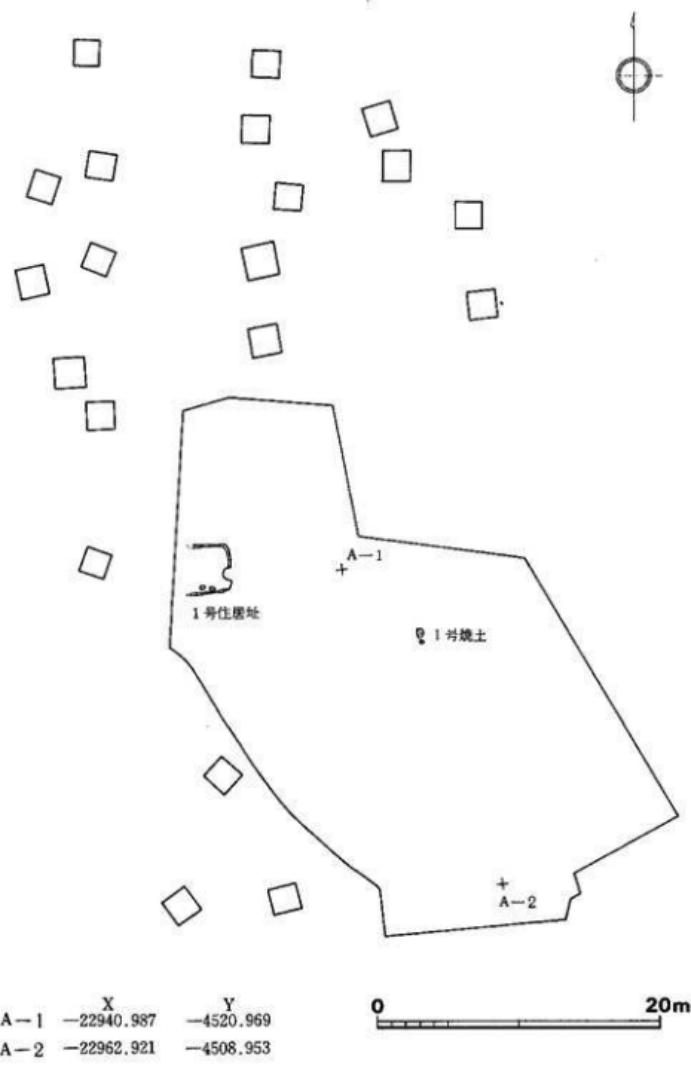


Fig. 5 池の下遺跡遺構分布図 ($S = \%$) (X と Y は第Ⅳ系の座標値)

調査の概要

池の下遺跡からは、平安時代の住居址・土器、焼土が発見された。以下、これらについて説明する。尚、平安時代の土器の時期区分は、坂本・末木・堀内(1983)を参考にした(P.30参照)。

1号住居址 (Fig. 6・7, PL. 5)

形状・規模 住居址西側は、道路によって削平され失われているが、方形プランを呈していたと思われる。現状の規模は、東西約3.2m、南北約3.5m。

窓 東壁の南寄りに石組の窓を有する。

床面 特に固くしまっているところはなかった。

その他の施設 南側壁面付近に小さな落ち込みが2ヶ所ある。Aからは、土師器の壺(Fig. 8-7)が出土した。

出土遺物

土器 (Fig. 8, PL. 6・7)

1~3: 土師器壺。1. 瓶内出土。外面は縦ハケメ、内面横ハケメ。口縁部は、肥厚している。2. 外面は縦ハケメ。口縁部は、肥厚している。3. 瓶の北側から出土(PL. 6)。外面は縦ハケメ、内面横ハケメ。口縁部は、肥厚している。4. 須恵器の大型甕類の破片と思われるもの。5. 土師器皿。口縁部は肥厚し、玉縁となっている。坂本・末木・堀内編年の XI 期~XII 期にあたると思われる。6. 土師器皿。口縁部は肥厚し、玉縁となっている。器体部下半は斜めヘラケズリ。XI 期~XII 期。7. 土師器壺。器体部下半は斜めヘラケズリ。口縁部は肥厚し、玉縁となっている。底部は、全面ヘラケズリ。XI 期に属すると思われる。

石器 (Fig. 9, PL. 7)

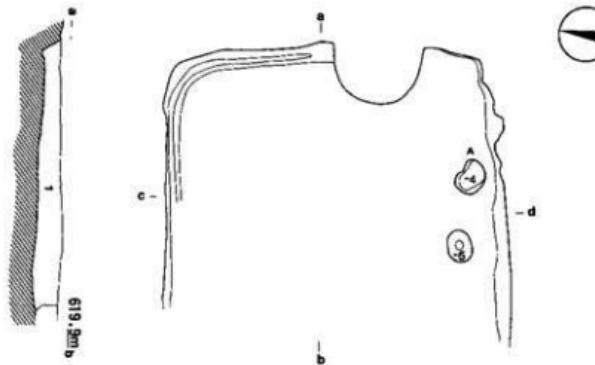
1. 打製石斧。重さ28g。石質、頁岩。撥形を呈する。2. 砕石。流紋岩。底面は、4面にある。重さ203g。

上記の他に鉄製品が1点出土している(PL. 7-5)。

時期 出土土器から XI 期~XII 期に属すると思われる。

1号焼土 (Fig. 10, PL. 6)

アーメバー状の部分と、円形の部分とがある。ともに、約5cmロームが赤化していた。焼土内から土師器甕の破片(PL. 7-1~4)が出土した。もとは住居址であったものが削平され甕の焼土部分だけが残ったものかもしれない。



1 暗褐色土(焼土粒子を少し含む)

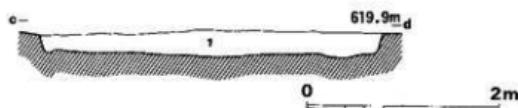
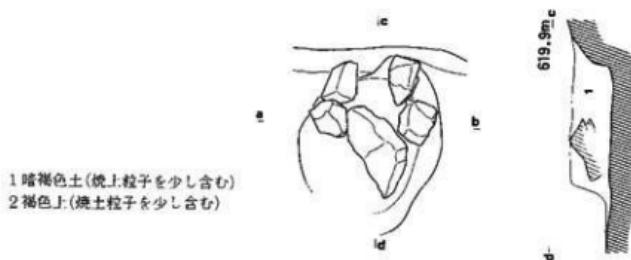


Fig. 6 1号住居址 ($S=\%$)



1 暗褐色土(焼土粒子を少し含む)
2 紅色土(焼土粒子を少し含む)

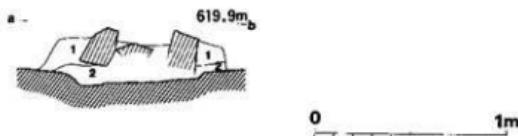


Fig. 7 1号住居址カマド ($S=\%$) (ピット内の数値は深さを表わす)

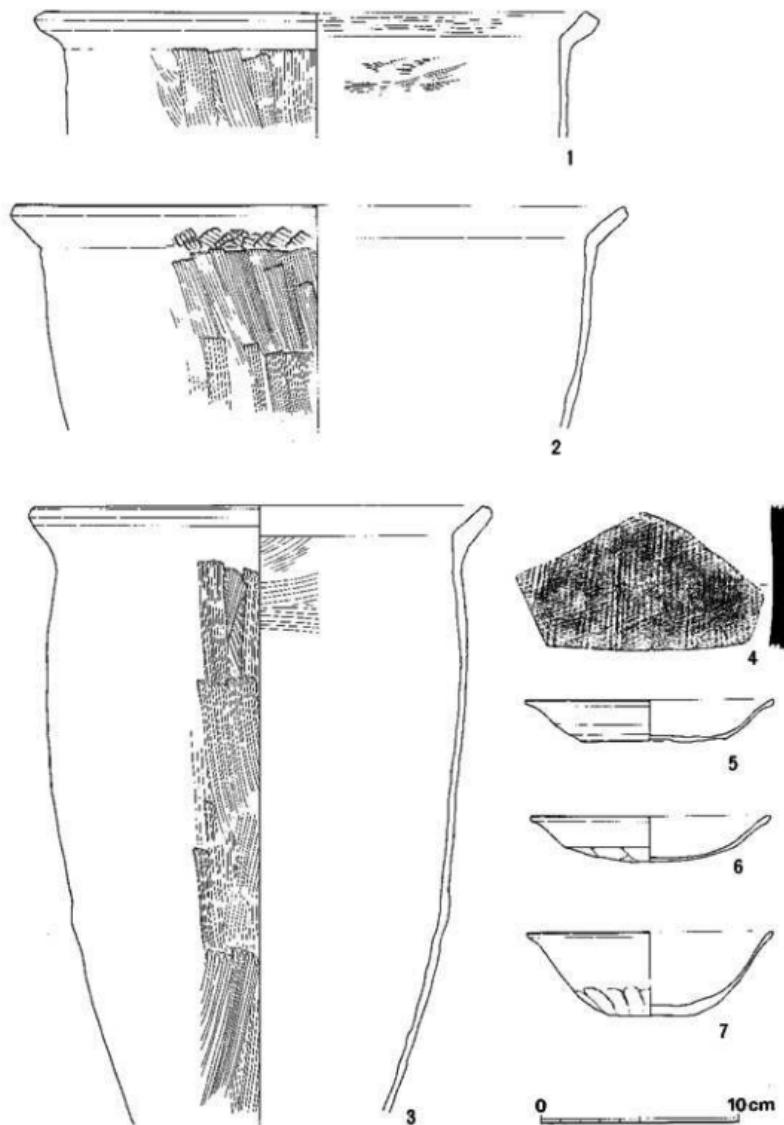


Fig. 8 1号住居址出土土器 ($S = \frac{1}{50}$)

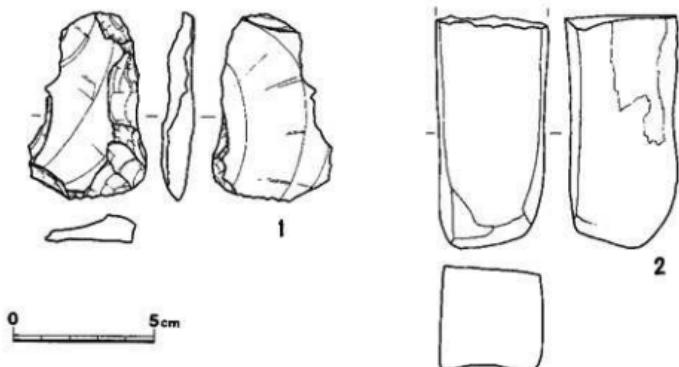


Fig. 9 1号住居址出土石器 ($S=\frac{1}{2}$)

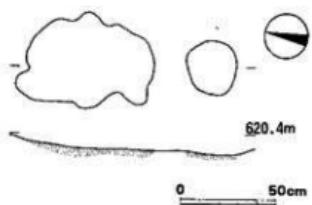
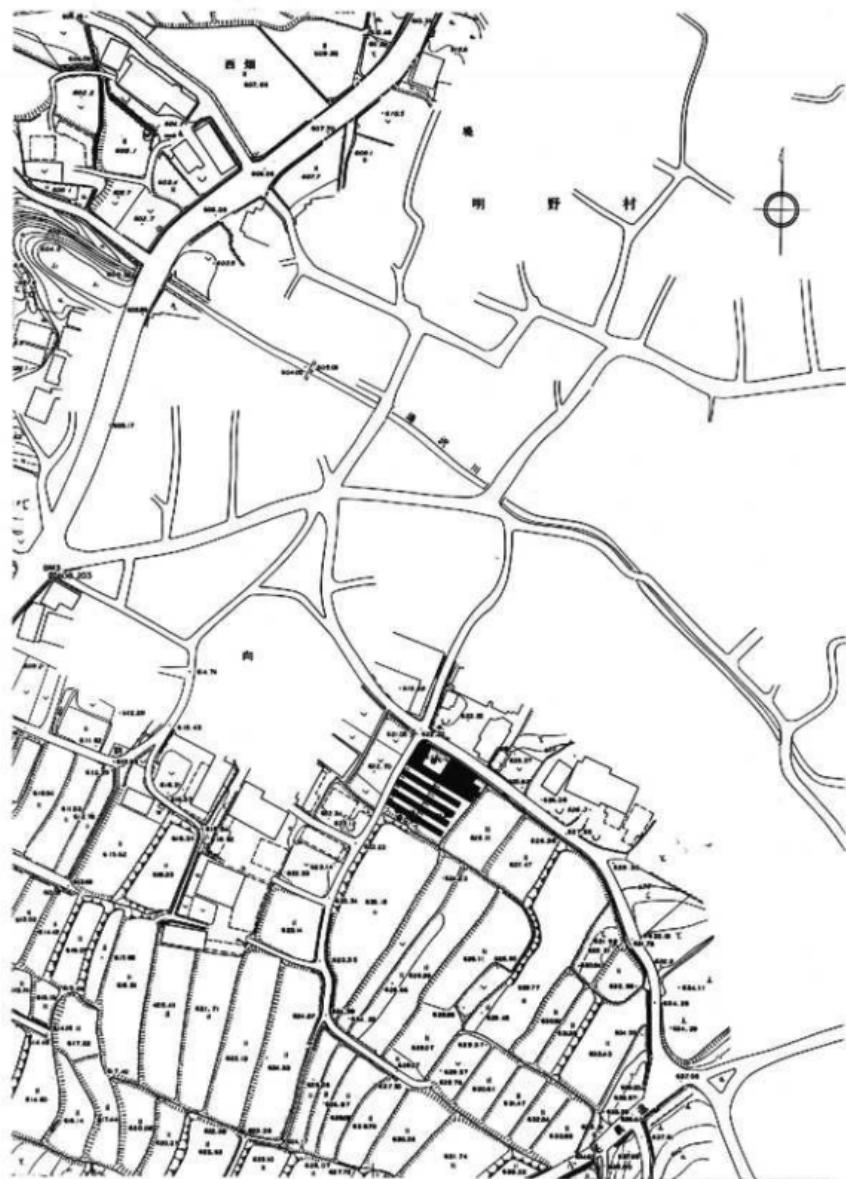


Fig. 10 1号焼土 ($S=\frac{1}{20}$)

第4章 踊石II遺跡の調査



調査範囲

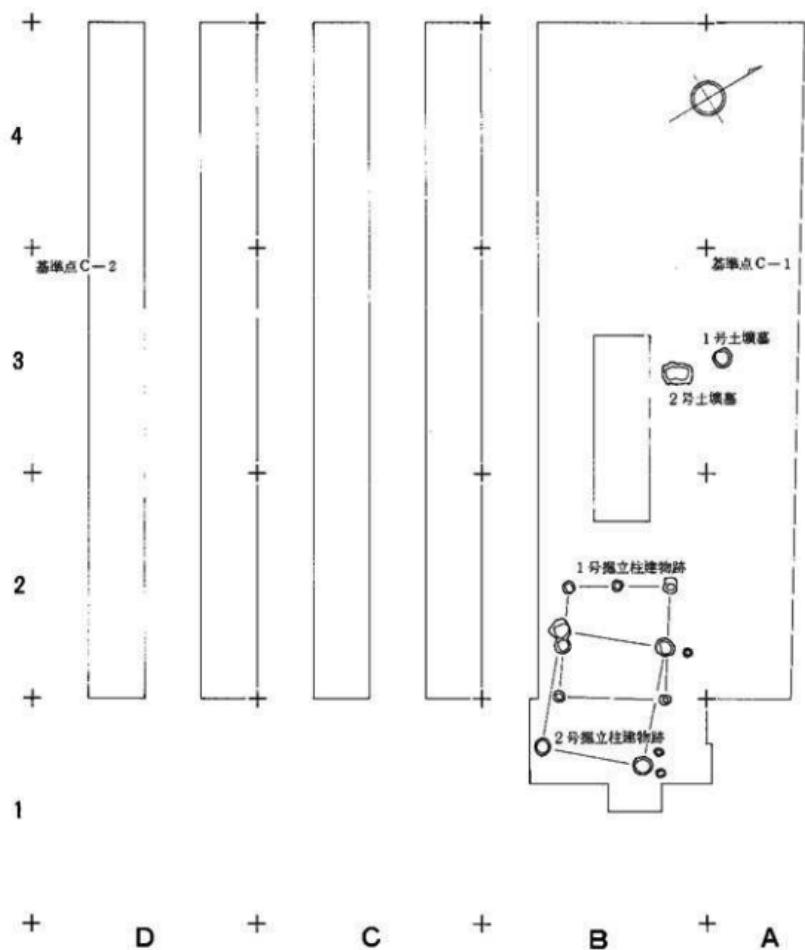
C-1 -23451.210 -4478.547

C-2 -23471.310 -4491.525

0

100m

Fig. 11 踏石II遺跡調査範囲 (1/2000) (XとYは第Ⅲ系の座標値)



C-1 -23451.210 -4478.547
 C-2 -23471.310 -4491.525

0 10m

Fig. 12 踏石II遺跡遺構分布図 ($S = \frac{1}{2}m$) (XとYは第Ⅳ系の座標値)

第1節 縄文時代の遺物 (Fig.13, PL.10)

縄文時代中期の土器及び石器が出土した。主な資料を、Fig.13に図示したので、それらの概要を以下に記す。

1：扇状把手に隆線を施している。中期中葉。2：斜縄文（摩耗著しく原体不明）を地文とし沈線を施す。中期後半。3：刺突文を地文とし2本の隆線を施す。中期後半。4：綾杉状沈線文、所謂「ハの字文」がみられる。中期末葉。5：斜縄文（原体は、RL）を地文とし沈線を施す。中期後半。6：口縁直下に1本の沈線を施し、以下は原体LRとRLを継位に回転させ、羽状縄文とする。中期後半。7：打製石斧。基部欠損。石質、頁岩。重さ224g。8：石鎌。石質、黒曜石。重さ0.9g。右側縁部を少し欠損する。9：石鎌。石質、黒曜石。重さ0.5g。先端部を少し欠損する。11：綾杉状沈線文、所謂「ハの字文」と2本の沈線がみられる。中期末葉。

第2節 中世の遺物 (PL.10)

中世の遺物は写真図版PL.10（中段）に示してある。いづれも内耳土器の口縁部破片である。B-2グリッドから出土した。

第3節 江戸時代の遺構と遺物

第1項 江戸時代の遺構 (Fig.14, PL.9)

土坑が2基発見された。これらからは、ともに古錢が出土したことによって土壙墓と判断した。

1号土壙墓

直径約65cmで、ほぼ円形を呈する。深さ約40cm。出土遺物は、寛永通寶1枚(Fig.15-3, PL.10下段-3)、□□通□とだけ読めるもの1枚。都合、古錢は2枚出土した。

2号土壙墓

長椭円形を呈する。長径約110cm。短径約70cm。深さ約30cm。出土遺物は、寛永通寶2枚(Fig.15-1・2, PL.10下段-1・2)、その他、古錢が、4枚出土したが接着していて判読不可能であった。他には、煙管と思われるもの、木片が出土した。

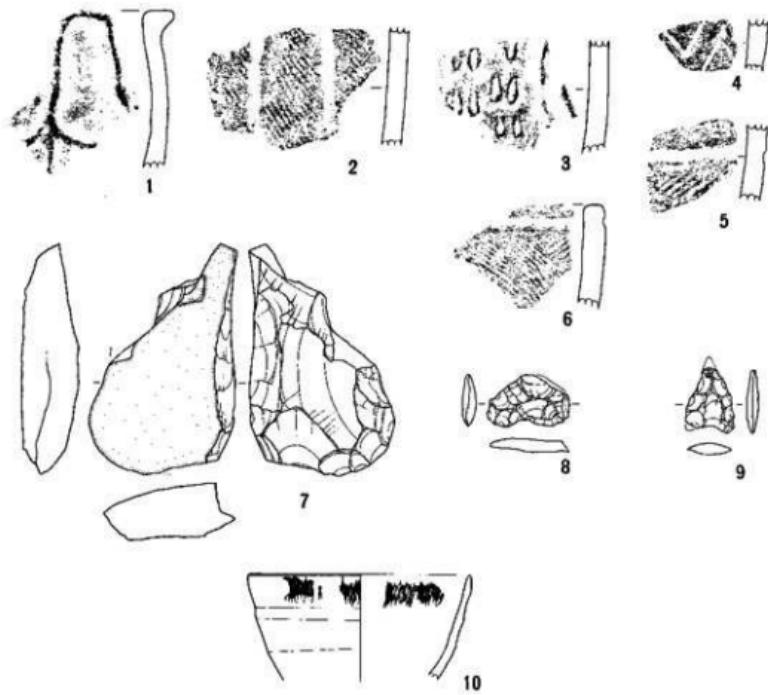


Fig. 13 出土遺物 (1 ~ 7 + 10 + 11 : S=%, 8 + 9 : S=%)

第2項 江戸時代の遺物 (Fig. 13-10, PL. 10)

Fig. 13-10 : PL. 10上段右下 : オロ茶碗。18世紀のものと思われる。

寛永通寶について：確実に寛永通寶といえるものは1、2号土壙墓出土の3枚である。寛永通寶は、1626(寛永3)年から1869(明治2)年までの243年間鋳造され、その種類は数百に及ぶという。故に、鋳造年の特定は不可能であった。

第4節 時期不明の遺構 (Fig. 16, PL. 8)

1号掘立柱建物跡

北東-南西方向に2ヶ所、北西-南東方向に2ヶ所柱穴を有する掘立柱建物跡である。各柱穴からは遺物は出土しなかった。掘立の規模は、北東-南西方向約380cm、北西-南東方向約420cm。

2号掘立柱建物跡

北東-南西方向に3ヶ所及び2ヶ所、北西-南東方向に3ヶ所柱穴を有する掘立柱建物跡である。各柱穴からは遺物は出土しなかった。掘立全体の規模は、北東-南西方向約370cm、北西-南東方向約390cm。

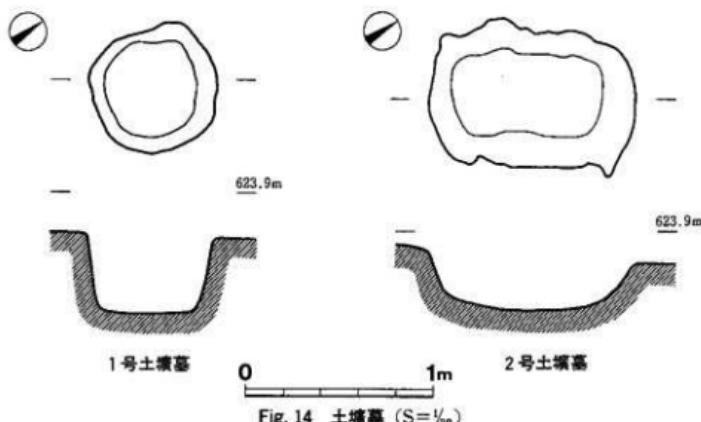


Fig. 14 土壙墓 ($S = \frac{1}{50}$)



Fig. 15 古銭 ($S = \frac{1}{50}$) (1・2 : 2号土壙墓、3 : 1号土壙墓)

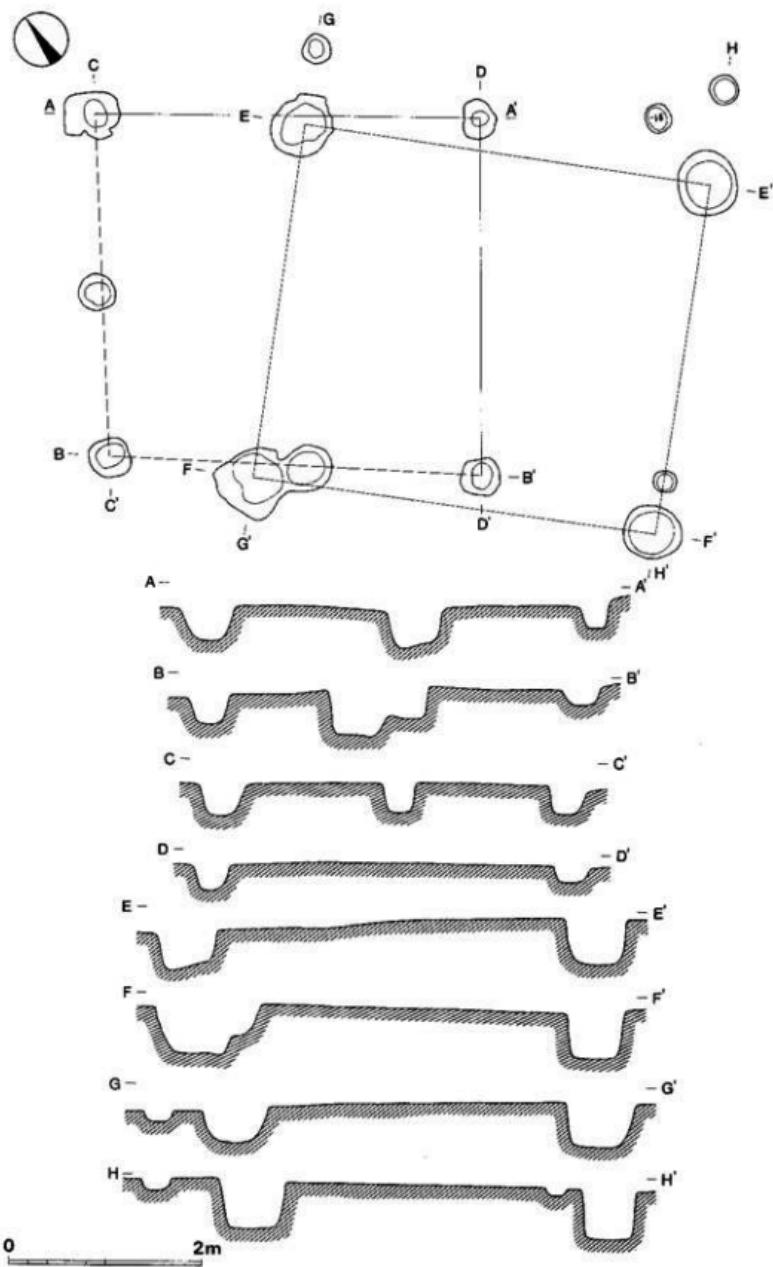


Fig. 16 掘立柱建物跡 ($S = \frac{1}{10}$) (水糸高: 624.6 m)

第5章 中村道祖神遺跡の調査

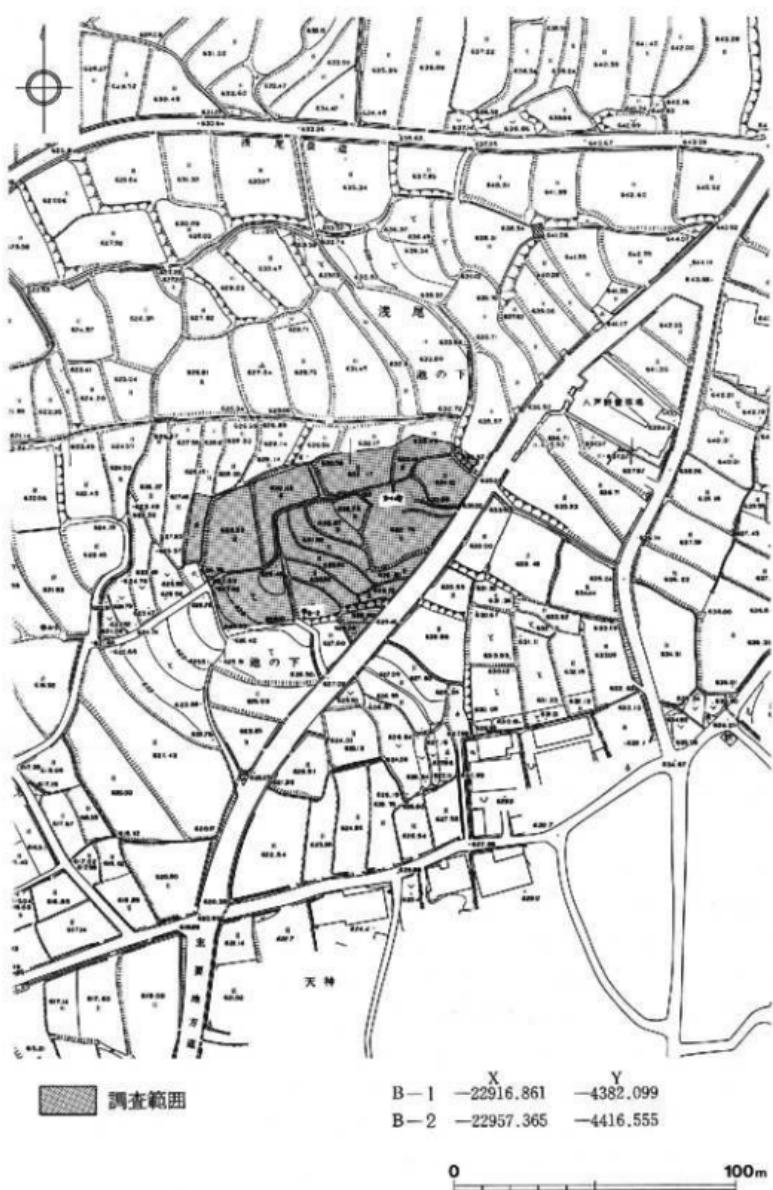


Fig. 17 中村道祖神遺跡調査範囲 ($\frac{1}{2000}$) (XとYは第49系の座標値)

第1節 層序 (Fig.18, PL.38)

土層の把握に際しては、4号土坑の西壁を利用した。約2m50cm下の礫層まで掘り下げて層の観察を行なった。以下の、記述にあたっては、発掘調査中の観察を主としながら、会田氏の鉱物分析の結果も参考にした。

- I層 7.5YR4/6：褐色ローム (II・III層よりもやわらかい)
- II層 10YR4/6：褐色ハードローム
- III層 10YR5/6：黄褐色ハードローム
- IV層 7.5YR5/8：明褐色バミス。Pm-1A。
- V層 2.5Y7/1：灰白色粘土層。Pm-1Aが粘土化したもの。
- VI-a層 VI-b層上部の鉄分が酸化したところ。
- VI-b層 5Y5/1：灰色粘土層。
- VII層 細層

第2節 繩文時代の遺物

第1項 土器 (Fig.20-21-23)

縄文土器は、中期のものが少量出土した。小破片や無文が主体であった。以下、比較的の文様がはっきりした3点について説明する。

21：口唇部から平行に隆線を施す。また、中央に渦巻文がみられる。中期後半と思われる。22：蛇行沈線文がみられる。23：無文地に沈線を施す。中期末～後期初頭と思われる。

第2項 石器 (Fig.19-1~9, PL.37-1~9)

- 1：石鏃。1号住居址の確認面にて出土。石質：黒曜石。重さ0.6g。
- 2：石鏃。表採。石質：黒曜石。重さ0.5g。石鏃は1、2の他に脚部の破片が1点ある。
- 3：打製石斧。103号土坑出土。石質：頁岩。重さ97g。
- 4：打製石斧。表採。石質：砂岩。重さ243g。盤形を呈する。
- 5：打製石斧。表採。石質：頁岩。重さ189g。短冊形を呈する。
- 6：打製石斧。表採。石質：ホルンフェルス。約1/2を欠損している。重さ95g。両側縁に剥離がみられるが表面と裏面は、風化が著しく剥離の状況は不明である。
- 7：磨石・凹石：43号土坑出土。石質：安山岩。重さ82g。全体によく磨られている。表面中央は、

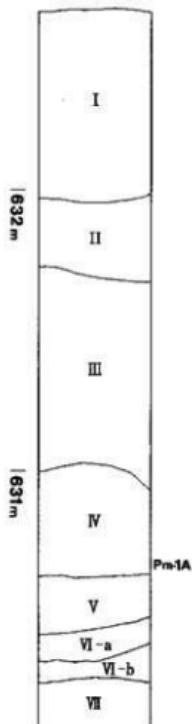


Fig. 18 層序 ($S = \frac{1}{2}m$)

敲打によって円形に約1mmくぼむ。

8：磨石。表採。石質：安山岩。重さ293g。実測図の下部と裏面は欠損している。

9：磨製石斧。52号土坑出土。石質：頁岩。重さ57g。基部と刃部を欠損する。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に関しては、土坑1基と、それに伴う土器1個体分が出土した。弥生時代の遺構・遺物の発見は、明野村においては今回が初めてである。以下、遺構・遺物の概略を記す。

93号土坑 (Fig. 58, PL. 33)

調査区域の東端に位置する。平面形は、不整円形で直径約190cm、深さ55cm。遺物は弥生時代の土器1個体分が覆土から出土した (Fig. 23-22, PL. 13-2・33)。水神平系条痕文土器とされるものである(中山1985)。口縁部で少し外反する深鉢で、口唇部には山形小突起がある。器面には条痕文が施され、底部には木葉痕を有する。また、土器内面には、初の圧痕がある (PL. 13-2)。

第4節 平安時代の遺構と遺物

第1項 住居址と遺物

1号住居址 (Fig. 21, PL. 11)

概要 覆土は削平によって大半が失われていた。Fig. 21の破線は、わずかに残っていた覆土の範囲を示す。その厚さは、竈周辺以外は、1cmにも満たないものであった。竈は、火床部の若干のくぼみと焼土がわずかに残存していた。住居址には2つの小土坑が付随する。小ピットが5つあるが住居址に伴うものか否か不明である。また、25・113号上坑と重複する。

遺物 (Fig. 22-1・2, PL. 13-1) 1：土師器甕。外面は縦ハケメ、内面は横ハケメ。2：土師器杯。内部器体部に暗文あり。器体部下半に斜めヘラケズリ。IX-X期に属すると思われる

時期 出土遺物からIX-X期と思われる。

2号住居址 (Fig. 21, PL. 11)

概要 1号住居址同様に覆土は削平され大半が失われていた。Fig. 21の破線は、わずかに残っていた覆土の範囲を示す。竈は、火床部の若干のくぼみと焼土がわずかに残存していた。残存する覆土の周囲に小ピットがあるが住居址に伴うものか否か不明である。

遺物 出土遺物は、土師器杯1点だけである。Fig. 22-3, PL. 13-3：土師器杯。内黒土器。暗文なし。XI期に属すると思われる。

時期 出土遺物から判断すると XI期と思われる。

3号住居址 (Fig. 21, PL. 12)

概要 削平によって造構の大半が失われ甕の周囲だけが残存する。甕南側に浅いくぼみがある。

遺物 (Fig. 22・23, PL.13・14)

4 (PL.14-4) : 土師器甕。外面は縦ハケメ、内面は横ハケメ。5 (PL.14-3) : 土師器甕。外面は縦ハケメ、内面は横ハケメ。6 : 土師器甕。内部器体部に暗文がある。器体部下半に斜めヘラケズリあり。IX-X期と思われる。7 (PL.13-5) : 土師器甕。内部器体部に暗文がある。器体部下半に斜めヘラケズリあり。口径に対して底径は小さく、口径>底径×2の領域にある。IX-X期と思われる。8 (PL.14-6) : 土師器甕。黒色土器(内外面ともに黒色)。内部器体部に暗文がある。器体部下半に斜めヘラケズリあり。以上のことよりX期に属すると考える。9 : 土師器甕。内部器体部に暗文がある。器体部下半には斜めのヘラケズリがある。IX-X期。10 : 土師器甕。器体部下半には斜めのヘラケズリがある。11 : 土師器皿。内外面ともにナデ調整がみられる。12 (PL.14-7) : 土師器皿。器体部下半は横位回転ヘラケズリ。器体部には若干のくびれがみられる。底部は回転ヘラケズリ。IX-X期のものと思われる。13 (PL.14-1) : 土師器甕。外面は縦方向のハケメ。内面は、口縁部が横ハケメ。器体部は、ナデ調整である。14 (PL.14-5) : 土師器甕。外面は縦ハケメ、内面はロクロ整形(横ハケメが若干残る)。15 : 土師器甕。内部器体部に暗文がある。器体部下半に斜めヘラケズリあり。IX-X期のものと思われる。16 : 土師器甕。内部器体部にかすかに暗文がみられる。器体部下半に斜めヘラケズリが観察できる。IX-X期に属すると思われる。17 (PL.13-4) : 土師器甕。内部器体部に暗文がみられる。器体部下半に斜めヘラケズリが施されている。口径に対して底径は小さく、口径>底径×2の領域にある。時期は、IX-X期と思われる。18 : 土師器甕。内・外面ともにナデ調整。19 (PL.13-6) : 須恵器甕。底部は回転糸切り未調整。内・外面に十字形の墨書きのようなものが書かれている。口径に対して底径は小さく、口径>底径×2の範囲にある。IX期と思われる。20 : 土師器皿。内部器体部に同心円状の暗文がみられる。底部の大部分を欠損するので、暗文が、みこみ部にまで及ぶのか否かはわからない。器体部下半は横位回転ヘラケズリ。IX-X期。21 (PL.14-2) : 土師器甕。外面は縦ハケメ、内面は、横ハケメ。口縁部は、内・外面ともにナデ調整。

註：平安時代の土器については、坂本・末木・堀内（1983）の研究を参考にした。

I 期：	8世紀第1四半期	VII 期：	9世紀第4四半期
II 期：	8世紀第2四半期	IX 期：	10世紀第1四半期
III 期：	8世紀第3四半期	X 期：	10世紀第2四半期
IV 期：	8世紀第4四半期	XI 期：	10世紀第3四半期
V 期：	8世紀第4四半期後半から 9世紀第1四半期前半	XII 期：	10世紀第4四半期
VI 期：	9世紀第2四半期	XIII 期：	11世紀前半
VII 期：	9世紀第3四半期	XIV 期：	11世紀後半
		XV 期：	12世紀前半



Fig. 19 出土遺物（石器）(1・2 : 1/2, 3~12 : 1/2)

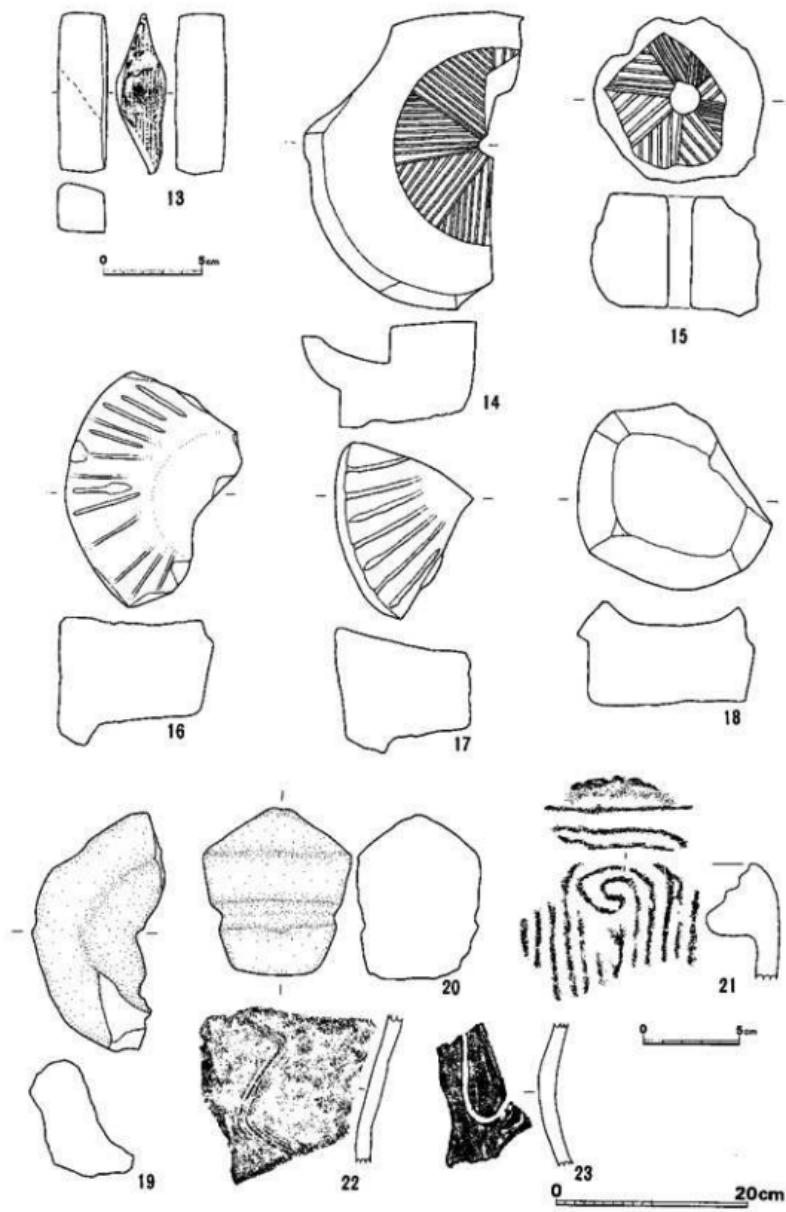


Fig. 20 出土遺物（石器・石製品・土器）(13・21~23 : 1/2, 14~20 : 1/4)

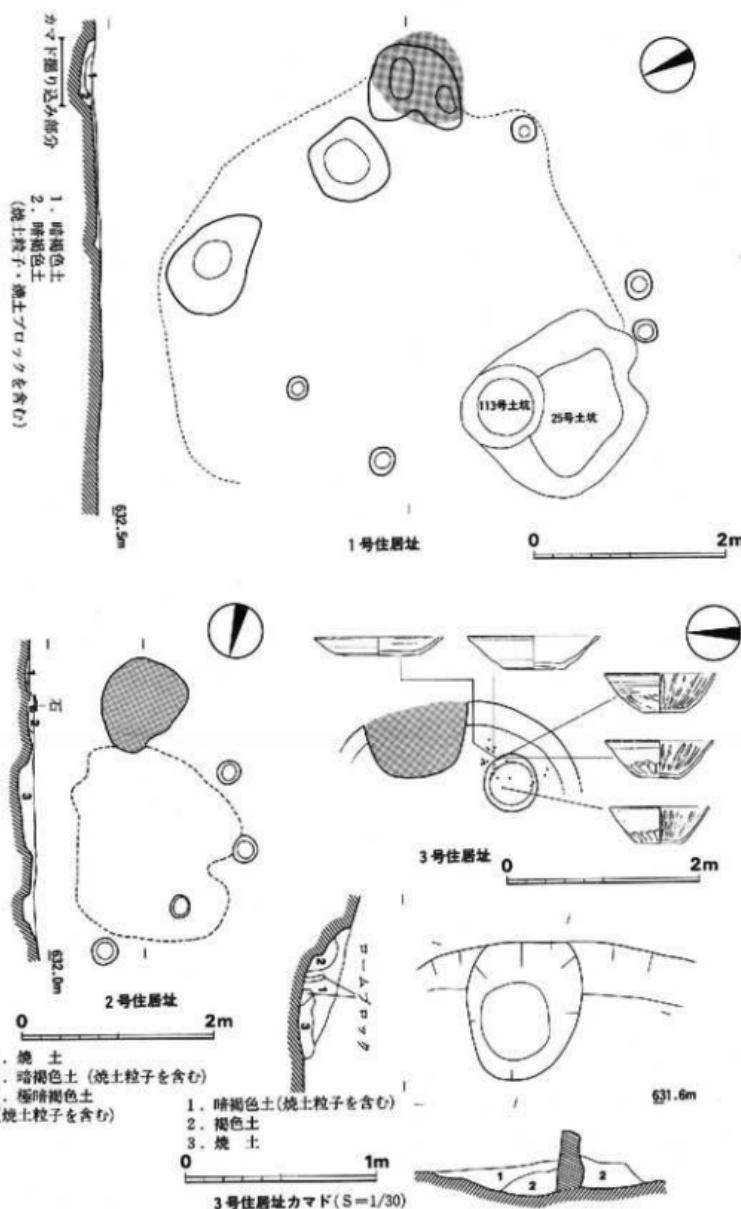


Fig. 21 1・2・3号住居址 ($S = \frac{1}{30}$)

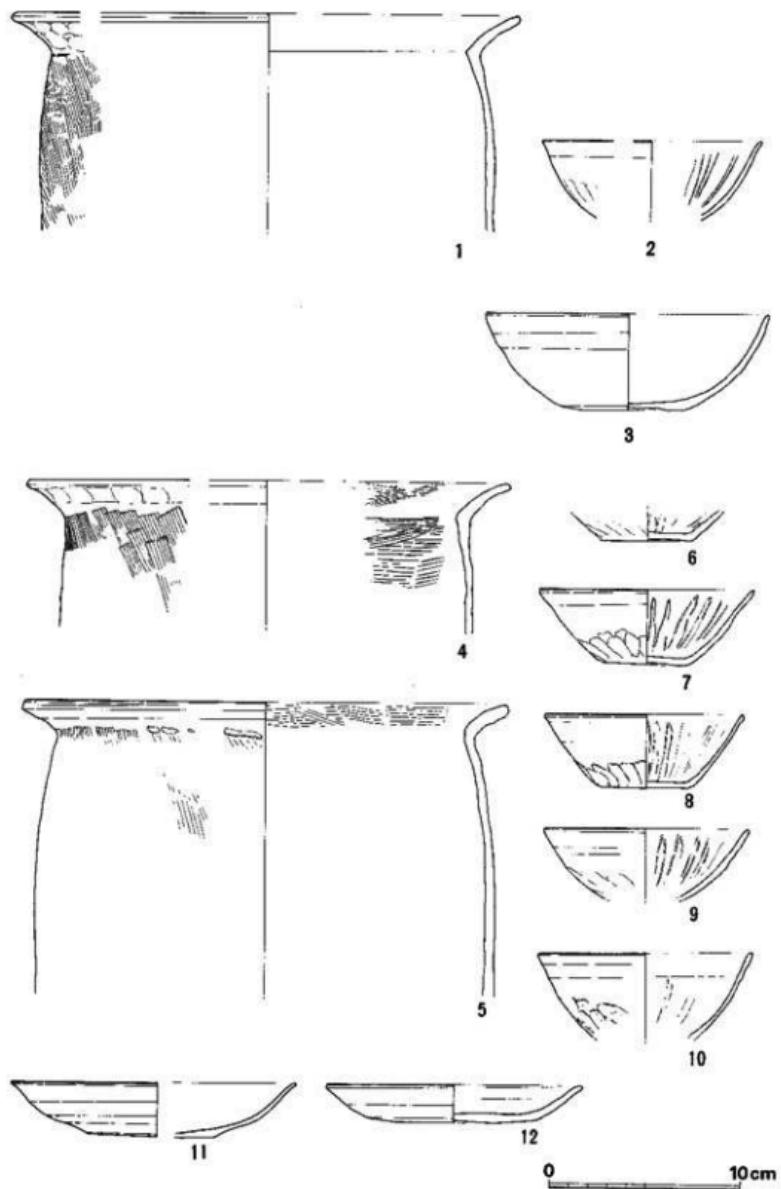


Fig. 22 1·2·3号住居址出土土器

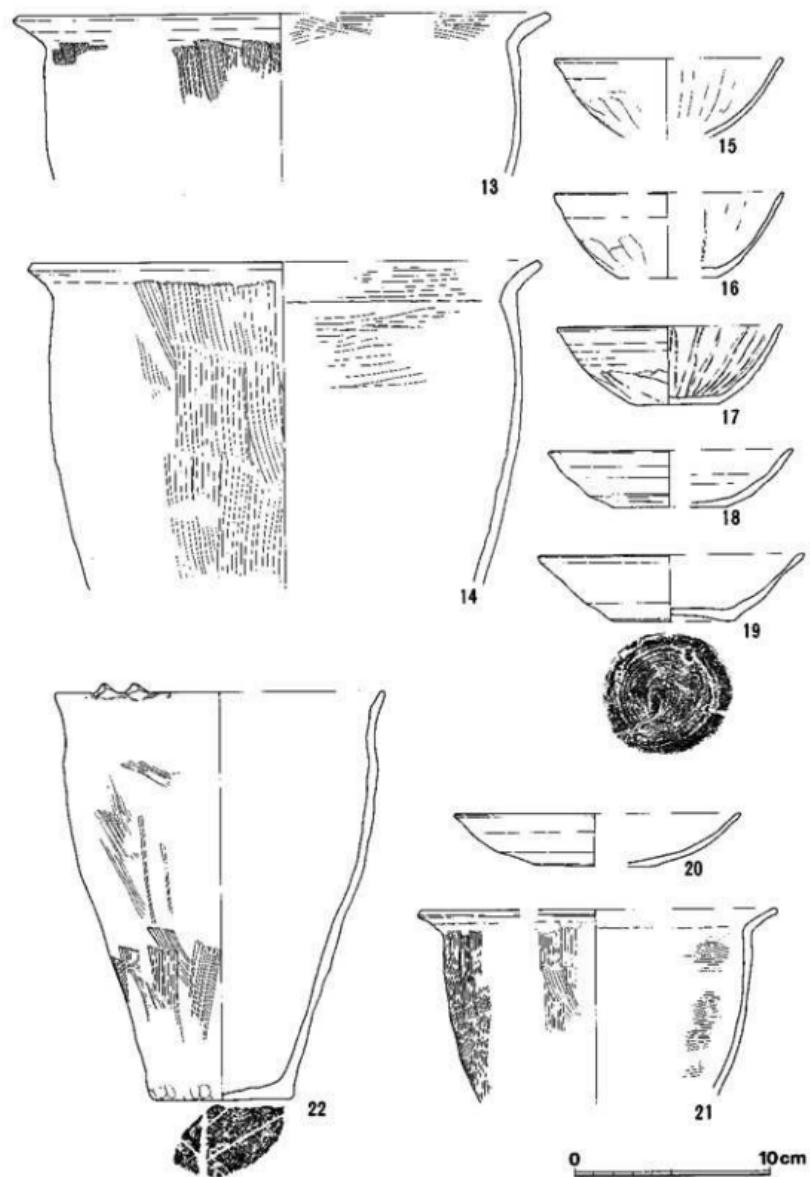


Fig. 23 3号住居址・93号土坑出土土器

第5節 中世の遺構と遺物

第1項 地下式坑

地下式坑は45基発見された。これらについて、調査区域の北に位置するものから概略を記す。

91号土坑 (Fig.24, PL.24)

地下室天井が崩落した状態で発見された。最東端に位置する地下式坑である。

主軸：北—南

地下室の状況：地下室の平面形は長方形を呈する。長辺約240cm、短辺約160cm。深さは、中央付近で約130cm。坑床から地下室北側に向かってなだらかに傾斜している。高低差は、約30cm。

堅坑：地下室の短辺側に位置する。

遺物：土師器 3点。

88号土坑 (Fig.24, PL.23)

地下室天井が崩落した状態で発見された。87号土坑と南側で重複する。互いの先後関係は、不明である。

主軸：北北西—南南東

地下室の状況：地下室の平面形は長方形を呈する。長辺約380cm、短辺約150cm。深さは、中央付近で確認面から約200cm。床面はほぼ平坦である。

堅坑：87号土坑と重複しているので堅坑は、87号土坑地下室床に坑床の凹みをわずかに残すだけである。堅坑の位置は、地下室の短辺側である。

遺物：なし

117号土坑 (Fig.25, PL.24)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

地下室の状況：地下室の平面形はほぼ橭円形を呈する。長径約190cm、短径約160cm。中央部の深さは、約140cm。床面は、基本層序のVII層（礫層）上面であるため凹凸がある。床面が礫層まで達しているのは117号土坑と9号土坑だけである。

堅坑：しいていえば地下室の長辺側に位置する。テラス状の施設を有する。地下室床面とは、約20cmの差がある。

遺物：なし。

3号土坑 (Fig.25, PL.15)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：西－東

地下室の状況：地下室の平面形は不整な長方形を呈する。長辺の最長約300cm、短辺約140cm。深さは、中央付近で約200cm。床面は、北へ向かってわずかに傾斜する。

豊坑：地下室の長辺側に位置する。

遺物：土師質土器1点、内耳土器1点（Fig.50-20・PL.34-3）。

87号土坑（Fig.26, PL.23）

地下室天井が崩落した状態で発見された。2号土坑、88号土坑と重複するが、互いの先後関係は、不明である。

主軸：北西－南東

地下室の状況：地下室の平面形は長楕円形で、長径約400cm、短径約190cm。土坑確認面から床面までは、中央部で約140cmである。床面は平坦で坑床との段差はない。

豊坑：地下室の短辺側に位置する。

遺物：なし。

2号土坑（Fig.26, PL.15）

地下室天井が崩落した状態で発見された。東側で87号土坑と重複するが、互いの先後関係は、不明である。

主軸：北－南

地下室の状況：平面形は不整形を呈する。最長部約320cm、最短部約160cm。土坑確認面から床面までは、中央部で約200cmである。床面は、ほぼ平坦である。

豊坑：地下室の短辺側に位置する。

遺物：なし。

1号土坑（Fig.27, PL.15）

地下室天井が崩落した状態で発見された。107号土坑と重複するが、互いの先後関係は、不明。

主軸：西南西－東北東。

地下室の状況：地下室の平面形は長楕円形を呈する。長径約280cm、短径約200cm、深さは、中央付近で約90cm。床は、107号土坑との重複部分に向かって傾斜する。高低差は、約40cmある。

豊坑：107号土坑との重複で位置は不明。地下室の短辺側に位置していたと考えられる。

遺物：土師器2点。地下室の床面直上で広い範囲にわたって炭化物が発見された。人為的に敷いた植物質のものが炭化したものと考えられる。外山秀一氏（山梨文化財研究所）の同定による

と、ウシクサ属（ススキ・チガヤなど）が主体でイネが若干含まれている、ということである。

4号土坑 (Fig. 27, PL.16)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北北西—南南東

地下室の状況：地下室の平面形は長方形を呈する。長辺約360cm、短辺約170cm。中央付近での深さは、約200cm。床は平坦で、坑床との段差はない。

豊坑：地下室の短辺側に位置し、断面は、円筒形を呈する。

遺物：土器片が1点出土したが、所属時期等は不明。

6号土坑 (Fig. 28, PL.16)

地下室天井が崩落した状態で発見された。西側コーナーが9号土坑と重複し、南側で18号土坑と重複する。さらに、107号土坑とも重複する。それぞれとの新旧関係は不明だが、9号土坑との重複部分だけは、9号土坑の方がレベルが低い。

主軸：西北西—東南東

地下室の状況：地下室平面形は、長辺約340cm、短辺約160cmで不整長方形をしていたものと思われる。深さは中心近くで、160cm位である。

豊坑：明確に豊坑とわかるものは残っていないが、107号土坑か18号土坑との重複部にあったものと考えられる。

遺物：内耳土器8点。土師質土器14点 (Fig. 49-5・11)

18号土坑 (Fig. 28, PL.16)

地下室天井が崩落した状態で発見された。北側で6号土坑、東側で107号土坑と重複する。新旧関係は不明である。

主軸：不明。

地下室の状況：元来は、長方形をしていたものと思われる。長辺約180cm、短辺約160cm。深さは、中央部で約160cm。

豊坑：不明。6号土坑との重複部分にあったものと思われるが、調査時にはわからなかった。

遺物：なし。

107号土坑 (Fig. 28, PL.24)

1号土坑、6号土坑と重複するが、新旧関係は不明。ちょうど1号土坑豊坑部と6号土坑とをトンネル状に結ぶかこうになっている。

主軸：西北西－東南東

地下室の状況：幅約120cm、長さ約360cmのトンネル状。床面から天井までは、約100cmある。横断面形はカマボコ状を呈する。

豊坑：不明

遺物：なし。

7号土坑 (Fig. 29, PL. 17)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：西北西－東南東

地下室の状況：長辺約310cm、短辺約150cm。中央部付近の深さ約100cmで平面形は、長方形を呈する。地下室床面はほぼ平坦であるが、坑床が床面よりも約15cm高くなっている。

豊坑：地下室の短辺側に位置する。

遺物：石臼破片 1点。

9号土坑 (Fig. 29, PL. 17)

東側にて6号土坑と重複する。地下室の天井は崩落していなかったが、調査に安全を期するために、地表から2m×2mの豊坑を天井部に穿って地下室の調査を行なった。

主軸：西南西－東南東

地下室の状況：平面形は橢円形を呈する。長径約360cm、短径約240cm、床面はほぼ平坦であるが、部分的に基本層序のVII層（裸層）まで床が達しているので縁が出ているところもある。工具痕は側面部にみられるが天井部は剥落が著しく不明である。地下室横断面形はカマボコ状を呈する。地表面から天井までの厚さは約80cm。床面から天井までは約150cmある。

豊坑：2ヶ所ある。南側の豊坑にはテラス状の施設がある。テラスと地下室床面との高低差は約50cmある。北側の豊坑は5号土坑の豊坑と接し、118号土坑と重複する。豊坑が同時のものか、時間差があるものなのかは不明である。

遺物：土師質土器 5点。時期不明の土器 3点。

5号土坑 (Fig. 30, PL. 16)

地下室が完全形のまま発見された。9号土坑豊坑と接し、118号土坑と重複する。

主軸：北西－南東

地下室の状況：地下室の平面形は長方形で、長辺約240cm、短辺約180cm。天井の高さは、高いところで約120cm、床面はほぼ平坦。豊坑は地下室の短辺側に位置する。天井の厚さは約80cm。横断面は台形を呈する。地下室側面には、工具痕を鮮明にのこすが、天井部は、剥落が著しい。

豊坑：横断面は、ロート状。坑床まで約200cmある。

遺物：なし。

11号土坑 (Fig.30, PL.17)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北－南

地下室の状況：平面形は不整円形を呈し、長径約200cm、短径約160cm。確認面から床までは約180cmある。

豊坑：テラス状の施設がある。地下室床面との高低差は約50cm。

遺物：内耳土器2点。時期不明土器1点。

17号土坑 (Fig.31, PL.18)

地下室天井の崩落はなかったが、調査の安全を期するために予め天井部分を抜いて調査を行なった。

主軸：西南西－東北東

地下室の状況：平面形は不整形を呈し、最大長約320cm、最大幅約200cmである。深さは中央部付近で約200cm。

豊坑：地下室の短辺部に位置する。坑床は地下室床面よりも約30cm低い。

遺物：石臼1点 (PL.38-3)。

26号土坑 (Fig.31, PL.18)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北東－南西

地下室の状況：平面形は長方形を呈し、長辺約200cm、短辺約140cmで、深さは中央部付近で約210cm。地下室側面に工具痕が鮮明にのこる。地下室床面に小土坑がある。長辺約60cm、短辺約50cm、深さ約20cmの長方形を呈する。小土坑からの出土遺物はない。床面はほぼ平坦。

豊坑：地下室の短辺側に位置する。

遺物：なし。

39号土坑 (Fig.32, PL.19)

地下室の第1室は天井崩落状態で、第2室は完形状態で発見された。

主軸：北東－南西

地下室の状況：第1室の平面形は不整橢円形で、長径約240cm、短径約190cm。中央部の深さは

地表から約200cmある。床面は第2室に向かってなだらかに傾斜する。第2室床面の平面形は橢円形で、長辺約180cm、短辺約160cm、床から天井までは約90cmである。地表から地下室天井までの厚さは約160cm。工具痕は側面・天井に明確に残っていた。横断面形は概ね半円形を呈する。床面はほぼ平坦。

竪坑：竪坑は第1室と第2室で共有する。それぞれの短辺部に位置する。

遺物：土師質土器1点。内耳土器1点。時期不明土器3点。

61号土坑 (Fig.32, PL.22)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北北西—南南東

地下室の状況：地下室床面の平面形は長辺約240cm、短辺約180cmで長方形を呈する。中央部付近の深さは約200cm。床面は坑床から北に向かって若干傾斜する。

竪坑：地下室の短辺部に位置する。

遺物：内耳土器2点出土。また、人頭大の環1点、ひで鉢1点(PL.38-1)が地下室床面(平面図Aの地点)から出土した。

43号土坑 (Fig.33, PL.19)

地下室天井が崩落した状態で発見された。東側で44号土坑と若干、重複するが先後関係は不明。

主軸：北西—南東

地下室の状況：地下室平面形は不整形を呈する。最大長約330cm、最大幅約200cm。床面はほぼ平坦。中央部付近の深さは約180cm。

竪坑：地下室長辺の西側コーナー付近に位置する。

遺物：磨石・敲石1点(Fig.19-7, PL.37-7)。土師器1点。土師質土器2点(Fig.50-15, PL.35-2)。時期不明土器1点。

45号土坑 (Fig.33, PL.22)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：西北西—東南東

地下室の状況：地下室床面の平面形は不整形を呈する。最大長約240cm、最大幅約180cm。中央部付近の深さは約140cm。床面は概ね平坦。

竪坑：竪坑は地下室短辺部に位置する。

遺物：土師器2点。

44号土坑 (Fig.34, PL.20)

地下室天井が崩落した状態で発見された。52号土坑・106号土坑・43号土坑と重複する。先後の関係は不明。

主軸：不明

地下室の状況：直径約210cmで不整円形を呈する。深さ約220cm。床面はほぼ平坦。

豊坑：地下室の西側に位置する。106号土坑の豊坑と重複する。

遺物：上師質土器1点。内耳土器1点。中世の土器1点。時期不明土器1点。

52号土坑 (Fig.34, PL.20)

地下室天井が崩落した状態で発見された。44号土坑・106号土坑・65号土坑と重複するが、それらとの関係は不明。

主軸：西一東

地下室の状況：長方形を呈する。長辺約400cm、短辺約200cm。中央部での深さは約160cm。

豊坑：重複によって遺存していないが、地下室の短辺部に位置していたと考えられる。

遺物：磨製石斧1点 (Fig.19-9, PL.37-9)。土師器1点。土師質土器9点 (Fig.49-6・7)。内耳土器14点。多孔石1点 (PL.37-14)。石臼3点。

その他：床面から1号土坑、147号土坑と同様な炭化植物の出土があったが、サンプルを採取する前に、大雨にみまわれ、土といっしょになってしまい採取できなかった。

106号土坑 (Fig.34, PL.20)

地下室天井が崩落した状態で発見された。44号土坑・65号土坑・52号土坑と重複する。新旧関係は不明。

主軸：不明

地下室の状況：不整円形を呈する。長径約240cm、短径約200cmで、深さは約160cm。床はほぼ平坦。

豊坑：44号土坑の豊坑と重複。地下室の東側に位置する。

遺物：なし。

65号土坑 (Fig.34, PL.20)

地下室天井が崩落した状態で発見された。52号土坑・106号土坑・102号土坑と重複する。新旧関係は不明。

主軸：不明

地下室の状況：調査時では、長辺約180cm、短辺約140cmで長方形を呈するが、地下室が他の土

坑と重複しているので詳細は、不明。深さは中央部で150cm。床面はほぼ平坦で坑床との段差はない。

竪坑：地下室の南側に位置する。

遺物：なし。

36号土坑 (Fig. 36, PL. 19)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北一南

地下室の状況：長辺約260cm、短辺約140cmではば長方形を呈する。

竪坑：地下室の短辺部に位置する。断面形は円筒形を呈する。

遺物：内耳土器 1 点。

60号土坑 (Fig. 36, PL. 22)

ほぼ完全な形で遺存していた。

主軸：北北西一南南東

地下室の状況：地下室床面の平面形は方形を呈し、長辺260cm、短辺160cm。天井の横断面形はドーム状を呈する。床面はほぼ平である。側面（壁）には工具痕がある。天井は剥落が著しく、工具痕は観察できなかった。

竪坑：竪坑断面はロート状を呈する。地下室の南東コーナーに位置する。竪坑の地表近くに閉塞石（板状）がつまっていた。

遺物：なし。

その他：すぐ北側が46号土坑であるが重複はしていない。おそらく46号土坑と重複しないような配慮がなされたと思われる。そのために意図的に、竪坑が地下室のコーナーにくるような掘り方をしたと思われる。

35号土坑 (Fig. 37, PL. 18)

地下室天井一部が崩落した状態で発見された。東側にて46号土坑と重複する。また、地下室の真上には、70号土坑（土塙墓）がある。

主軸：西南西一東北東

地下室の状況：台形を呈し、各辺の値はおよそ180cm×320cm×340cm×70cm。深さは最も深いところで約190cm。床面は東側に向かって高くなっている、高低差は約40cm。

竪坑：テラス状の施設を有する。地下室床面との比高は約20cm。地下室の短辺側に位置する。

遺物：縄文中期土器 1 点。土師質土器 2 点(Fig. 49-12)。内耳土器 3 点(Fig. 49-14-PL. 35-

5・6, PL.34-1)。石臼2点。時期不明の土器1点。

46号土坑 (Fig.37, PL.21)

地下室天井が崩落した状態で発見された。西側で35号土坑と重複する。

主軸：不明

地下室の状況：地下室平面形は半円状を呈する。深さは中央部で約120cm。床面は、ほぼ平坦である。

豊坑：2ヵ所ある（エレベーションポイントのAとD'のところ）。

遺物：土師質土器2点。内耳土器1点(Fig.50-19, PL.34-4)。中世の土器1点。古銭6点（治平元口1、□祐□□1<エレベーションポイントD'の入口から出土>景德元口1、洪武通寶2、元豐通寶1）。以上のはかに、アワの様な炭化種子（現在鑑定中）が地下室から出土した。

169号土坑 (Fig.38, PL.28)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北西-南東

地下室の状況：平面形は不整長方形。長辺約220cm、短辺約200cm。深さは中央部で約180cm。床面は、豊坑坑床から東側にむかってゆるやかに傾斜する。高低差は約20cm。

豊坑：豊坑は地下室の短辺側に位置する。

遺物：なし。

64号土坑 (Fig.38, PL.23)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：西南西-東北東

地下室の状況：平面形は、概ね240cm×260cmで方形を呈する。地表面からの深さは中央部で約200cm。床面は地下室東側から豊坑坑床にむかってゆるやかに傾斜する。高低差は約20cm。

豊坑：地下室の西側に位置する。

遺物：繩文土器1点。内耳土器8点(PL.34-2)。土師質土器10点。石臼1点。

69号土坑 (Fig.39, PL.23)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北北西-南南東

地下室の状況：床面の平面形は長方形で長辺約200cm、短辺約150cm。床面はほぼ平坦で、中央部の深さは約120cm。

豊坑：地下室の長辺側に位置する。テラス状の施設を有する。坑床と地下室床面との比高差は約20cm。

遺物：なし。

171号土坑 (Fig.39, PL.28)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北—南

地下室の状況：床面の平面形は、概ね長方形を呈し、長辺約220cm、短辺約160cm。地表からの深さは、中央部で約180cm。床面は北に向かってゆるやかに傾斜する。高低差は、約20cmである。

豊坑：地下室の短辺側に位置する。

遺物：なし。

148号土坑 (Fig.40, PL.25)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：西南西—東北東

地下室の状況：平面形は長辺約260cm、短辺約220cmで長方形を呈する。床面はほぼ平坦。中央付近では地表から約120cmの深さがある。

豊坑：地下室の短辺側に位置する。

遺物：なし。

166号土坑 (Fig.40, PL.25)

地下室天井が崩落した状態で発見された。東側で147号土坑と重複する。互いの新旧関係は不明。

主軸：不明

地下室の状況：地下室は不整形を呈し、地表からの深さは中央付近で約180cmある。

豊坑：地下室の南側に位置する。

遺物：なし。

147号土坑 (Fig.41, PL.25)

地下室天井が崩落した状態で発見された。東側で155号土坑、西側で166号土坑と重複するが、先後関係は不明である。

主軸：不明。

地下室の状況：現存する大きさは、最大長約280cm、最大幅約200cm。深さは中心付近で約180cm。床面は平坦だが、155・166号土坑よりも高い位置にある。

豊坑：残存部はない。

遺物：床面から1号土坑同様の炭化植物が出土した(図面のスクリーン部分)。山梨文化財研究所外山秀一氏の同定によると、ウシクサ属(ススキ、チガヤなど)が主体でシバ属が若干混じる、ということである。

155号土坑 (Fig.41, PL.25)

地下室天井が崩落した状態で発見された。北側で147号土坑と重複するが先後関係は不明である。

主軸：北東－南西

地下室の状況：最大長約320cm、最大幅約260cmで不整長方形を呈す。深さは中央部付近で約180cm。床面はほぼ平坦。

豊坑：地下室の短辺側に位置する。断面形は円筒形を呈していた。

遺物：なし。

168号土坑 (Fig.42, PL.28)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：西南西－東北東

地下室の状況：南側は一部搅乱を受けているが元来は、長方形を呈していたと思われる。地下室の大きさは概ね、520cm×180cmで、地表からの深さは約180cm。床面は、豊坑坑床から北側へゆるやかに傾斜する。高低差は約20cm。

豊坑：地下室の長辺側に位置する。

遺物：なし。

149号土坑 (Fig.42, PL.26)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：西北西－東南東

地下室の状況：平面形は不整長方形を呈する。長辺約320cm、短辺約160cmで、地下室床面までは中央部で約160cmである。床面は、ほぼ平坦である。

豊坑：地下室の長辺側に位置する。

遺物：中国製の白磁皿1点(Fig.49-4, PL.35-4)が、地下室床面の17cm上の所から出土した。

153号土坑 (Fig.43, PL.27)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北北西－南南東

地下室の状況：平面形は長方形を呈する。長辺約200cm、短辺約160cmで、深さは中央部付近で約220cmある。床面はほぼ平坦。

豊坑：長辺側にそれぞれ1ヶ所ずつ、計2ヶ所ある。いずれも坑床部にテラス状の施設を有する。地下室床面との比高差は、西側では約30cm、東側では約60cmある。2つの豊坑が同時のものか否かは、不明。

遺物：縄文土器1点。土師質土器2点。

150号土坑 (Fig.43, PL.26)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北北西－南南東

地下室の状況：平面形は長方形を呈する。長辺約320cm、短辺約160cm。深さは中央部付近で約160cm。床面はほぼ平坦。

豊坑：地下室長辺側に1ヶ所ずつ、計2ヶ所有する。東の豊坑坑床にはテラス状の施設がある。地下室床面との比高差は約70cm。2つの豊坑が同時のものか否かは、不明。

遺物：土師質土器1点。時期不明土器1点。

154号土坑 (Fig.44, PL.27)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北北西－南南東

地下室の状況：床面の平面形は概ね長方形を呈し、長辺約240cm、短辺約180cm。中央部付近の深さは約160cm。床面は南へ向かって傾斜する。南北の高低差は約40cm。

豊坑：地下室短辺側に位置する。

遺物：土師質土器1点。古錢が3点出土したが、名称は不明。

138号土坑 (Fig.44, PL.24)

地下室天井が崩落した状態で発見された。

主軸：北北西－南南東

地下室の状況：床面の平面形は、ほぼ長方形を呈する。長辺約240cm、短辺約180cm。中央部付近の深さは約120cm。床面は北へ向かってわずかに傾斜する。南北の高低差は約20cm。

豊坑：地下室の長辺側に位置する。

遺物：なし。

152号土坑 (Fig.45, PL.27)

地下室天井が崩落した状態で発見された。発見された地下式坑の中で最西端に位置する。

主軸：北北西－南南東

地下室の状況：床面の平面形は長方形を呈する。長辺約400cm、短辺約160cm。中央付近の深さは約120cm。床面はほぼ平坦。

豊坑：地下室の長辺側に位置する。坑床にはテラス状の施設を有する。地下室床面と約20cmの差を有する。

遺物：なし。

156号土坑 (Fig.45, PL.27)

完全形で発見された。豊坑が158号土坑と重複する。

主軸：北－南

地下室の状況：平面形は長辺約230cm、短辺約180cmで長方形を呈する。床面から天井まで約80cm。天井の厚さは約150cm。天井は平坦で、地下室の横断面は長方形を呈する。床面は平坦で坑床と連なる。地下室の入口の高さは、床面から約70cmと非常に低い。

豊坑：断面形は円筒形。地下室短辺側に位置する。

遺物：土師質土器1点が豊坑から出土した。

第2項 土壙墓

100基以上の土坑が発見されたが、そのうち、古銭・骨が出土した14基を土壙墓と判断した。

29号土坑 (Fig.46, PL.30)

主軸：北北西－南南東

形態：橢円形を呈する。長径76cm、短径58cm。深さ12cm。

出土遺物：土師器2点。古銭。

113号土坑 (Fig.46, PL.29)

25号土坑と重複するが、先後関係は不明である。

形態：橢円形を呈する。長径93cm、短径83cm。深さ110cm。

出土遺物：古銭9点（永楽通寶2、大中通寶1、淳化元寶1、景定元寶1、元□□□1、不明3）。

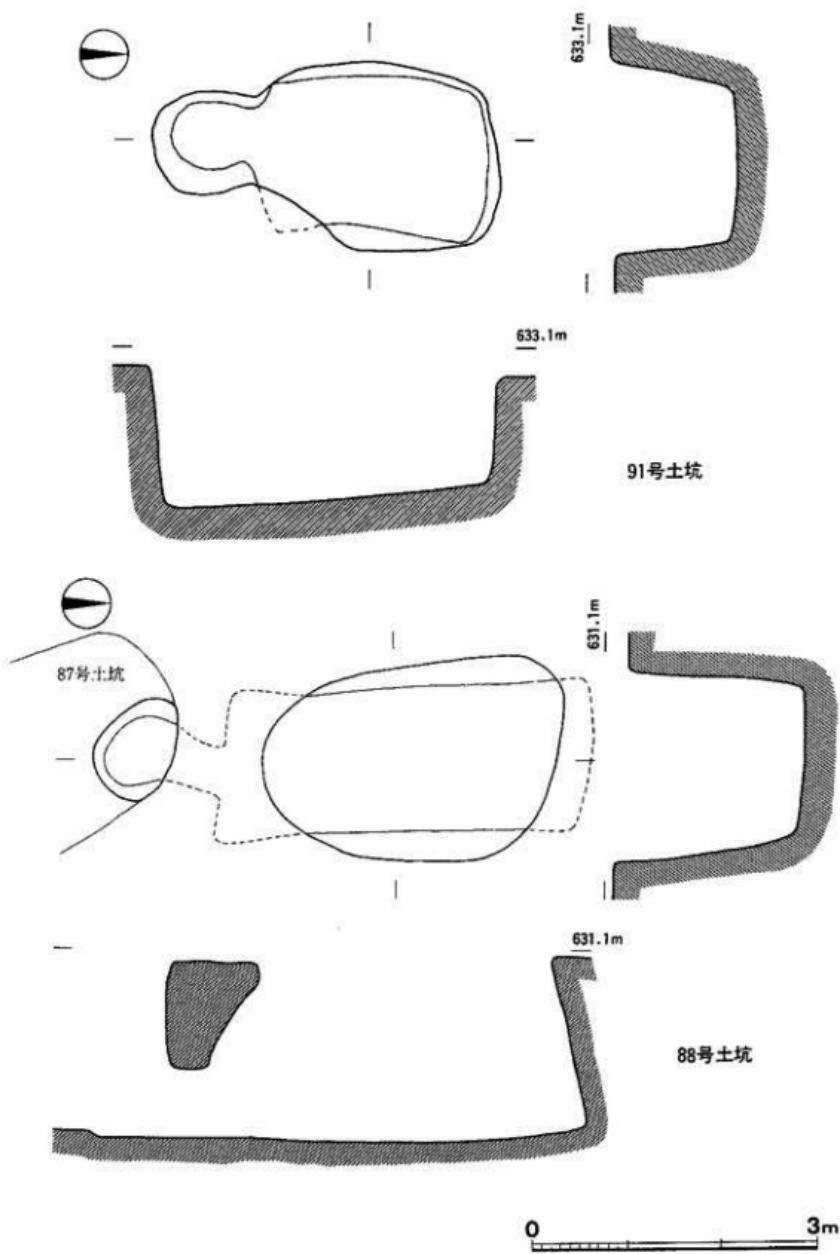


Fig. 24 地下式坑 (91号・88号) S=%

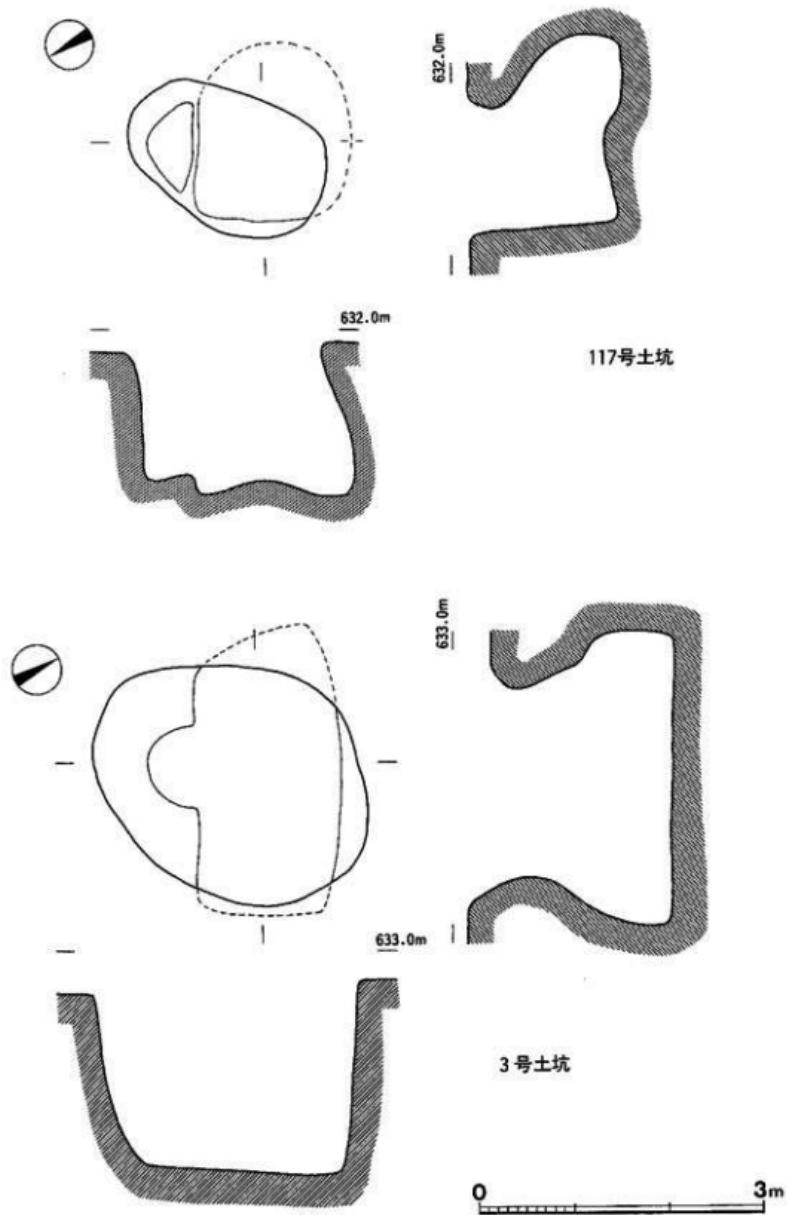


Fig. 25 地下式坑 (117号 · 3号) $S = \frac{1}{4}e$

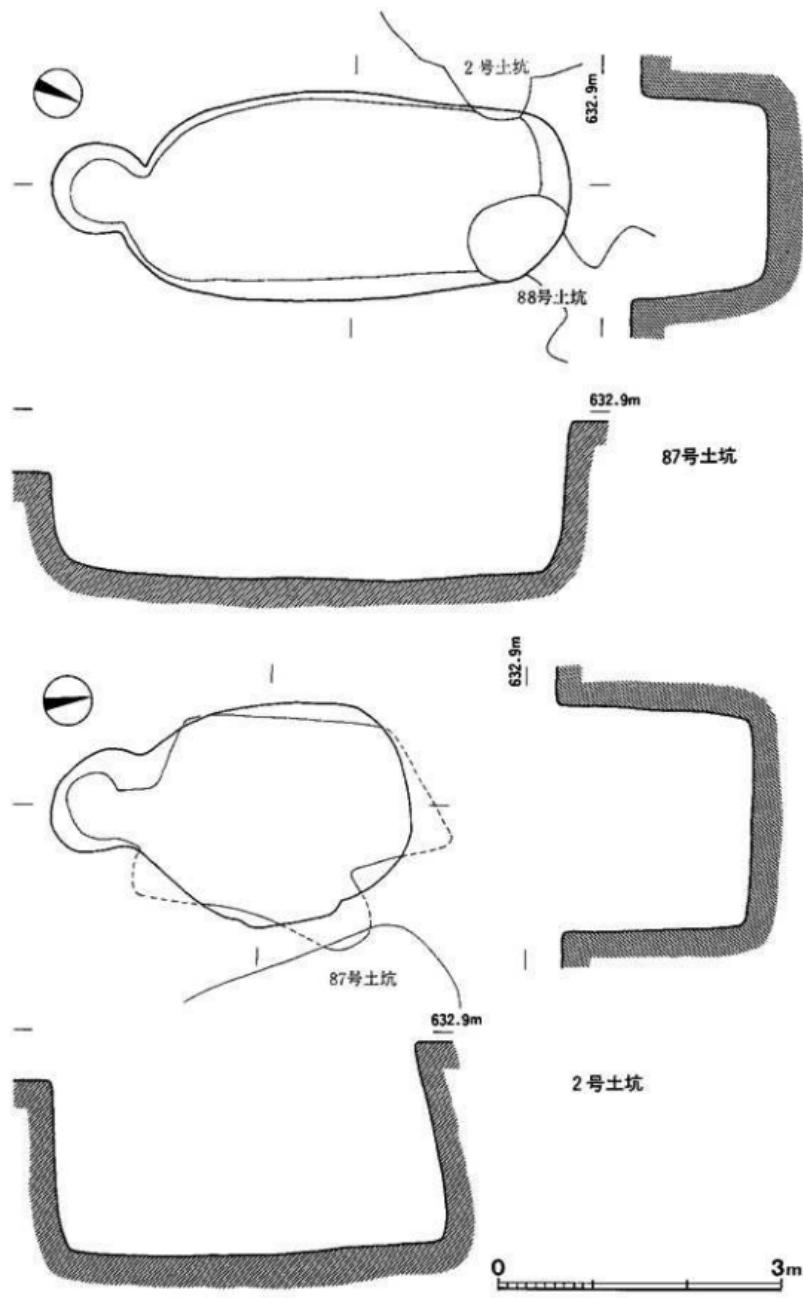


Fig. 26 地下式坑 (87号・2号) $S = \frac{1}{40}$

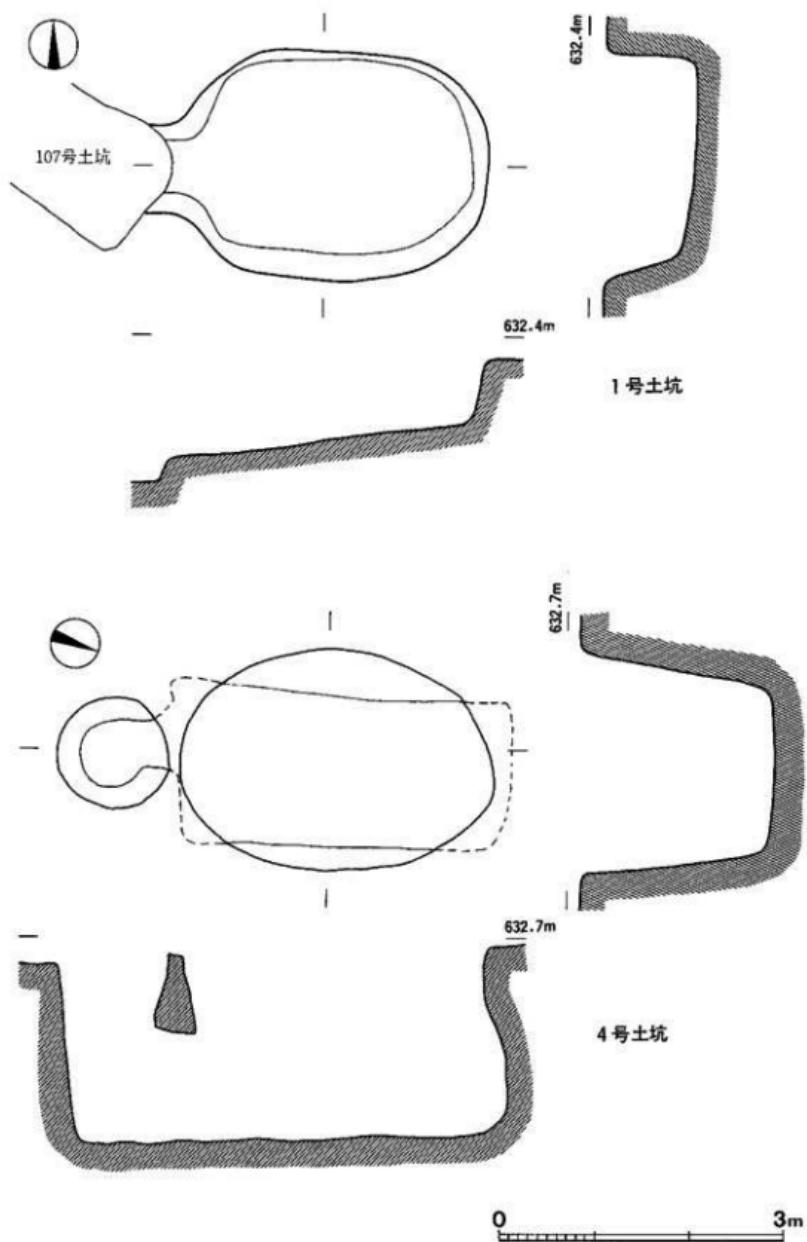


Fig. 27 地下式坑（1号·4号） $S=\frac{1}{60}$

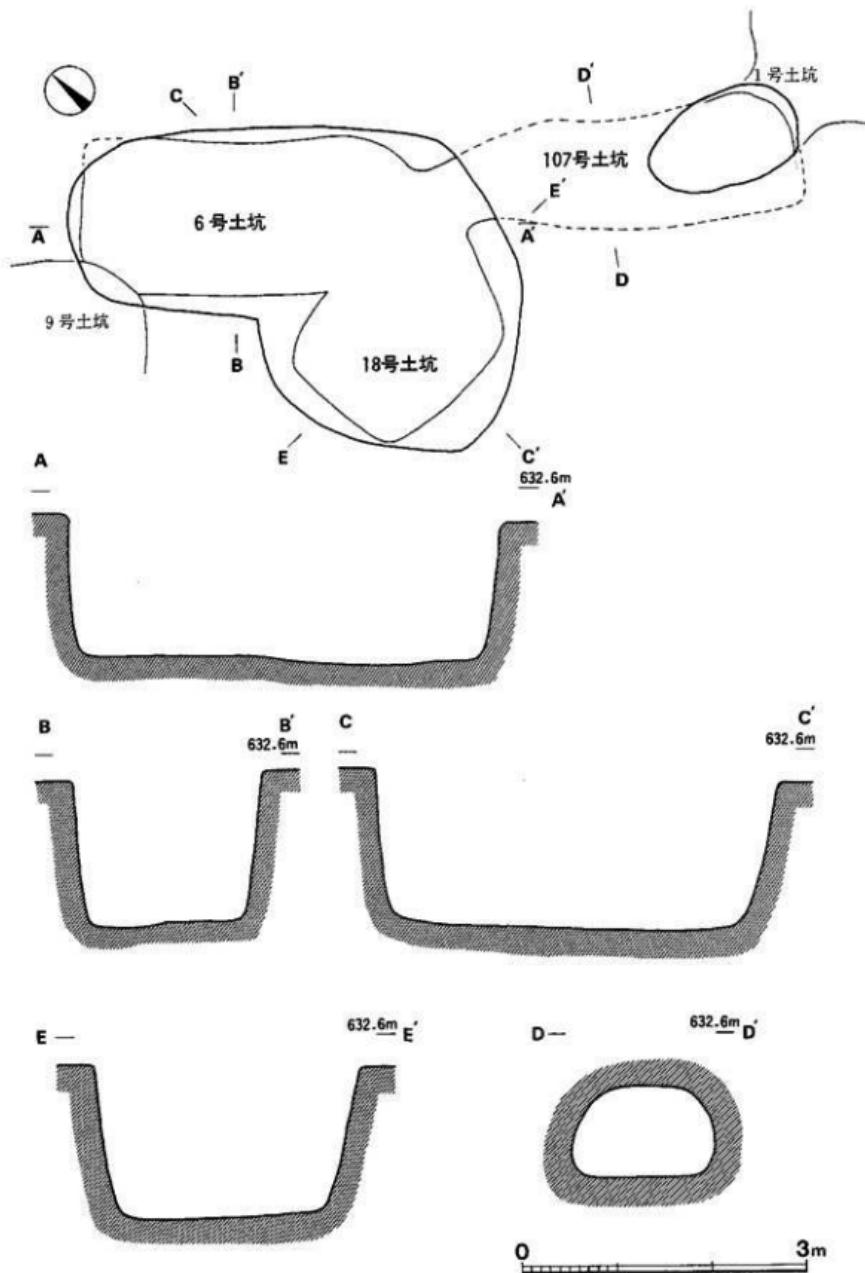


Fig. 28 地下式坑 (6号・18号・107号) $S = \frac{1}{60}$

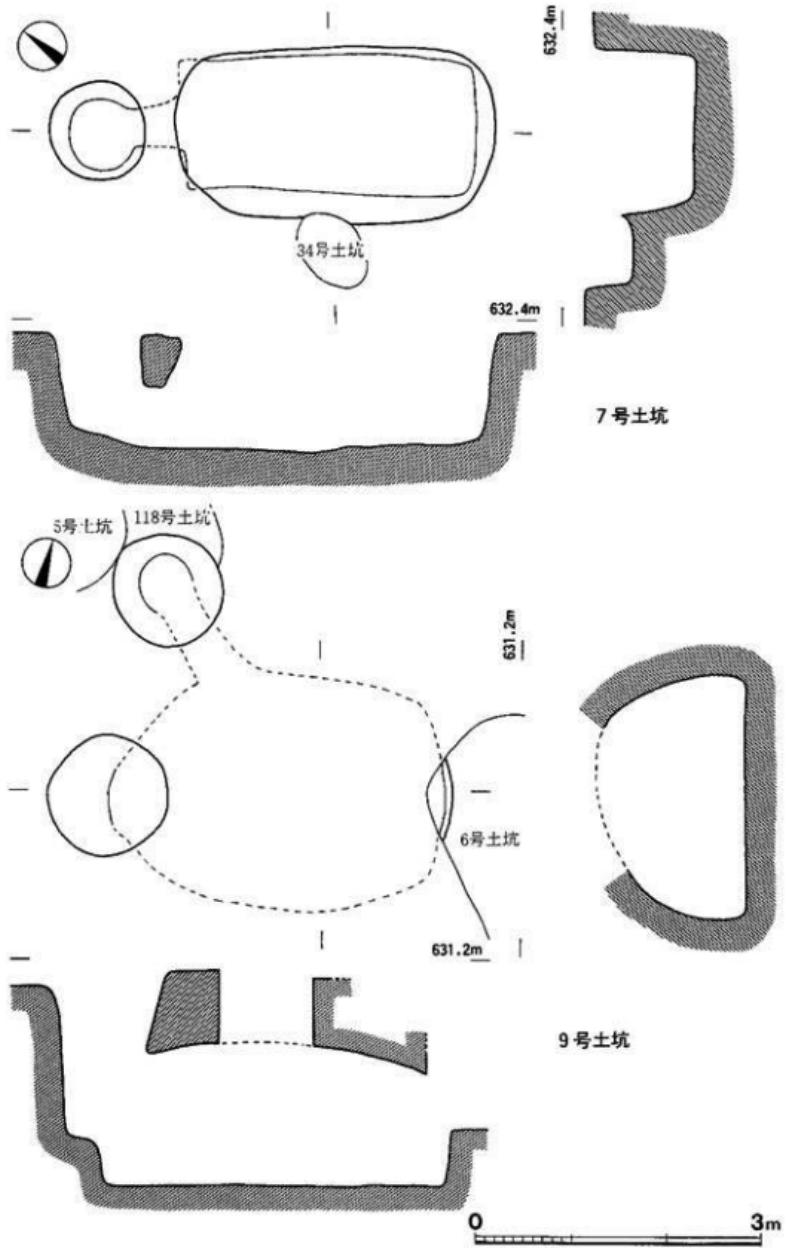


Fig. 29 地下式坑 (7号·9号) S=1%

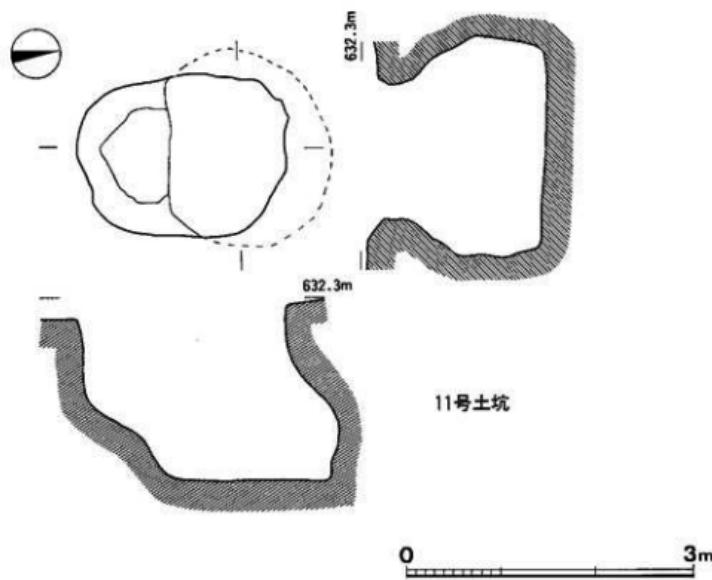
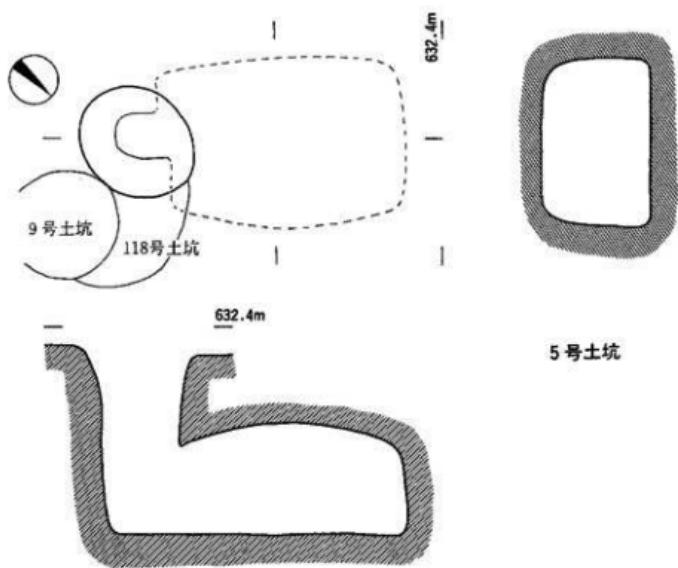


Fig. 30 地下式坑 (5号 + 11号) S=1/60

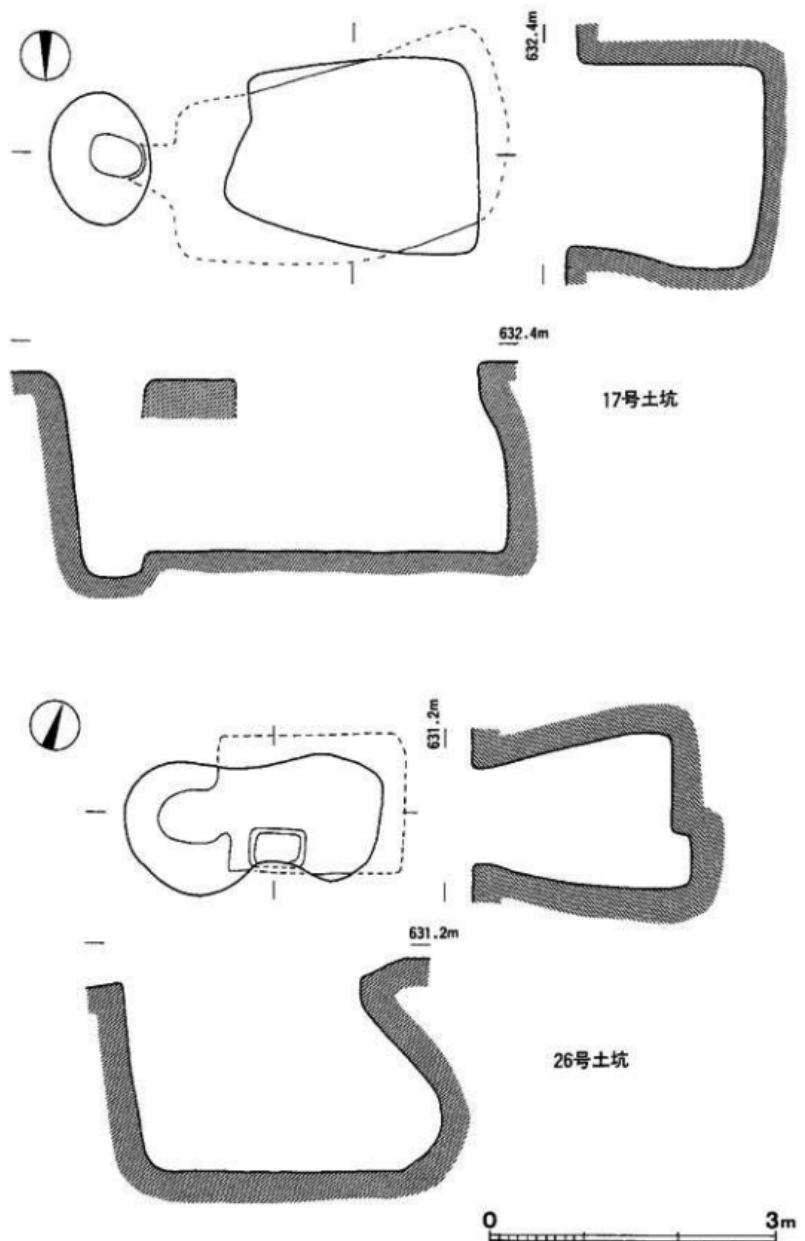


Fig. 31 地下式坑 (17号・26号) $S = \frac{1}{50}$

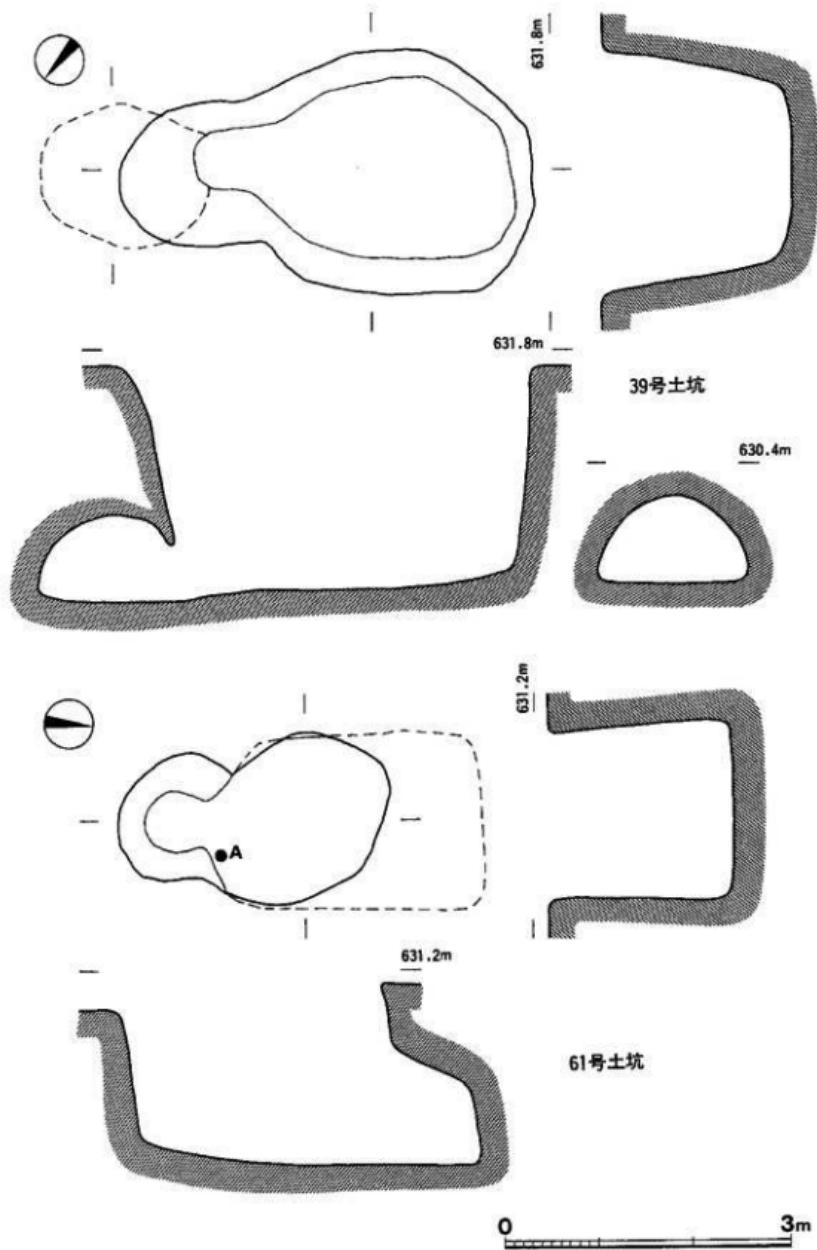


Fig. 32 地下式坑 (39号·61号) S=1/50

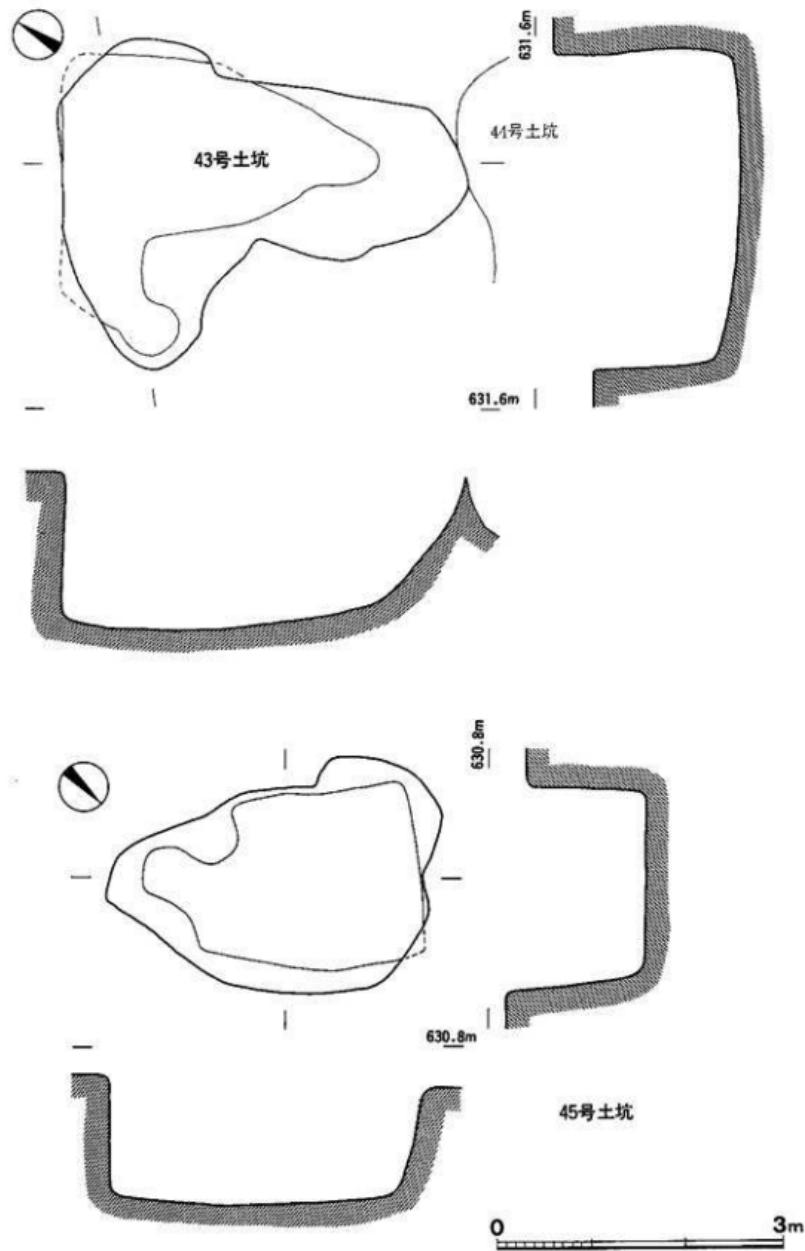


Fig. 33 地下式坑 (43号·45号) S=‰

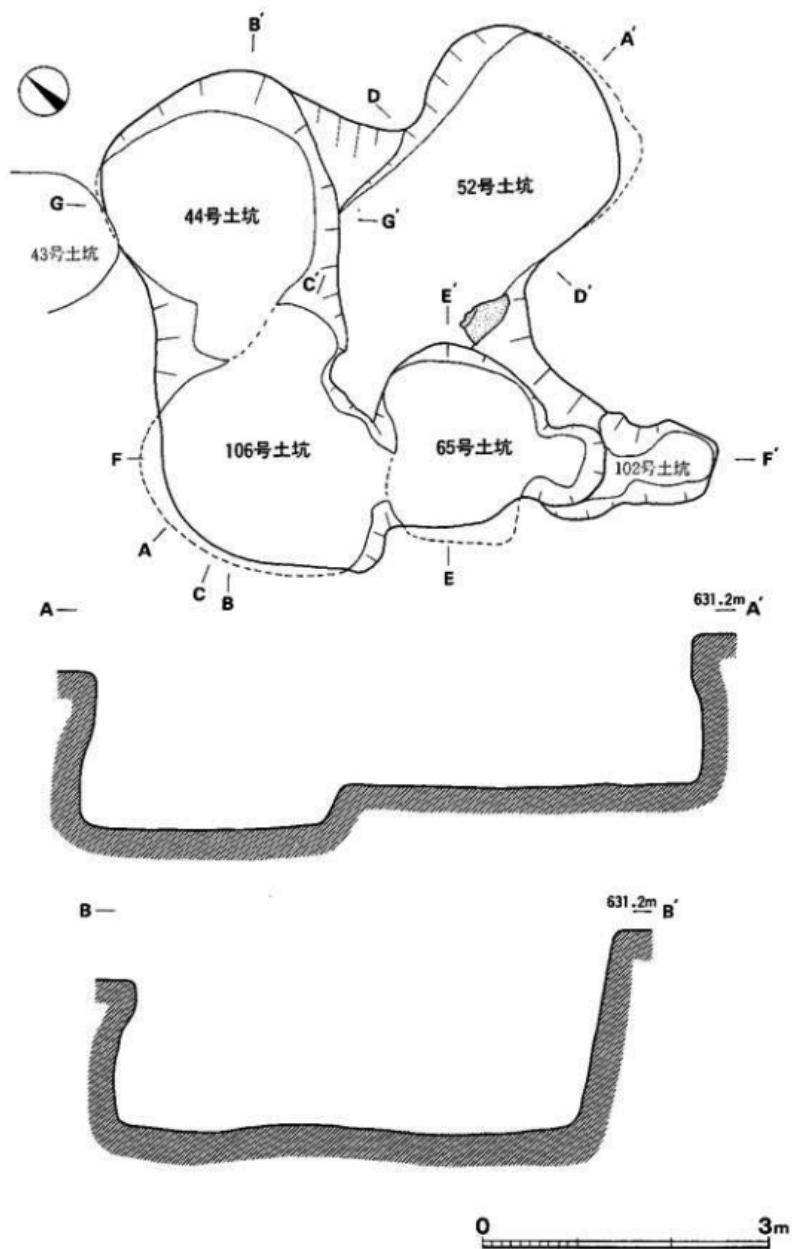


Fig. 34 地下式坑 (52号・44号・106号・65号) S=%

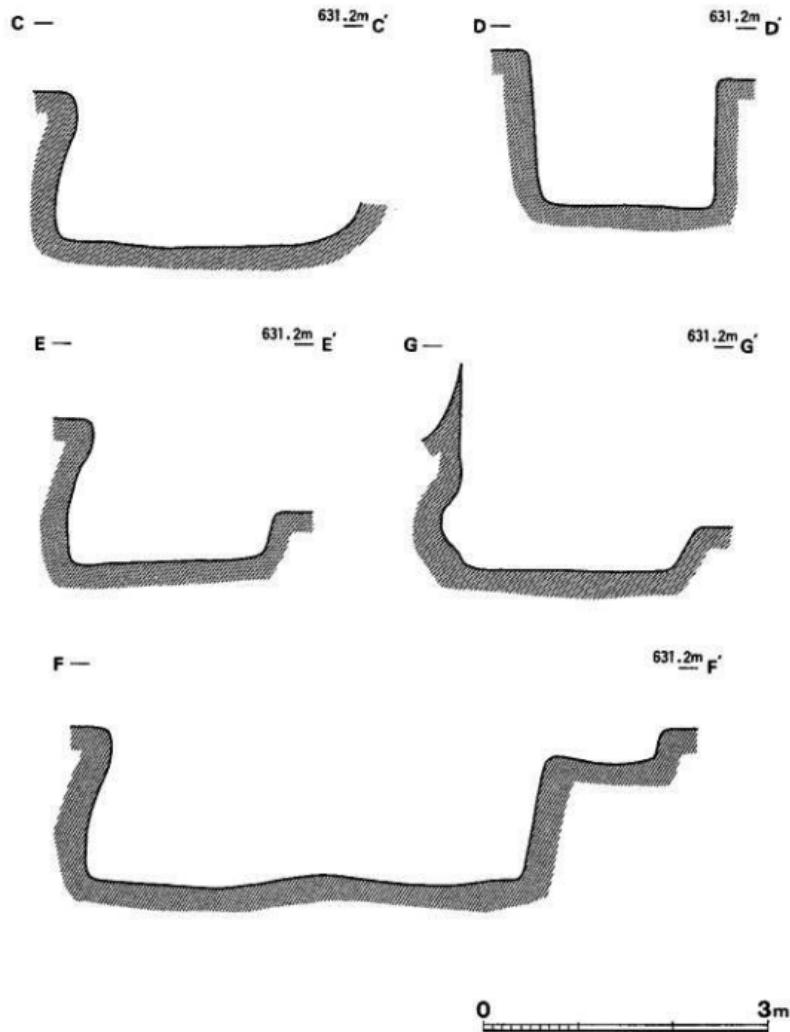
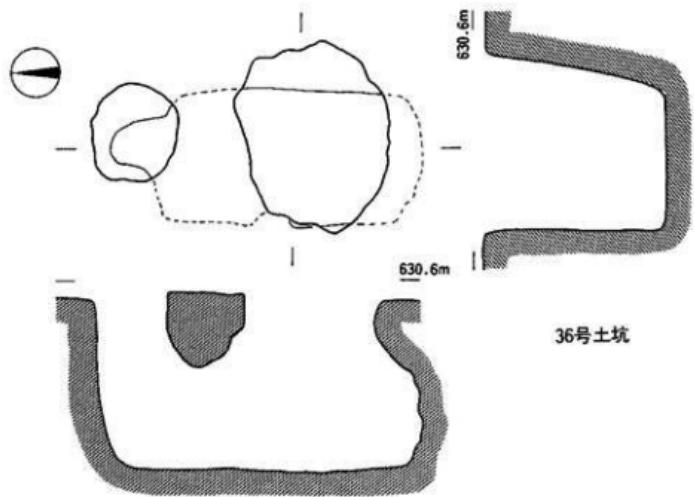
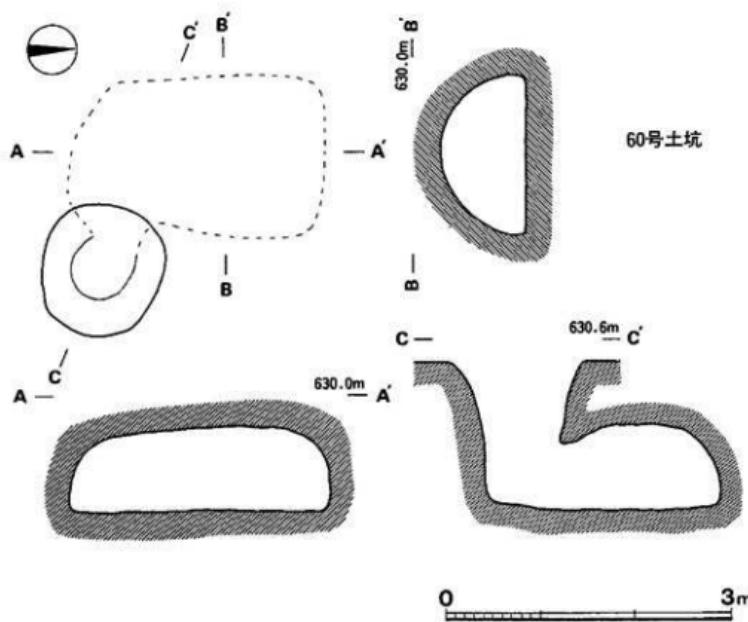


Fig. 35 地下式坑 (52号・44号・106号・65号) S=1%



36号土坑



60号土坑

Fig. 36 地下式坑 (36号·60号) $S=\frac{1}{50}$

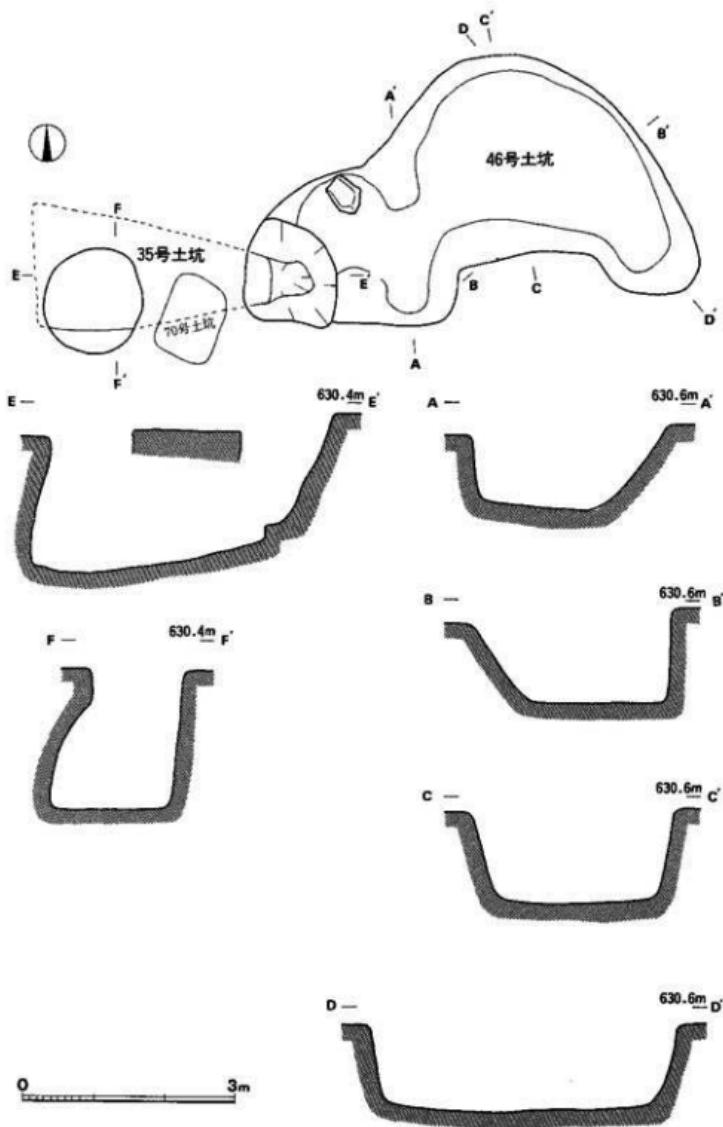
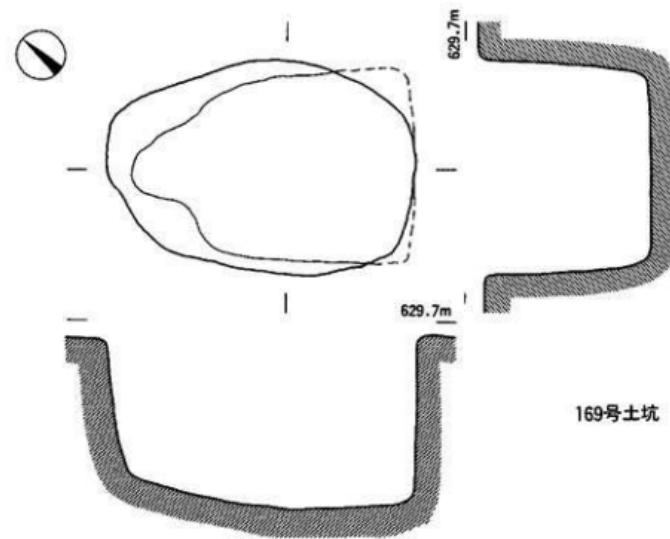
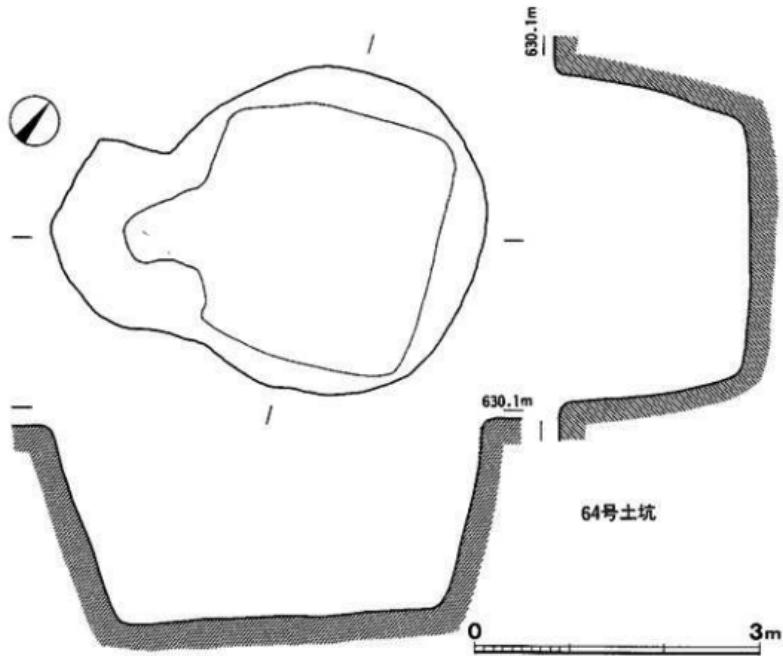


Fig. 37 地下式坑 (35号・46号) S = 1%

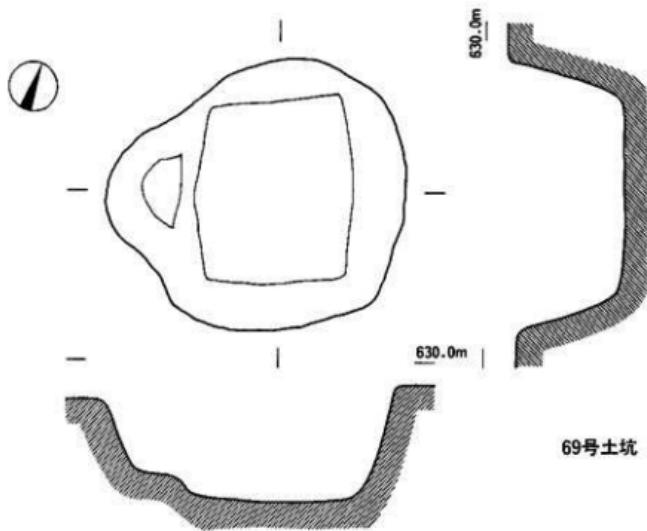


169号土坑

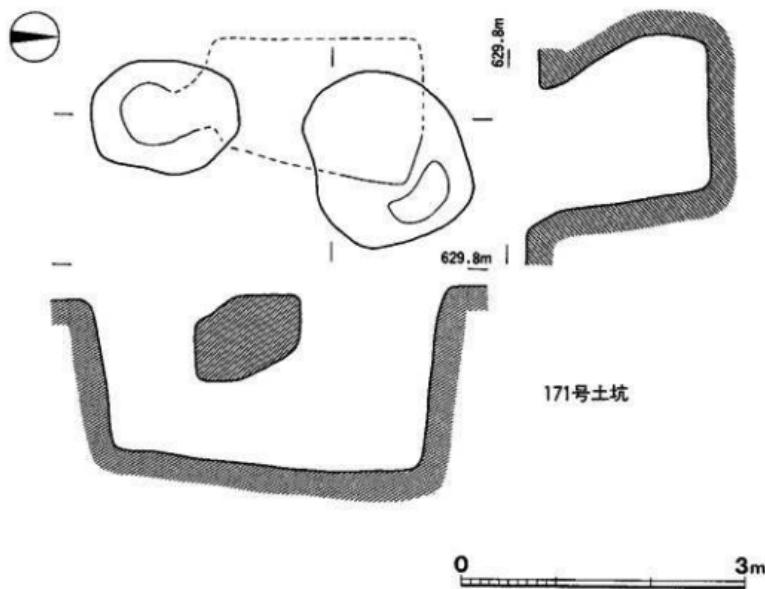


64号土坑

Fig. 38 地下式坑 (169号·64号) S=1:60



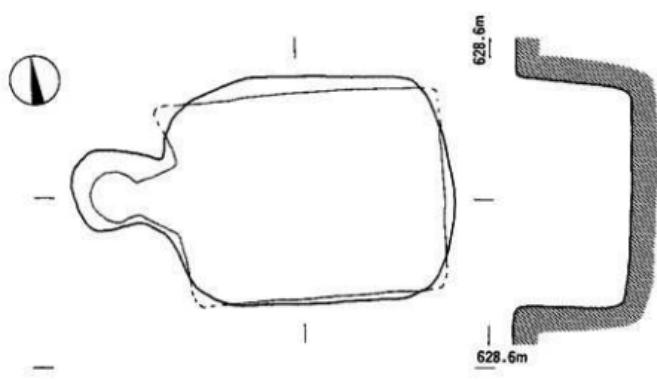
69号土坑



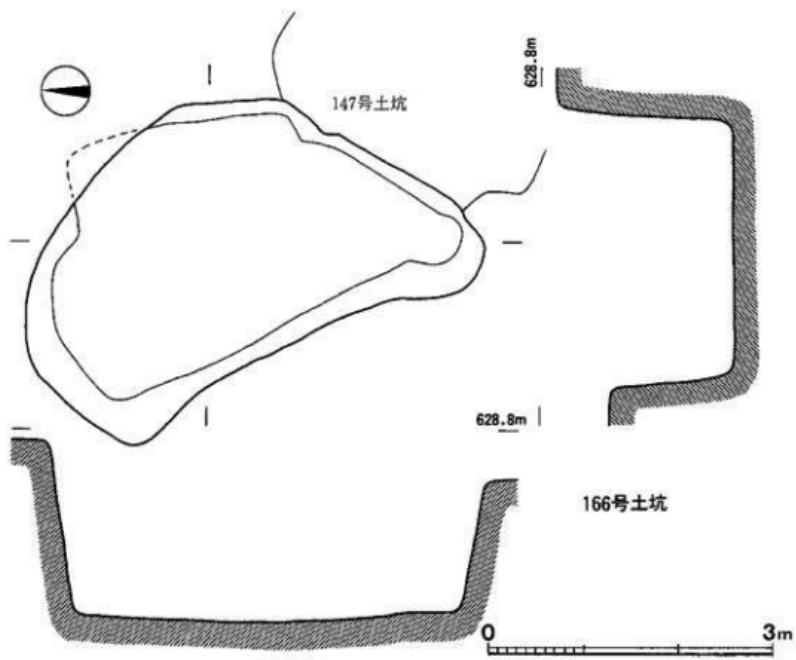
171号土坑

0 3m

Fig. 39 地下式坑 (69号・171号) S=1/60



148号土坑



166号土坑

Fig. 40 地下式坑 (148号・166号) S = $\frac{1}{50}$

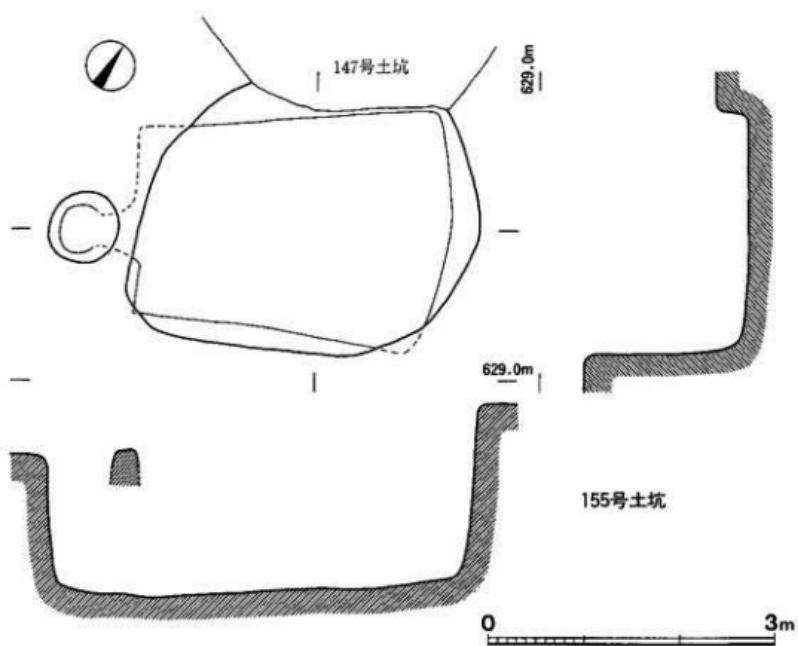
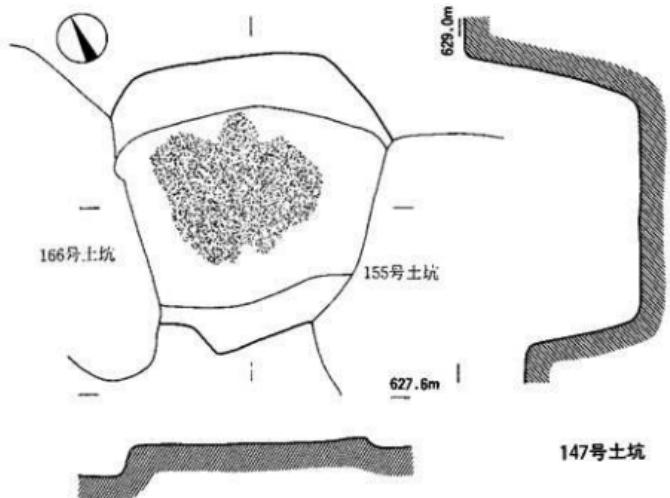


Fig. 41 地下式坑（147号・155号）S=1%

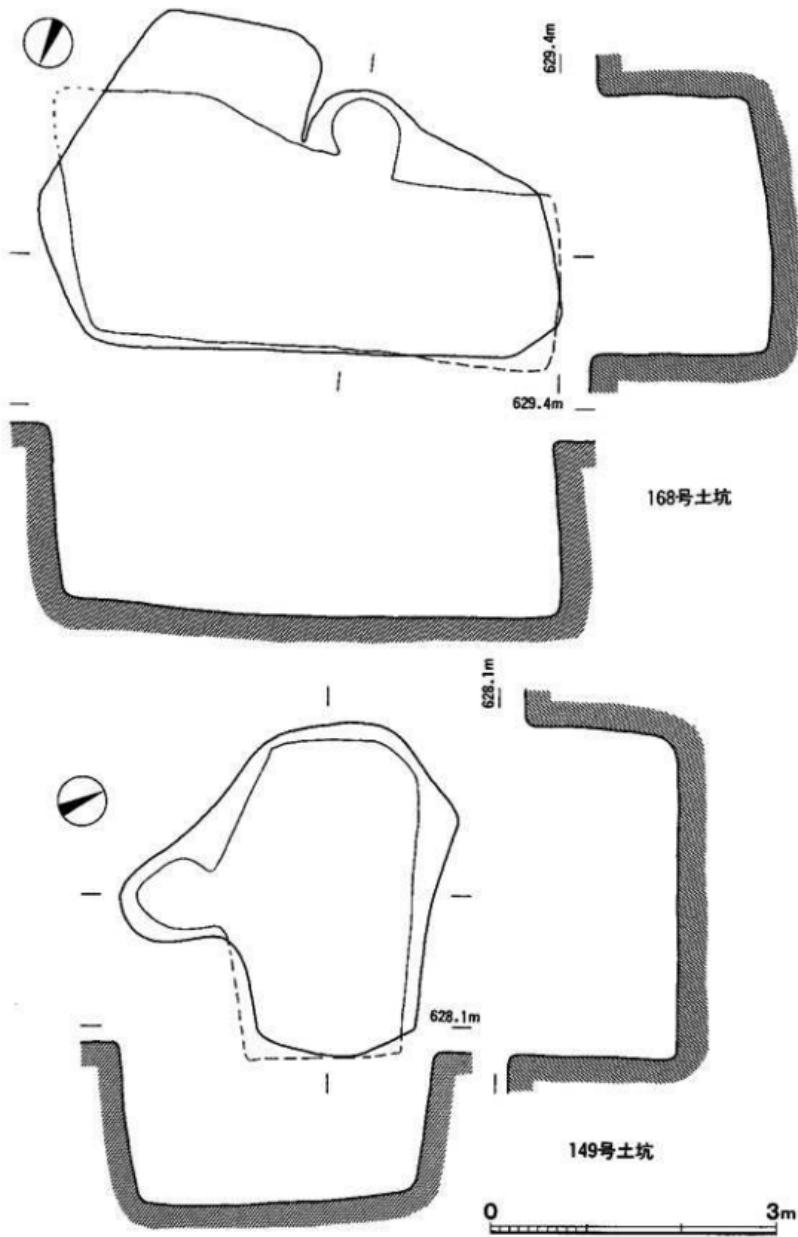


Fig. 42 地下式坑（168号·149号） $S=1\%$

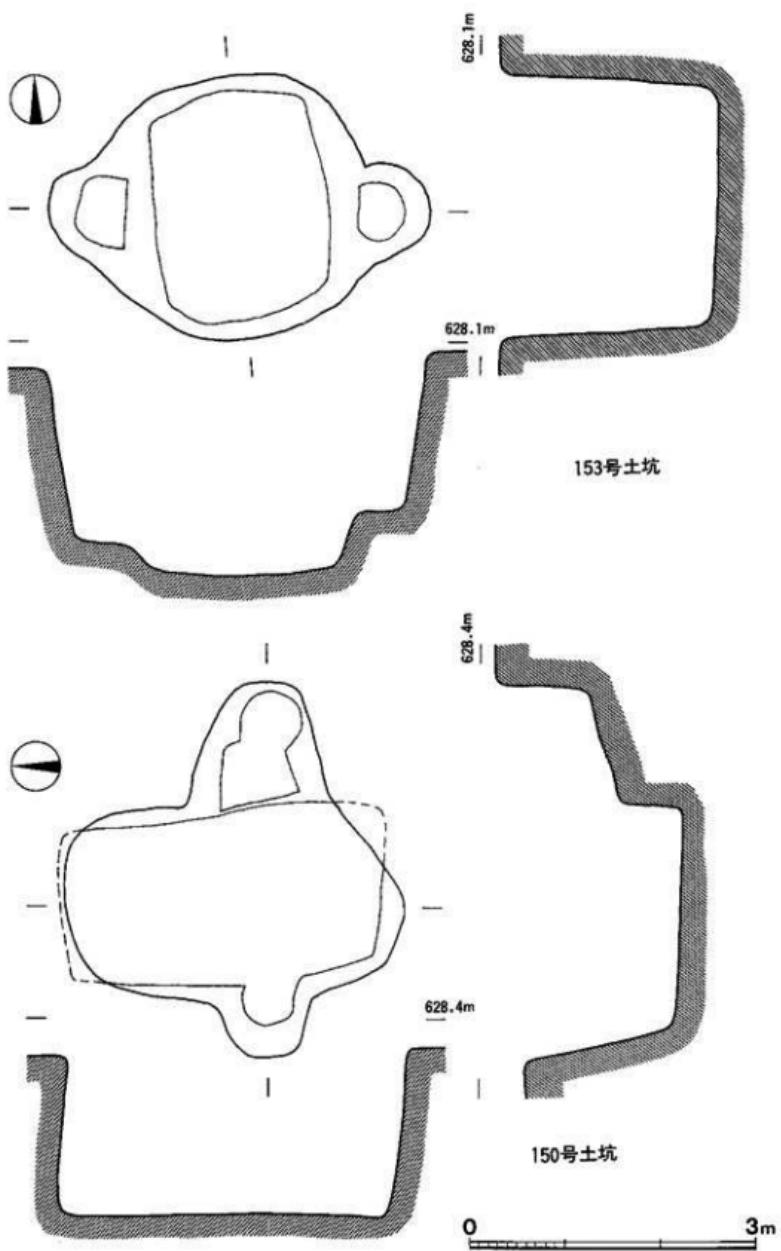


Fig. 43 地下式坑 (153号・150号) S = 1:300

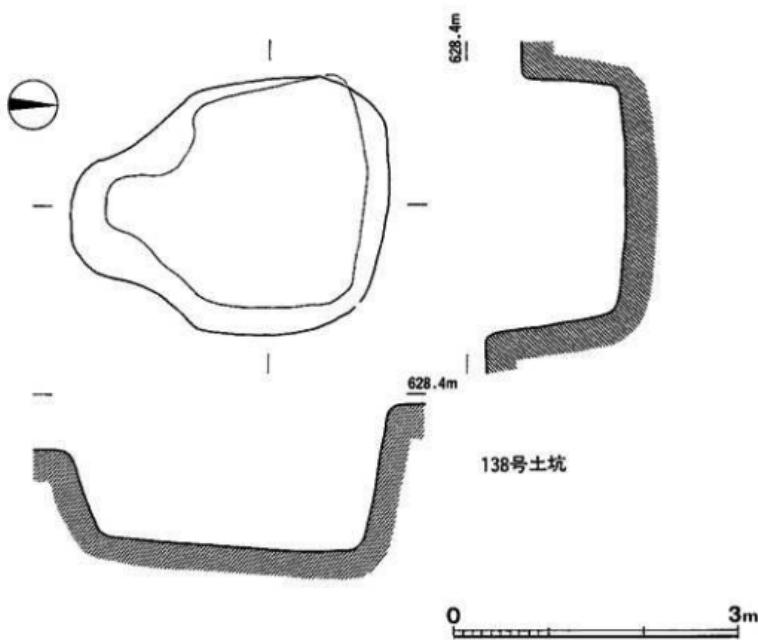
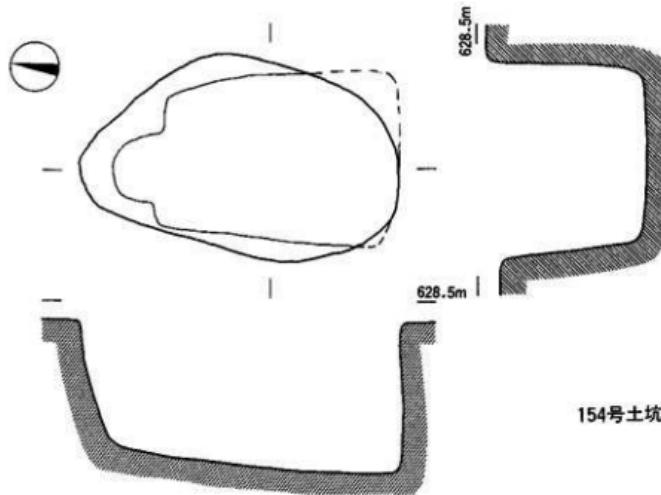


Fig. 44 地下式坑 (154号·138号) $S = \frac{1}{50}$

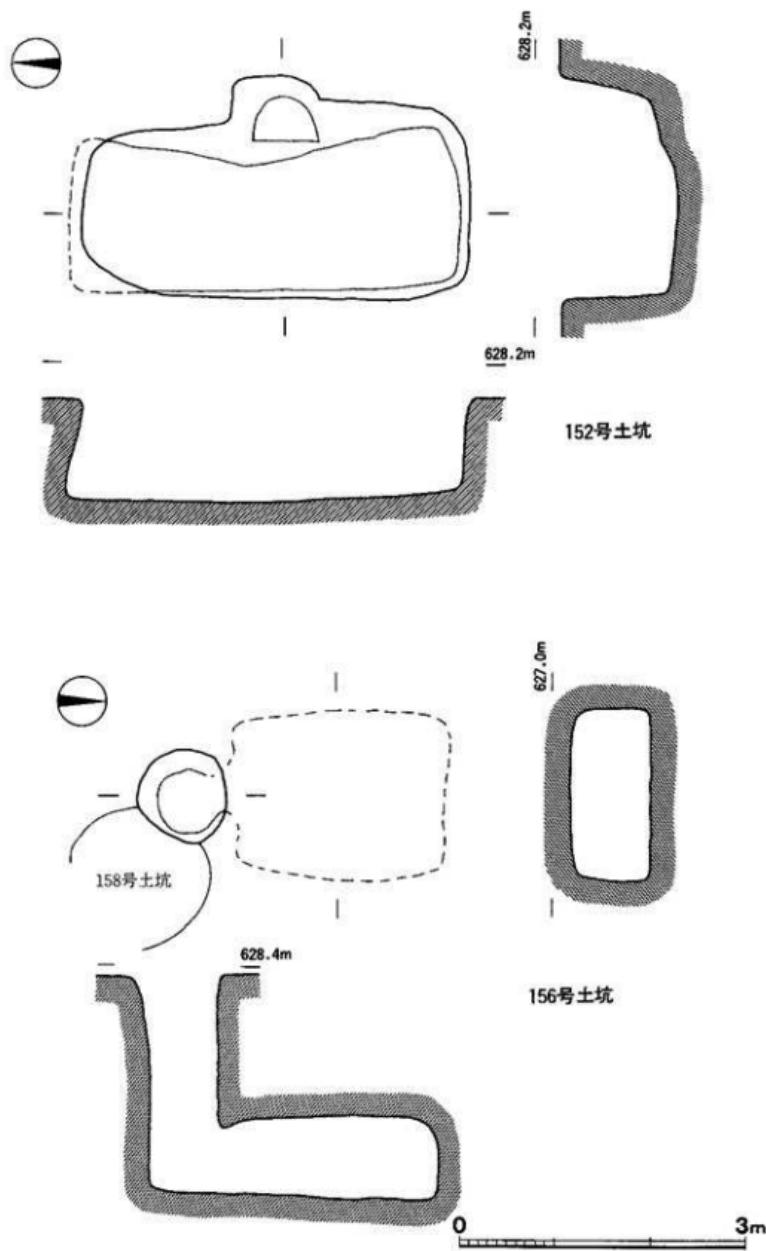


Fig. 45 地下式坑（152号・156号）S=%

25号土坑 (Fig.46, PL.29)

113号土坑と重複するが、先後関係は不明である。

主軸：不明

形態：不整形を呈する。深さ40cm。

出土遺物：古銭3点（皇宋通 \square 1、不明2）。

53号土坑 (Fig.46, PL.30)

主軸：北北西－南南東

形態：楕円形を呈する。長径66cm、短径45cm。深さ20cm。

出土遺物：古銭3点（熙 \square 元 \square 1、 \square 宋通 \square 1、 \square 祐 \square \square 1）。

131号土坑 (Fig.46, PL.32)

主軸：北－南

形態：不整長方形。長辺72cm、短辺50cm。深さ20cm。

出土遺物：古銭7点（永楽通寶1、開元通寶1、 \square 皇 \square \square 1、 \square 政 \square \square 1、元祐通寶1、元豐通寶2）。

8号土坑 (Fig.46, PL.29)

形態：円形。直径80cm。深さ45cm。

出土遺物：土師質土器2点(Fig.49-2, PL.35-3)。時期不明の土器2点。古銭5点（元 \square 通寶1、紹聖元寶1、 \square 樂 \square \square 1、祥符元寶1、開元通寶1）。

68号土坑 (Fig.46, PL.31)

主軸：北－南

形態：不整長方形を呈する。長辺195cm、短辺70cm。深さ40cm。

出土遺物：黒曜石1点。骨が微弱な状態で発見された。ほとんど粉の様な状態になっていた。古銭3点（元 \square \square \square 1、不明2）。

41号土坑 (Fig.46, PL.30)

主軸：北－南

形態：長方形を呈する。長辺125cm、短辺80cm。深さ45cm。

出土遺物：土師器1点。時期不明の土器2点。古銭6点（元祐通寶1、 \square 平元 \square 1、 \square 宋通 \square 1、天聖元寶1、熙寧元 \square 1、不明1）。

66号土坑 (Fig.47, PL.31)

主軸：北－南

形態：長方形を呈する。長辺120cm、短辺80cm。深さ36cm。

出土遺物：土師器7点。土師質土器2点。時期不明の土器9点。古銭6点（元豊通寶1、洪武通寶1、皇宋通宝1、元祐通寶1、永樂通寶1、不明1）。

135号土坑 (Fig.47, PL.33)

主軸：北－南

形態：長梢円形を呈する。長径148cm、短径78cm。深さ32cm。

出土遺物：古銭7点（元□□寶1、□平元□2、永樂通寶1、不明3）。

139号土坑 (Fig.47, PL.31)

主軸：北北西－南南東

形態：不整梢円形を呈する。長径58cm、短径46cm。深さ13cm。底部に磚を2個配する。

出土遺物：古銭1点（祥符元□）。

59号土坑 (Fig.47, PL.31)

36号土坑の地下室の上に位置する。地下室天井崩落によって59号土坑も東側が一部失われている。

主軸：東北東－西南西

形態：元来は長方形を呈していたと思われる。残存値は長辺130cm、短辺80cm。深さ25cm。

出土遺物：古銭1点（熙寧元寶）。

70号土坑 (Fig.47, PL.32)

35号土坑の地下室の上に位置する。

主軸：北－南

形態：不整長方形。長辺110cm、短辺80cm。深さ40cm。

出土遺物：骨。微弱な状態で発見された。ほとんど粉の様な状態になっていた。古銭6点（大觀通宝1、開元通寶1、□祐元□1、元豐通寶1、不明2）。

109号土坑 (Fig.47, PL.32)

主軸：北東－南西

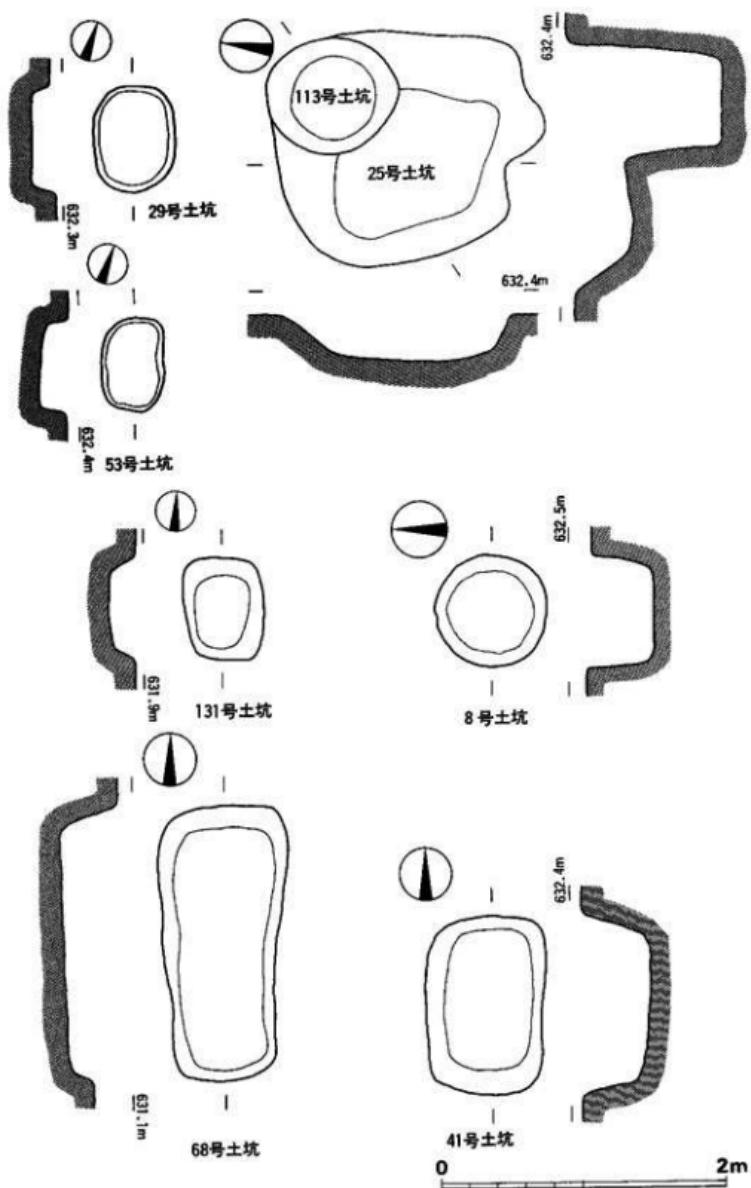


Fig. 46 土壤墓 (1)

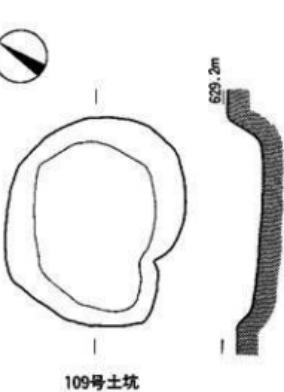
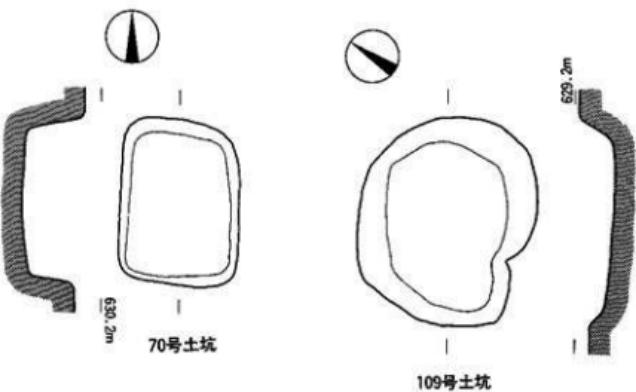
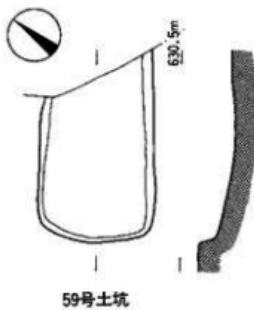
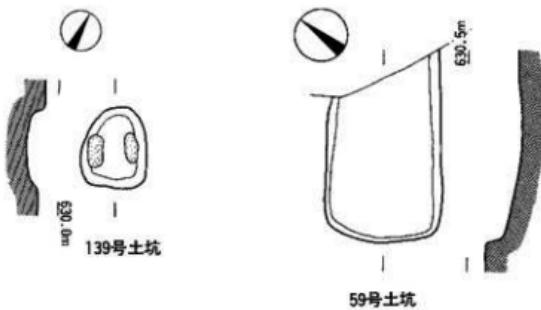
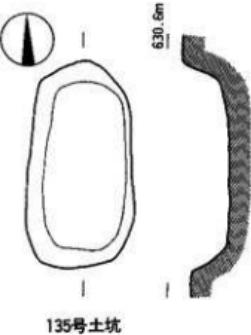
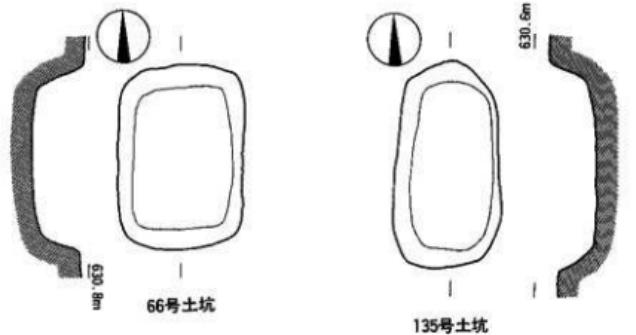


Fig. 47 土壤墓 (2)

形態：不整橢円形。長径148cm、短径125cm。深さ25cm。

出土遺物：古銭4点（元豐通寶1、元祐通寶1、景德元寶1、永樂通寶1）。

第3項 土坑

中世の土坑と考えるものは、48号土坑と57号土坑である。その他多くの土坑（小さい柱穴状のものを含む）は時期を決定するにたる出土遺物に乏しい。

48号土坑 (Fig.55, PL.33)

平面形は、ほぼ円形を呈する。直径は110cm。深さは47cm。遺物は、土師質土器の皿(Fig.50-16, PL.35-1)が1点出土した。

57号土坑 (Fig.56)

平面形は、円形を呈する。直径は44cm。深さは55cm。遺物は、土師質土器 (Fig.50-17) 1点と木炭が出上した。

第4項 埋設土器 (Fig.48・49-1, PL.12)

D-4グリッドを精査しているときに発見した。土器の胴部上半が、欠損した状態であった。割れ口が新しかったので、表土剥ぎの時に欠損したと思われる。確認面からの掘り込みは明確には判断できなかった。土器の内部には礫が入っていた。また、土器底部は当初からなかった。周囲を精査したが、埋設土器に伴う施設はなかったので単独のものと考える。

土器は中世の内耳土器で、残存する器高は11.4cm、胴部最大径は28.1cmである。残存部分が少なく、内耳土器の器形の特徴が把握できないので、正確な土器の年代等は不明である。

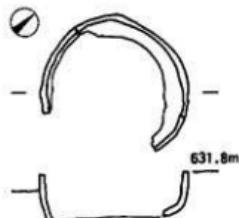


Fig. 48 埋設土器

第5項 土器・土製品・陶磁器

土師質土器、内耳土器、馬形土製品、中国製白磁、青磁などが出土した。以下、これらの概要を記す (Fig.49-2~14, Fig.50-15~20, PL.35・38)。

2：土師質上器小皿 (PL.35-3)。8号土坑 (土壙墓) 出土。器面の内外面ともにナデ調整。

3：土師質土器小皿。表土層出土。器面の内外面ともにナデ調整。底部には、回転糸切痕がわずかに残る。底部はうすく、器体部の中央部で内外面ともにわずかに膨らむ。小瀬沢町・筆尾墨跡の小皿と類似する。15世紀のものと思われる。

4：白磁皿 (小形の高台付皿) (PL.35-4)。149号土坑 (地下式坑) 地下室の床から17cm浮いた状態で出土した。十分に焼成されず黄色味をおびている。高台は4個所あり、弧状にえぐりこ

- みがはいっている。15世紀のものと思われる。
- 5：土師質土器小皿。6号土坑（地下式坑）出土。器面の内外面ともにナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。また、底部は中央部にいくにつれて器厚が薄くなる。
- 6：土師質土器小皿。52号土坑（地下式坑）出土。内外面ともにナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。
- 7：土師質土器小皿。52号土坑（地下式坑）出土。内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。
- 8：土師質土器皿。表土層出土。内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。
- 9：土師質土器皿。150号土坑（地下式坑）地下室床面直上から出土。内外面はナデ調整。底部は中央部にいくにつれて器厚が薄くなる。
- 10：土師質土器皿。60号土坑（地下式坑）出土。内外面はナデ調整。底部には、わずかに回転糸切痕がみえる。
- 11：土師質土器皿。6号土坑（地下式坑）出土。内外面はナデ調整。厚みのある土器であるが底部は器厚が中心に向かってうすくなる。
- 12：土師質土器皿。35号土坑（地下式坑）出土。内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。大きい土器で、口径21.5cm、底径12cm。器厚もあつく、器体部では、6.5mm、底部では、9mmである。
- 13：青磁碗（PL.35-7）。31号土坑出土。釉は灰緑色。内底面の釉には貢入がみられる。外面は、一部高台内面まで及ぶが、削りとることはしていない。器形は、残存部が少ないので多くは不明だが、底部が厚く高台の低い、腰のはる、又は、丸い碗と思われる。14世紀末から15世紀初頭に位置づけられると思う（上田1982）。ただし、舶載品は伝世するがあるので、これをもって、造構の時期を決めるには注意を要する。
- 14：内耳土器（PL.35-5・6）。35号土坑（地下式坑）出土。器壁は、底部からほぼ直線的であり、口縁部で少し内屈する。残存する器高は、15.5cm。表面にはススが付着している。茅野市・御社宮司遺跡の内耳土器分類（小林1982）におけるIV期（16～17世紀）に相当する。
- 15：土師質土器小皿（PL.35-2）。43号土坑（地下式坑）出土。内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。他の小皿に比べて厚みがある。
- 16：土師質土器皿（PL.35-1）。48号土坑の確認面出土。内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。
- 17：土師質土器皿。57号土坑出土。器体部内外面はナデ調整。底部には、回転糸切痕がある。
- 18：内耳土器（PL.34-5）。61号土坑（地下式坑）出土。器壁はほぼ直立に底部から立上り、胴部上半で一旦くびれ再び直線的に口縁部にいたる。器高は15.8cm。土器の表面にはススが付着している。御社宮司IV期（16～17世紀）に相当すると思われる。

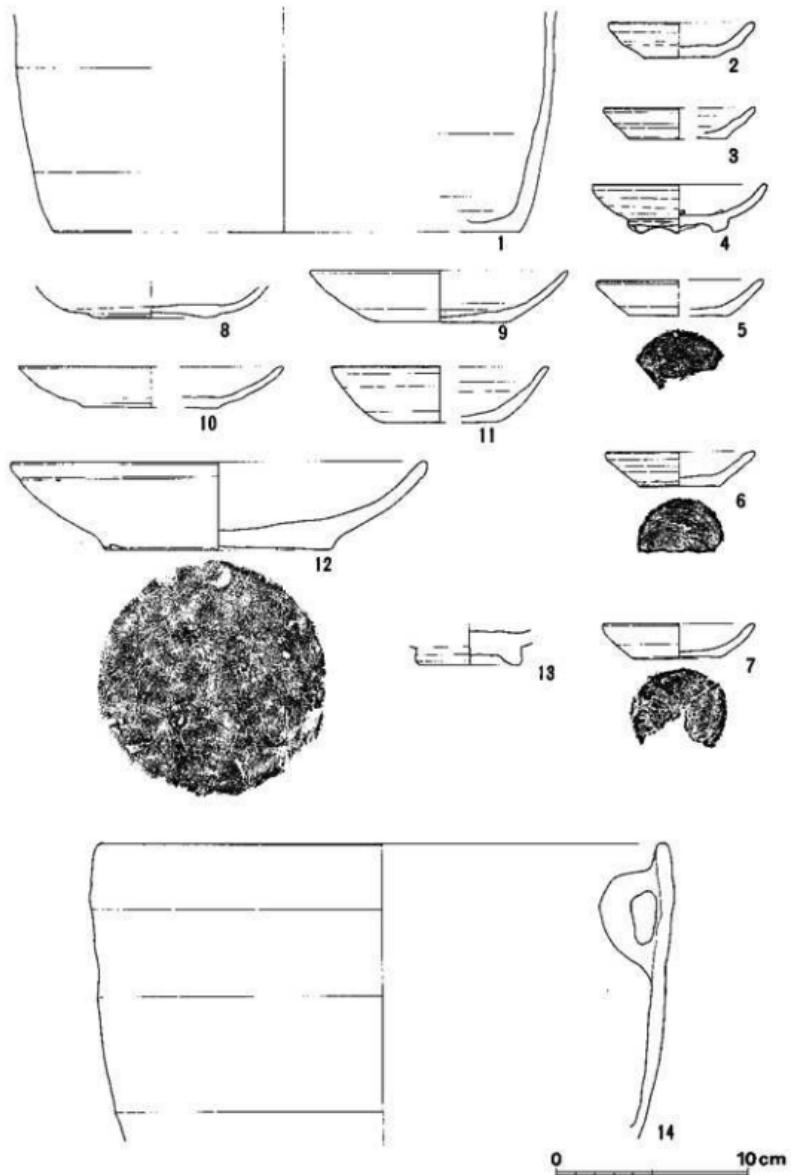


Fig. 49 中世の土器・陶磁器

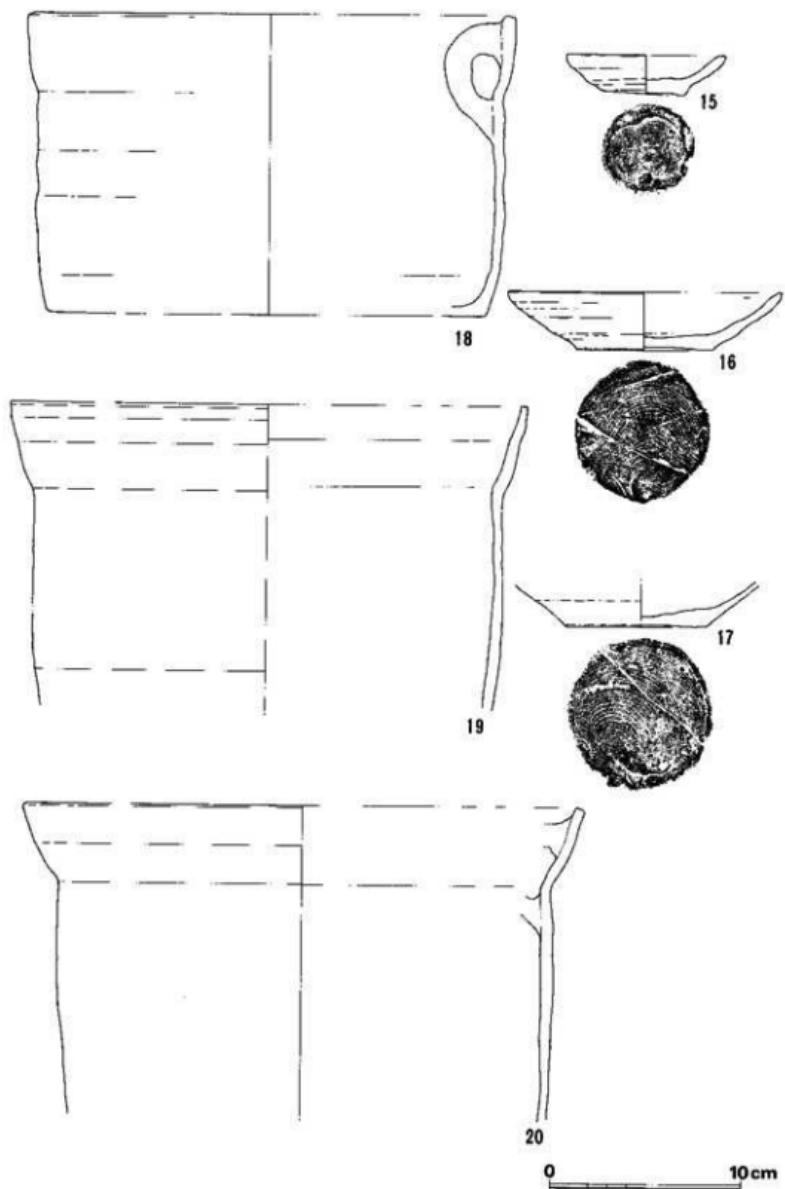


Fig. 50 中世の土器

19：内耳土器（PL.34-4）。46号土坑（地下式坑）出土。器壁はほぼ直立に底部から立上り、口縁部で「く」の字状に外反する。現存する器高は15.9cm。土器の表面にはススが付着している。御社宮司Ⅰ期（15世紀）に相当する。

20：内耳土器（PL.34-3）。3号土坑（地下式坑）出土。器形は41と同様である。現存する器高は16.4cm。御社宮司Ⅰ期（15世紀）に相当する。

PL.34-1：内耳土器。35号七坑出土。口縁部破片。

PL.34-2：内耳土器。64号土坑出土。口縁部及び底部付近の破片。

PL.35-8：白磁。42号土坑出土。小破片なので詳細は不明だが、16~17世紀のものと思われる。

PL.38-6：馬形土製品。表土層出土。頭部、脚部などを欠くが、背に鞍が乗っている様がはっきりわかる。現存値、長さ6.6cm。

以上中世の土器等についてその概要を述べたが、土器の時期については言及していないものもある。年代の明らかな陶磁器類と共に関係をもたないので時期決定するには困難を伴うが、概ね15世紀に属するのではないかと考えている。

第6項 石器・石製品

中世に属する石器・石製品は18点である。その内訳は、砥石4点（流紋岩4）、石臼11点（安山岩11）、ひで鉢2点（安山岩2）、五輪塔1点（安山岩）である。主なものを、Fig.19・20とPL.37・38に示したので、これらについて若干の説明を加えたい。

10：砥石（PL.37-10）。84号土坑出土。石質：流紋岩。重さ92g。砥面は、実測図の正面、左・右側面にある。

11：砥石（PL.37-11）。表採。石質：流紋岩。重さ114g。砥面は、実測図の正面、右側面、裏面にある。

12：砥石（PL.37-12）。表採。石質：流紋岩。重さ75g。經節状の形態をする。表面は、滑らかな砥面だが、両側面は粗研ぎ面である。

13：砥石（PL.37-13）。表採。石質：流紋岩。重さ68g。經節状の形態をする。表面と裏面は滑らかな砥面で、両側面は粗研ぎ面である。

14：石臼（下石）（PL.38-3）。17号土坑出土。石質：安山岩。重さ7,250g。半欠している。石臼の目は、主溝が8本であると思われるが、副溝は一定せず現存部分には8~12本みられる。

15：石臼（上石）（PL.37-17）。表採。石質：安山岩。重さ4,500g。石臼の目は、主溝が8本だが、副溝の正確な数は、破損部分が広いので不明である。

16：石臼（上石）（PL.38-4）。表採。石質：安山岩。重さ6,000g。

17：石臼（上石）（PL.38-2）。表採。石質：安山岩。重さ2,920g。

18：ひで鉢（PL.37-16）。表採。石質：安山岩。重さ4,080g。

19：ひで鉢（PL.38-1）。61号土坑の地下室床面出土。石質：安山岩。欠損品だが現存する重さは2,880g。丸い自然石をくりぬいた様なものである。

20：五輪塔（空風輪）（PL.37-15）。表採。石質：安山岩。重さ3,500g。

以上、実測図で示したものに、写真で示した資料（PL.38-5）について説明する。

PL.38-5：石臼（下石）の破片。52号土坑と64号土坑出土のものが接合している。石質：安山岩 直径35cm。

第7項 古銭 (Fig.51・52・53, PL.36)

古銭の出土総数は84点である。内訳は、地下式坑出土9点、土壙墓出土61点、1号住居址覆土から1点、遺構外13点。これらの種類や、遺構ごとの数などは、該当する遺構の説明のなかで述べているので、本項では割愛したい。ここでは、84点中、52点を図示した。これらの概要については、Tab.1・2を参照していただきたい。

第6節 時期不明の遺構

多数の所謂ビット及び102基の土坑が時期不明の遺構とされるものである。ビットに関しては、建物跡等のものか否か判断がつかなかった。ビットについては遺構全体図にてその位置を示すに止めた。土坑は、102基のうち89基を個別に図示した。土坑の概要については、Tab.3・4・5を参照していただきたい。

番号	名 称	鑄造年	出 土 地 点	備 考
1	治 平 元 □	1064	46土坑	
2	景 德 元 □	1044	46土坑	地下室埋土の上層出土
3	洪 武 通 寶	1580	46土坑	地下室埋土の上層出土
4	元 豊 通 寶	1078	46土坑	地下室埋土の上層出土
5	洪 武 通 寶	1368	46土坑	
6	皇 宋 通 □	1039	25土坑	
7	天 褒 通 寶	1017	41土坑	底部出土
8	□ 平 元 □	1064	41土坑	底部出土
9	□ 宋 通 □	1039	41土坑	底部出土
10	熙 寧 元 □	1068	41土坑	底部出土
11	天 聖 元 寶	1023	41土坑	底部出土
12	熙 □ 元 □	1068	53土坑	
13	□ 祐 □ □		53土坑	
14	熙 寧 元 寶	1068	59土坑	
15	元 豊 通 寶	1078	66土坑	
16	洪 武 通 寶	1368	66土坑	
17	皇 宋 通 □	1039	66土坑	
18	元 祐 通 寶	1086	66土坑	
19	永 樂 通 寶	1408	66土坑	
20	元 □ □ □	1086	68土坑	
21	大 銳 通 □	1107	70土坑	
22	開 元 通 寶	621	70土坑	
23	□ 祐 元 □		70土坑	
24	元 豊 通 寶	1078	70土坑	
25	元 豊 □ □	1078	109土坑	
26	元 □ 通 寶	1086	109土坑	
27	景 德 元 寶	1044	109土坑	
28	永 樂 通 寶	1408	109土坑	
29	永 樂 通 寶	1408	113土坑	
30	大 中 通 寶	1361	113土坑	
31	永 □ 通 寶	1408	113土坑	
32	景 定 元 寶	1260	113土坑	

Tab. 1 古錢 (1)

番号	名 称	铸造年	出 土 地 点	備 考
33	永 楽 通 寶	1408	131土坑	
34	開 元 通 寶	621	131土坑	
35	元 豊 □ □	1078	131土坑	
36	皇 □ □ □		131土坑	
37	元 祐 通 寶	1086	131土坑	
38	元 豊 通 寶	1078	131土坑	
39	元 □ □ 寶	1086	135土坑	
40	□ 平 元 □	1064	135土坑	
41	□ 平 元 □	1064	135土坑	
42	永 楽 通 寶	1408	135土坑	
43	祥 符 元 □	1008	139土坑	
44	紹 聖 元 寶	1094	8土坑	
45	開 元 通 寶	621	8土坑	
46	□ 祐 通 □	1056	F-8grid	
47	乾 元 重 □	759	F-8grid	
48	□ □ 元 寶	1068	F-8grid	
49	熙 寧 元 □	1068	F-8grid	
50	元 豊 通 寶	1078	表採	
51	開 元 通 寶	621	表採	
52	菊5錢白銅貨		表土	綠青著しく年号不明

Tab. 2 古錢 (2)



治平元□



景德元□



洪武通寶



元豐通寶



洪武通寶



皇宋通□



天禧通寶



□平元□



□宋通□



熙寧元□



天聖元寶



熙□元□



□祐□□



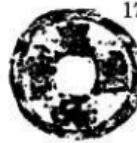
熙寧元寶



元豐通寶



洪武通寶



皇宋通□



元祐通寶



永樂通寶



元□□□

Fig. 51 古錢 (1) S=½

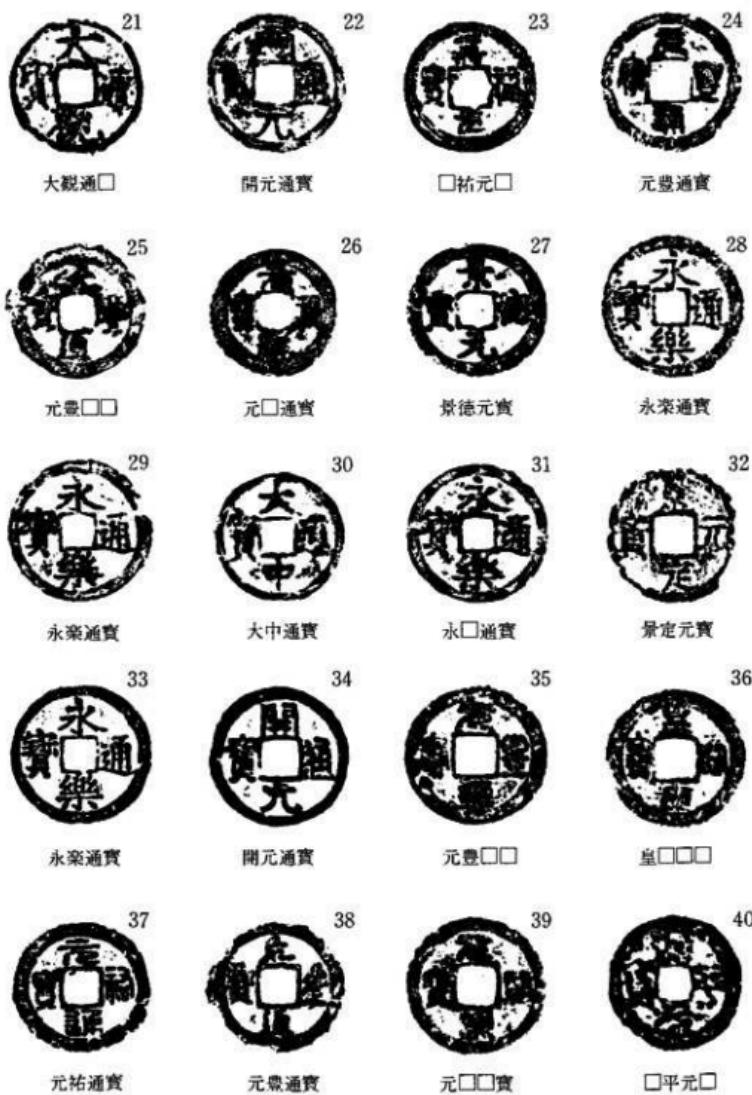


Fig. 52 古錢 (2) S=½

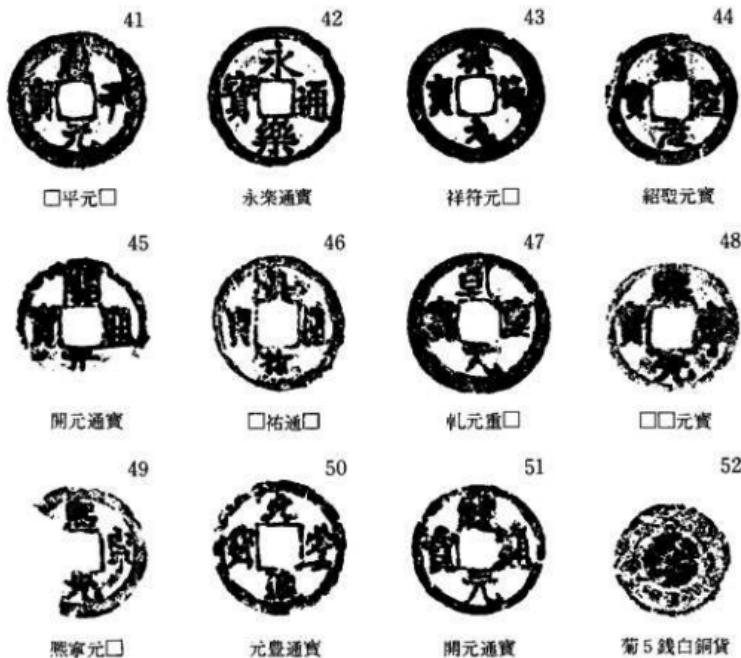


Fig. 53 古錢 (3) S=½

番号	形態	規 模	出土遺物	備 考
10	略円	直径147	深さ80	
12	椭円	長径114	短径94	深さ58
13	方形	長辺128	短辺100	深さ52
14	略円	直径160		深さ57
15	円	直径115		深さ23
16	椭円	長径168	短径130	深さ55
19	略円	直径136		深さ87 織文上器片
20	略円	直径115		深さ43
21	方形	長辺96	短辺74	深さ80
22	略円	直径117		深さ32
23	方形	長辺80	短辺60	深さ21
24	隅円方形	長辺124	短辺96	深さ19
27	不整形	長辺170	短辺150	深さ50
28	不整形	長辺187	短辺153	深さ45
30	椭円	長径90	短径56	深さ22
31	隅円方形	長辺73	短辺54	深さ20
32	椭円	長径86	短径62	深さ17
33	円	直径25		深さ24
34	椭円	長径90	短径61	深さ55
37	略円	直径72		深さ70
40	椭円	長径85	短径70	深さ34
42	椭円	長径60	短径46	深さ15
50	不整形	長辺200	短辺135	深さ95
51	円	直径94		深さ32
54	略円	直径83		深さ15
55	椭円	長径134	短径100	深さ25
56	不整形	長径160	短径115	深さ35
58	方形	長辺150	短辺84	深さ37
62	略円	直径30		深さ29 炭化種子(モモ)
63	方形	長辺140	短辺103	深さ27
67	略円	直径120		深さ55
71	不整円形	直径115		深さ20
72	略円	直径104		深さ22
73	椭円	長径114	短径81	深さ51

Tab. 3 土坑表 (1)

(単位 cm)

番号	形態	規 模		出土遺物	備 考
74	方 形	長辺96	短辺77	深さ23	
75	椭 圓	長径95	短径78	深さ38	
76	略 圓	直径102		深さ36	土器片
77	不整方形	長辺110	短辺60	深さ24	
78	不整方形	長辺90	短辺78	深さ33	
79	方 形	長辺80	短辺60	深さ28	
80	不整方形	長辺99	短辺87	深さ31	
81	方 形	長辺105	短辺88	深さ56	
82	略 圓	直径89		深さ35	
83	方 形	長辺100	短辺66	深さ13	
84	円	直径24		深さ17	磁石
85	円	直径33		深さ51	土器片
89	隅円方形	長辺88	短辺66	深さ49	
90	略 圓	直径121		深さ59	
92	略 圓	長径95	短径91	深さ46	
94	不整円形	直径117		深さ22	
95	方 形	長辺85	短辺65	深さ11	土器片
96	円	直径26		深さ38	土器片
97	円	直径24		深さ20	土器片
98	円	直径32		深さ42	フレイク
99	方 形	長辺160	短辺120	深さ38	土器片
100	略 圓	長径70	短径60	深さ34	
101	方 形	長辺206	短辺130	深さ19	
102	不 明			深さ5	65号土坑と重複
103	椭 圓	長径86	短径58	深さ40	
104	椭 圓	長径102	短径75	深さ37	
105	隅円方形	長辺96	短辺73	深さ45	
108	円	直径25		深さ37	フレイク
110	略 圓	直径20		深さ14	土器片
111	方 形	長辺92	短辺63	深さ29	
114	略 圓	直径120		深さ33	
116	略 圓	直径230		深さ99	
118	不 明			深さ23	
119	略 圓	直径76		深さ48	

Tab. 4 土坑炎 (2)

(単位 cm)

番号	形態	規 模		出土遺物	備 考
120	不整円形	直徑73		深さ52	
121	不 明			深さ50	土器片
122	方 形	長径92	短径60	深さ33	
123	円 形	直徑47		深さ44	土器片
125	不 明			深さ12	126号土坑と重複
126	不 明			深さ10	125号土坑と重複
127	不 整 形	長径90	短径70	深さ38	
128	円	直徑72		深さ10	
129	不整円形	長径125	短径81	深さ34	1号住居址内
130	不整方形	長辺120	短辺100	深さ21	
132	略 円	直徑30		深さ43	上器片、炭
133	略 円	直徑170		深さ85	
134	略 円	直徑157		深さ44	
136	方 形	長辺55	短辺48	深さ17	
137	不 明			深さ49	土器片
140	略 円	直徑170		深さ44	
141	椭 円	長径125	短径100	深さ29	
142	方 形	長辺132	短辺110	深さ48	
143	略 円	直徑134		深さ33	
144	略 円	直徑246		深さ40	
145	不整方形	長辺365	短辺125	深さ57	
146	不 明			深さ8	
151	方 形	長辺94	短辺70	深さ25	土器片
157	方 形	長辺80	短辺64	深さ74	
158	略 円	直徑148		深さ40	土器片
159	方 形	長辺228	短辺190	深さ105	木炭
160	椭 円	長径60	短径45	深さ33	土器片
161	方 形	長辺110	短辺90	深さ28	
162	椭 円	長径92	短径64	深さ14	
163	不 整 形	長径88	短径80	深さ22	
164	不整方形	長辺162	短辺115	深さ37	
165	略 円	直徑92		深さ44	
167	方 形	長辺116	短辺74	深さ22	
170	不整方形	長辺50	短辺48	深さ27	土器片

Tab. 5 土坑表 (3)

(単位 cm)

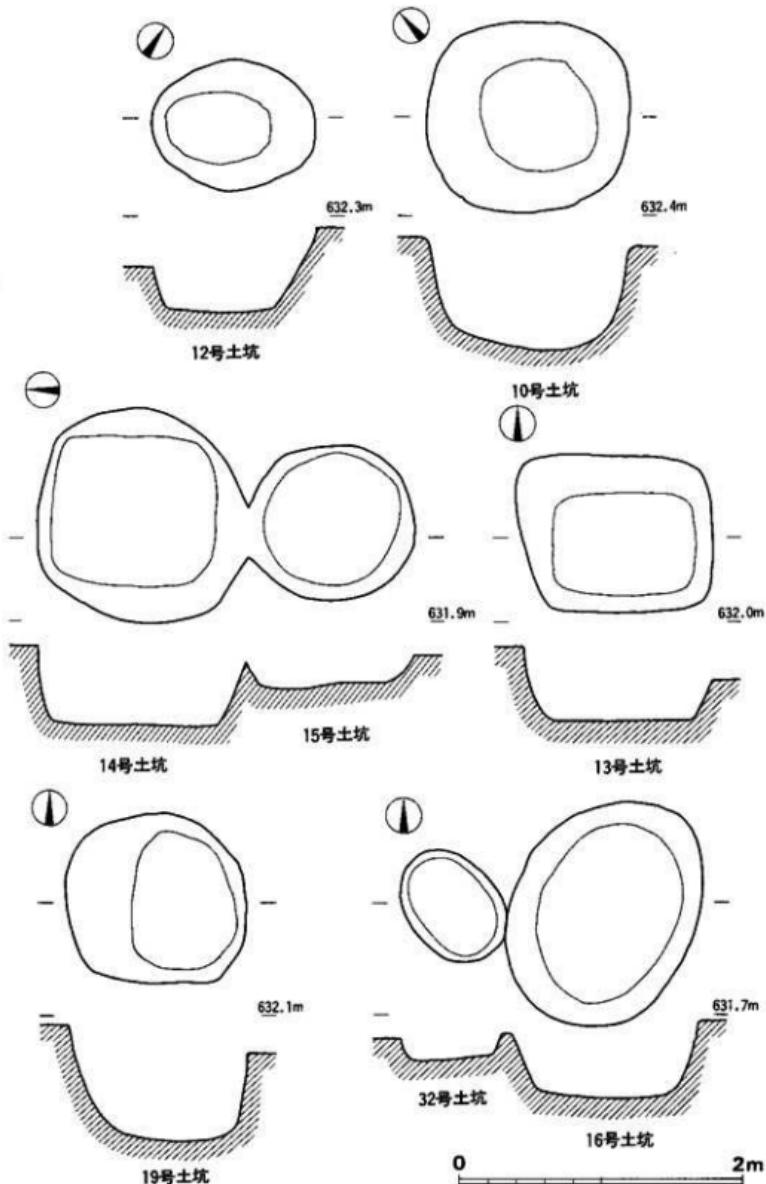


Fig. 54 土坑 (1)

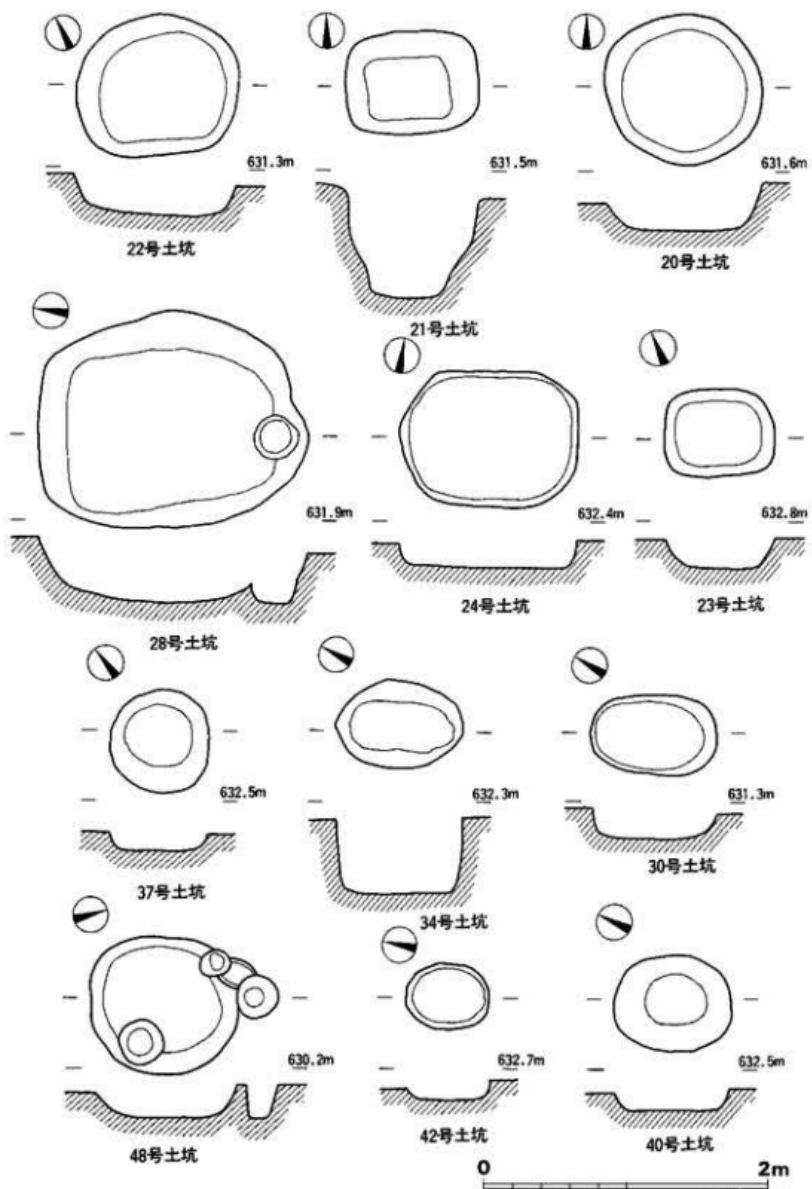


Fig. 55 土坑 (2)

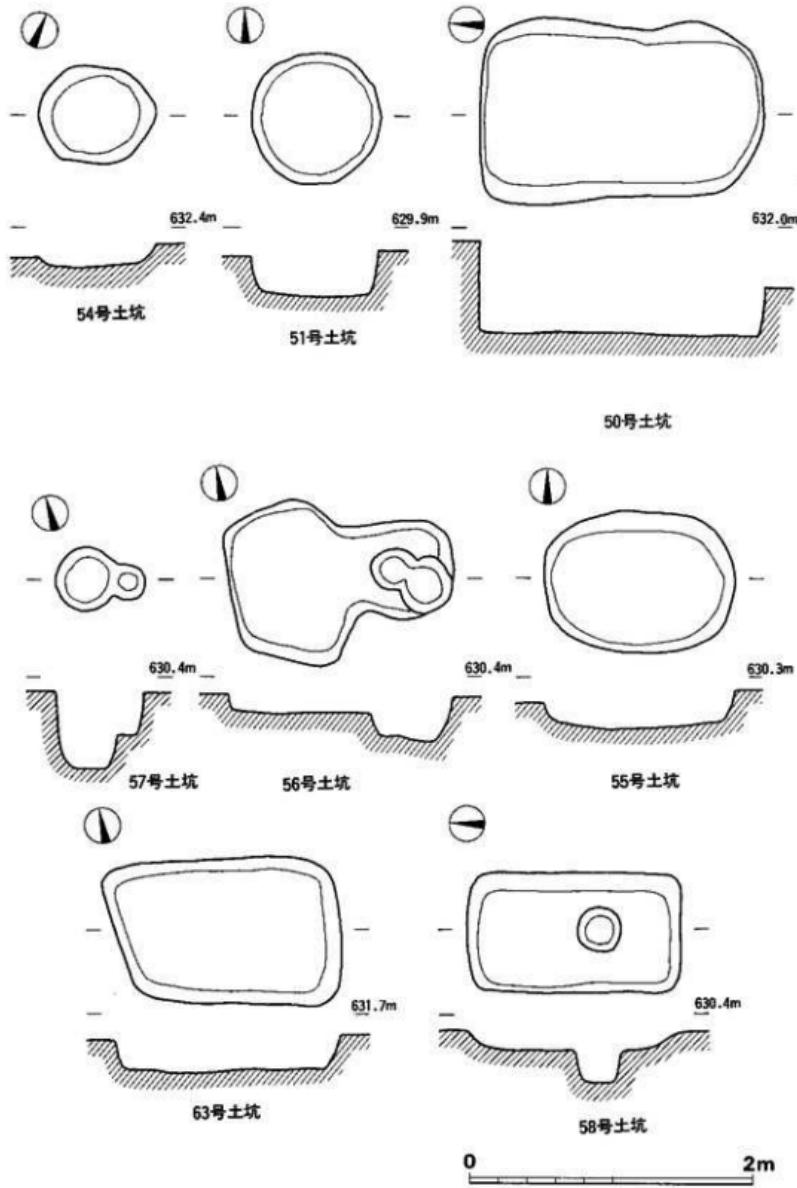


Fig. 56 土坑 (3)

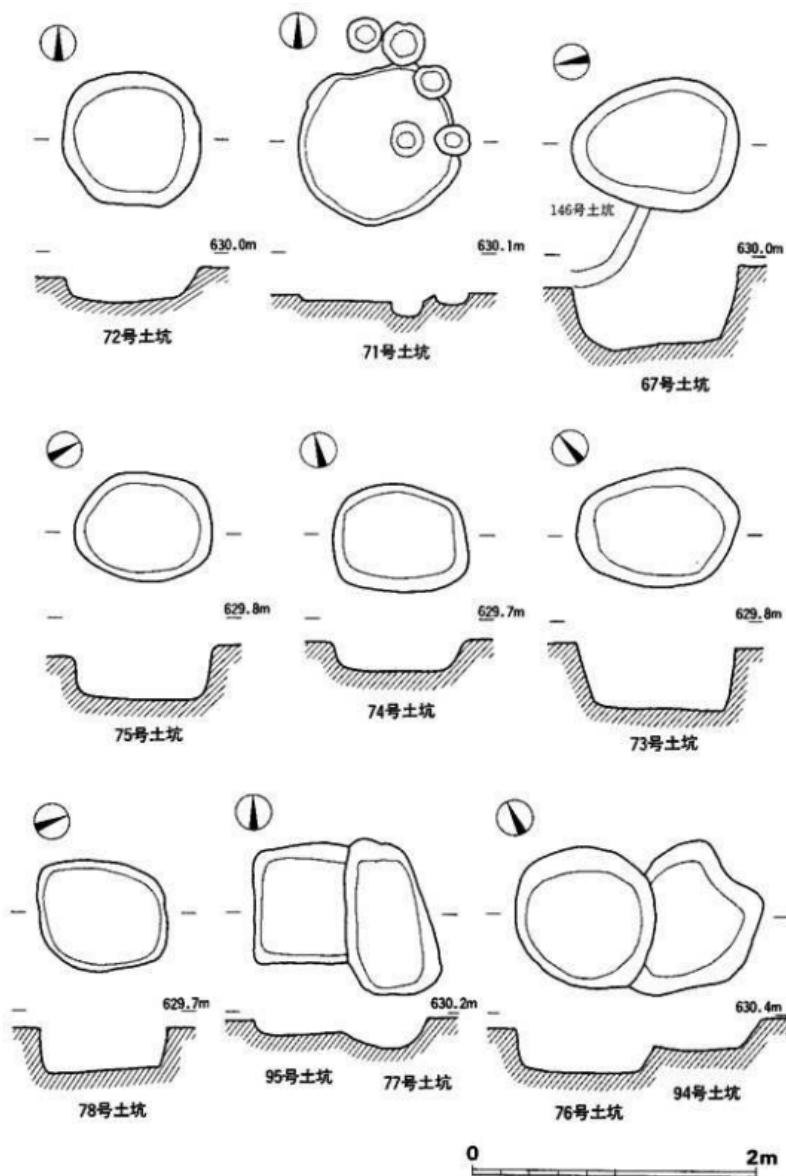


Fig. 57 土坑 (4)

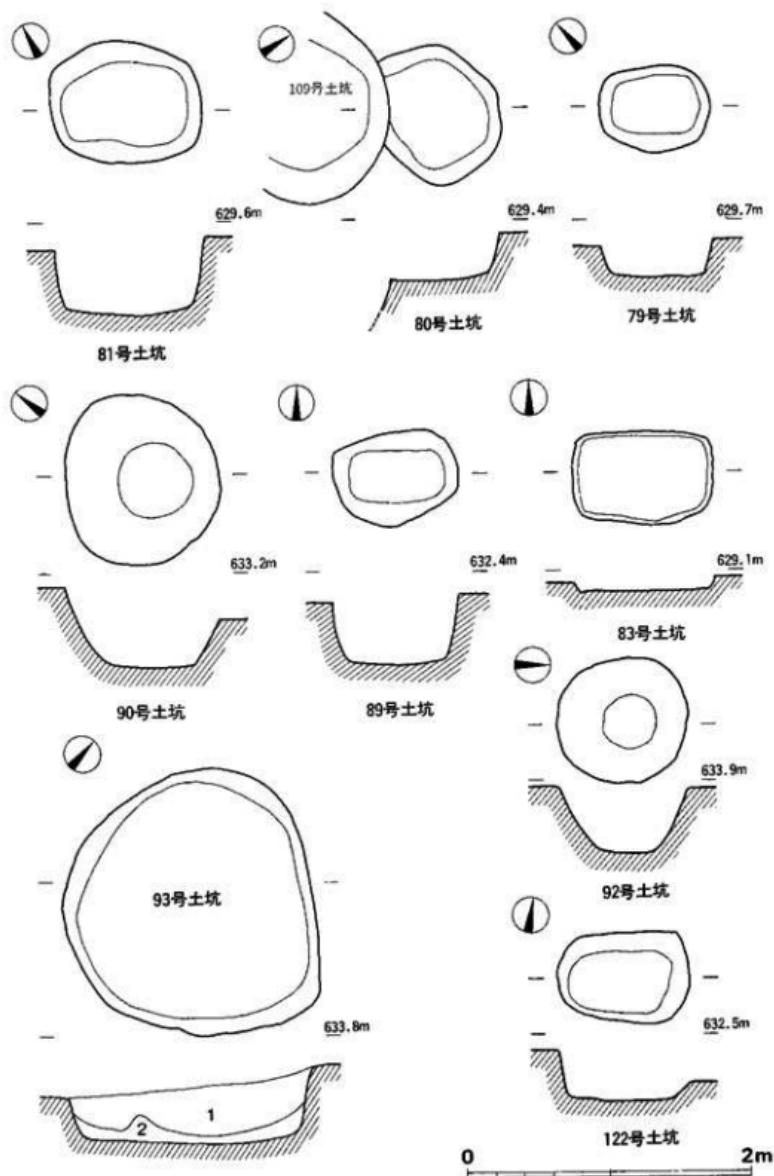


Fig. 58 土坑 (5)

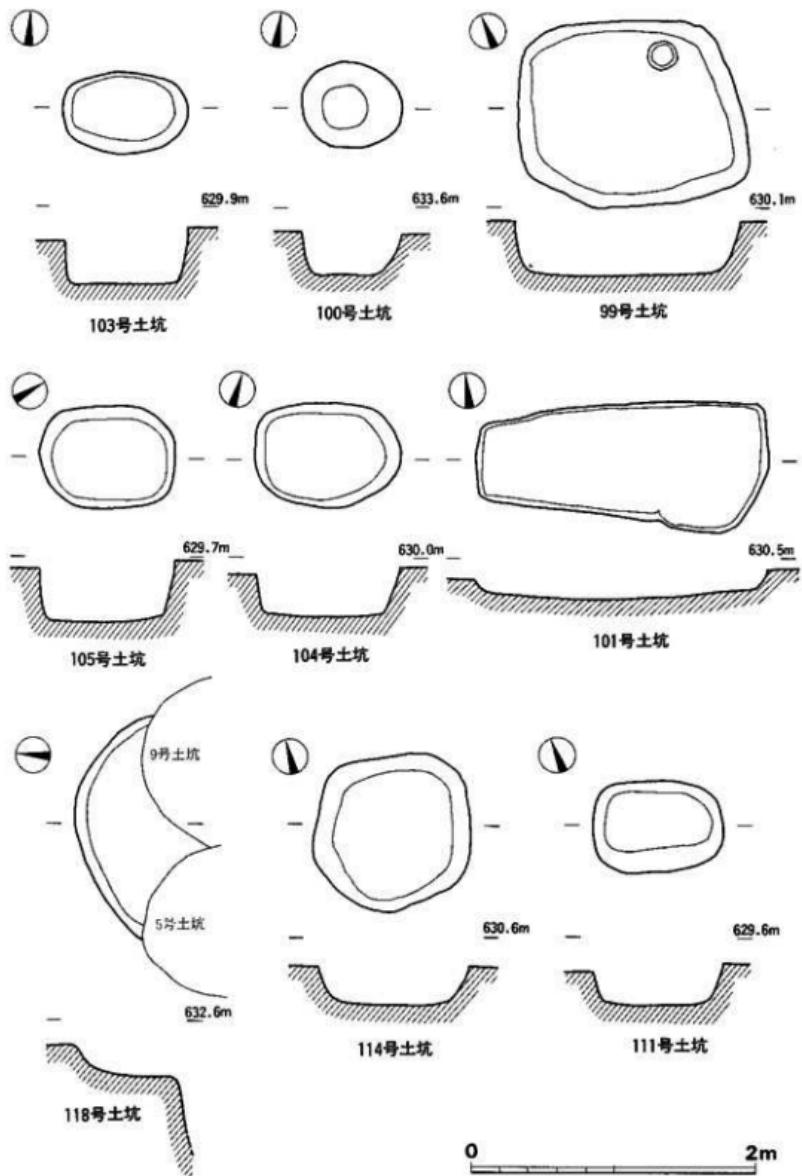


Fig. 59 土坑 (6)

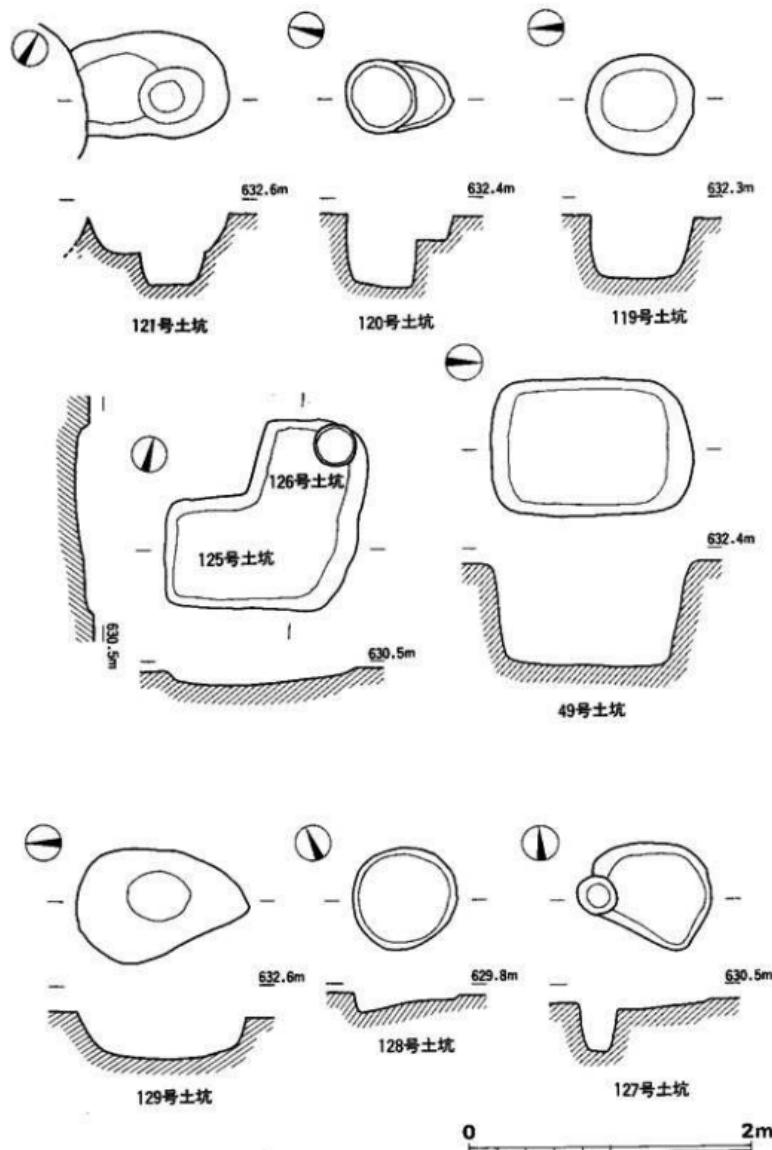


Fig. 60 土坑 (7)

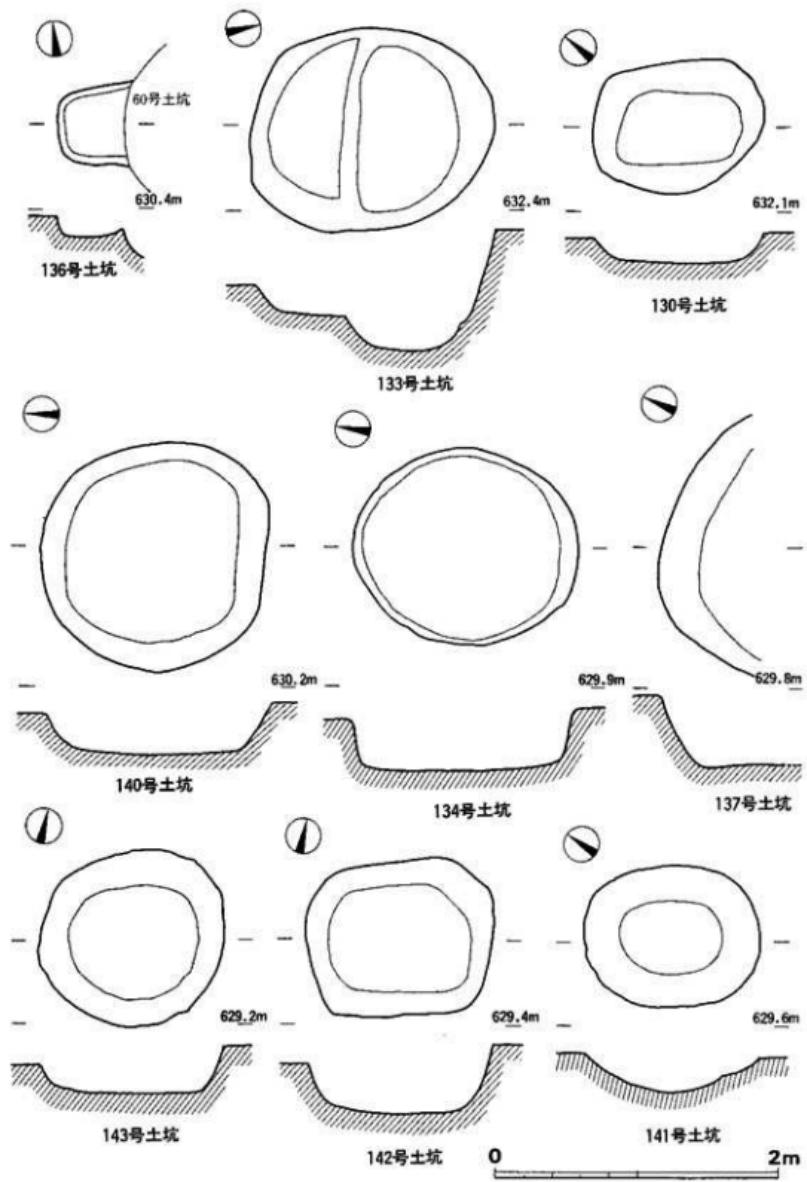


Fig. 61 土坑 (8)

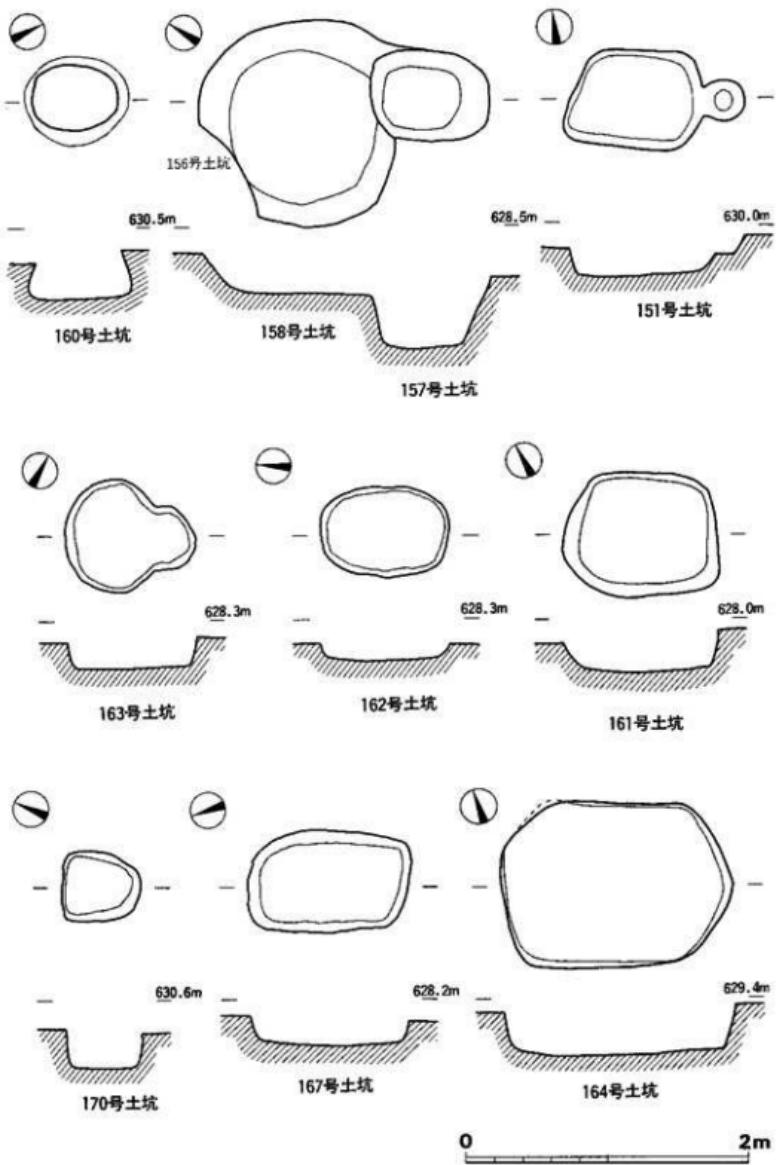


Fig. 62 土坑 (9)

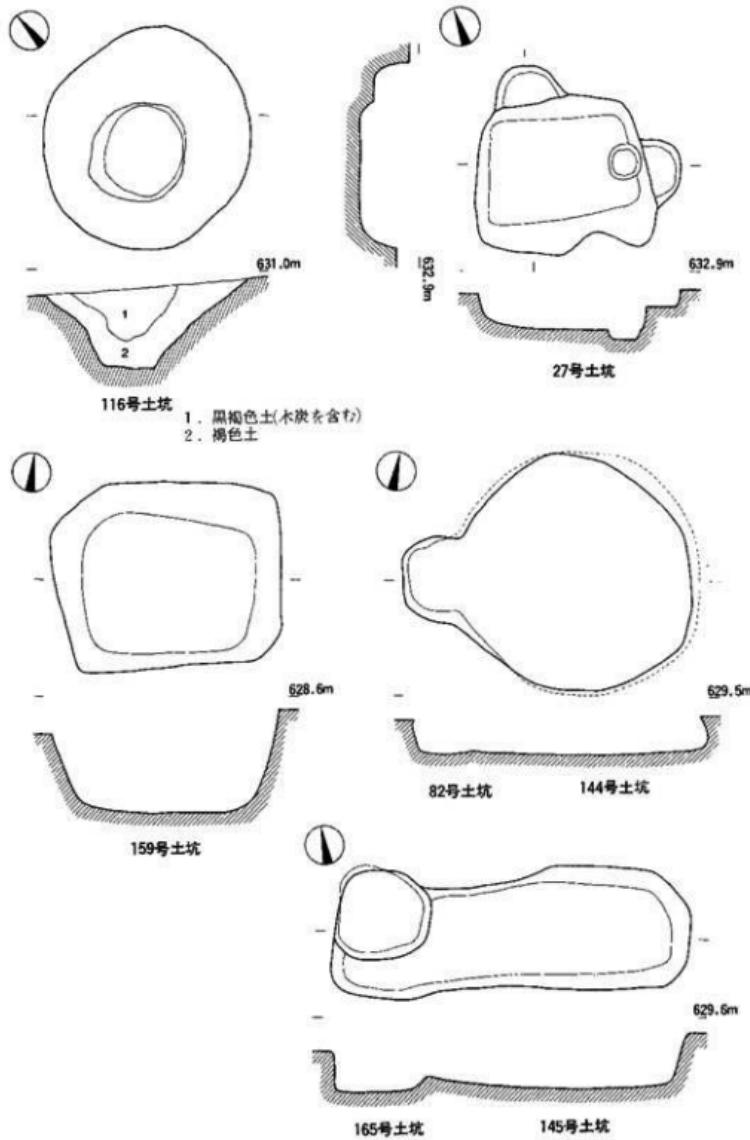


Fig. 63 土坑 (10)

第7節 まとめ

1. 土墳墓の主軸方向について

14基の土墳墓のうち主軸が明確な11基についてFig.65に図示した。北—南をしめすもの6基、北北西—南南東をしめすもの3基。これらは明らかに「北」を意識したものと考えられる。残り2基はそれぞれ、東北東—西南西、北東—南西をしめす。

2. 地下式坑について

a. 時期

時期がわかる地下式坑出土遺物は少ない。それらをまとめ遺構の時期を求めるに以下のようになる（遺構の性格上、時期は中世に限定した）。

3号：内耳土器（15世紀）	15世紀	
6号：土師質土器小皿（15世紀）	土師質土器皿（15世紀）	15世紀
35号：土師質土器皿（15世紀）	内耳土器（16～17世紀）	15・16世紀
43号：土師質土器小皿（15世紀）	15世紀	
46号：内耳土器（15世紀）	15世紀	
52号：土師質土器小皿（15世紀）	15世紀	
60号：土師質土器皿（15世紀）	15世紀	
61号：内耳土器（16～17世紀）	16世紀	
149号：白磁皿（15世紀）	15世紀	
150号：土師質土器皿（15世紀）	15世紀	

しかし、出土遺物が少ないと、伝世するものがあることなどを考慮に入れるに、求められた時期に若干の時間幅があるものと考えられる。その他、出土遺物のない地下式坑については、中世後期のものと考えている。

b. 分布と形態について

45基の地下式坑は、東西75m、南北25mの範囲内に分布し、全体で1つのまとまりとなる。このような細長い分布のあり方は、地理的条件による。つまり、南西向き緩斜面上にある、東西に延びた微高地の南側に地下式坑を築いたためである。

個々の形態の分布をみてみると、地下式坑はおおまかに、A：地下室の短辺側に堅坑があるもの（1・7・87号など、25例）、B：地下室の長辺側に堅坑があるもの（8例）、の2つに分類できる。B（69・138・149・150・152・153・168号）が西側に集中する傾向がある。形態と時期については、不確定なところが多いので言及を避けたい。

また、Fig.65に主軸の方向を図示した（ストリートーンは、概ね北を示すもの）が、土墳墓

と異なり統一性がないといえる。

c. 地下室掘削後の廃土について

天井が崩落した地下式坑の埋土中には、灰白色粘土粒子とPm-1の粒子が混在していた。このような埋土のありかたは、地下室掘削後の廃土を地下室上方の地表面に置いたと考えると説明がつく。地下室の説明の項で述べたように、地下室の床面は基本層序V層の灰白色粘土層中にあった。当然、地下室掘削後の廃土には、灰白色粘土と上層のPm-1が混じる。このような廃土が天井崩落に伴い地下室に入ってきたと考えられるのである(Fig. 64参照)。

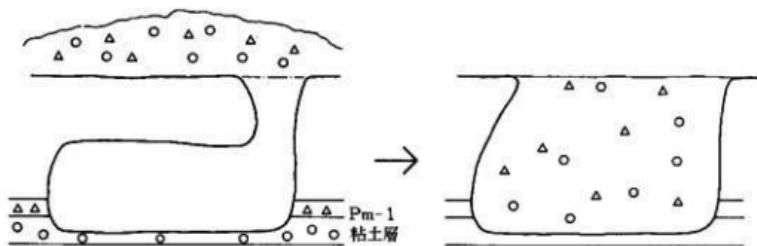


Fig. 64 地下室坑の埋まり方模式図(右: 天井崩落後)

参考文献

- 浅野晴樹 1988 「関東における中世在地産土器について」『研究紀要』第4号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 上田秀夫 1982 「14-16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』NO.2
- 大森隆志 1989 「踊石遺跡・薬師堂遺跡・白山I遺跡」明野村教育委員会
- 小林秀夫 1982 「長野県における内耳上器の編年と問題」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-茅野市その5-昭和52・53年度』長野県教育委員会
- 坂本美夫 1977 「土師質上器の分類」(伝)岩崎館跡発掘調査報告書 山梨県教育委員会
- 坂本美夫 1983 「山梨県における15世紀以降の土師質土器編年」『甲斐考古』20の1 山梨県考古学会
- 坂本美夫・末木 健・堀内 真 1983 「集落址出土土器の編年と背景 III 甲斐地域」『奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川考古第14号
- 中山誠二 1985 「甲斐における弥生文化の成立」『研究紀要2』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 三輪茂雄 1987 「粉の文化史」新潮社
- 森田 勉 1982 「14-16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』NO.2
- 八巻與志夫 1988 「金生遺跡I(中世編)」山梨県教育委員会



Fig. 65 地下式坑・土壤坑主轴方向

付編 中村道祖神遺跡の砂粒組成・重鉱物組成

会田 信行

1.はじめに

茅ヶ岳西麓には塩川沿いに3段の明瞭な河岸段丘が発達している。中村道祖神遺跡はこのうち小池平面（比高60m）と呼ばれる中位段丘面上に位置している。小池平面は層厚1~2mの小池平段丘礫層（八ヶ岳団体研究グループ、1988）とその上位のローム層からなり、そのローム層には御岳Pm-1A軽石層が含まれるとされている。今回、礫層より上位の土層（厚さ約2.4m）について、その砂粒組成と重鉱物組成を求めたので、その結果を報告する。

2.土層の層序

Fig.67に本遺跡の土層断面図を示す。これは発掘担当者が作成したものである。色調・構成物質等からI層からVII層までに区分される。各上層は次のように説明されている。

- I : 7.5YR4/6 褐色ローム（II、IIIよりも柔らかい）
- II : 10YR4/6 褐色ハードローム
- III : 10YR5/6 黄褐色ハードローム
- IV : 7.5YR5/8 明褐色バミス（しまりなく、柔らかい）
- V : 2.5YR7/1 灰白色粘土層
- VI-a : 5Y5/1 灰色粘土層（鉄分が酸化した部分）
- VI-b : 5Y5/1 灰色粘土層
- VII : 素層

VII層の素層は茅ヶ岳西麓の小池平段丘礫層に、またIV層のバミス（軽石）層は御岳火山起源のPm-1Aに対比されるものと思われる。

3.採取試料と分析方法

分析用試料としてI層（試料番号1~7）、II層（試料番号8~10）、III層（試料番号11~16）、IV層（試料番号17~19）、V層（試料番号20~21）、VI層（試料番号22）から計22個を採取した（Fig.67）。

採取した試料は水洗いし、粘土分を除去した後、乾燥器（35℃）で乾燥させる。乾燥後の残渣を100メッシュ（0.15mm）と200メッシュ（0.074mm）のフルイを用いて篩分する。このうち0.074~0.15mmの砂粒をカナダバルサムを用いて、スライドガラスに封入する。

スライドガラスに封入した砂粒を、偏光顕微鏡を用いて砂粒1粒ずつ鑑定する。その際メカニカルステージを用いて、等間隔線上の砂粒のみを対象とした。数える量は、重鉱物が200粒以上に

なるようにしたかったが、約半数が100粒台であった。特に試料番号15～22の試料では63～158粒と少なかった。

偏光顕微鏡はニコン（株）のOPTIPHOTO-POLを使用し、主に10×10倍で検鏡した。

4. 分析結果

Fig.66に分析結果を示した。以下に項目ごとに特徴を述べる。

（1）砂粒組成

砂粒の鑑定数は試料により差はあるが、黄褐色の風化粒子を除いてNo.13の1340個（最多）からNo.16の336個（最小）であった。数えた砂粒を重鉱物、軽鉱物（無色鉱物）、火山ガラス、岩片の4種に分け、百分率（粒数%）で示した。

I～III層のローム層では、①全体的に下位の層準ほど重鉱物の含む割合が小さくなること、②岩片はI層に多く含まれること、③火山ガラスを特に多く含む層準はなく、全体にわざかに含む、といった傾向が認められる。

IV～VI層では各十層単位で特徴が現れている。

以下、土層ごとに説明する。

No.22：VI層の粘土層である。重鉱物29%、軽鉱物65%、火山ガラス1.5%、岩片4%である。

No.20～21：V層の粘土層である。2試料とも含まれる割合はほぼ同じで、重鉱物10.5%、軽鉱物82～83%、火山ガラス2%、岩片5%である。

No.17～19：IV層の軽石層である。重鉱物8～13%、軽鉱物72～76%、火山ガラス4～12%、岩片7～9%である。火山ガラスはほとんどがHタイプ（吉川、1976）である。

No.11～16：III層のローム層である。重鉱物15～36%、軽鉱物58～79%、火山ガラス0.3～1.6%（Hタイプが主であるが、他の形態を示すものも目立つ）、岩片3～5%（No.16は0%）である。

No.8～9：II層のローム層である。重鉱物32～41%、軽鉱物53～60%、火山ガラス0.8～1.6%、岩片3～8%である。

No.1～7：I層のローム層である。重鉱物27～48%、軽鉱物36～56%、火山ガラス0.3～1.3%、岩片8～21%である。岩片は白色のものが多く含まれる。

（2）重鉱物組成

砂粒組成で示した重鉱物について、カンラン石、シソ輝石、普通輝石、酸化角閃石、普通角閃石、不透明鉱物、黒雲母、ジルコン、その他（不明鉱物を含む）の9種類に分け、百分率（粒数%）を求めた。

重鉱物組成上の特徴から、ローム層（No.1～16）、軽石層・灰白色粘土層（No.17～21）、灰色粘土層（No.22）の3つに分けられそうである。

No.1～16：不透明鉱物が最も多く含まれ、49%（No.5）～77%（No.14）を占める。残りがシソ輝石>普通角閃石>酸化角閃石>普通輝石である。普通角閃石+酸化角閃石で見ると、9

~20%になり、層準による違いは認められない。シソ輝石、普通輝石はⅠ層に特に多く含まれている。カンラン石はⅠ層の上部でわずかに含まれる。この部分のシソ輝石は風化されたものが多い。黒雲母はすべての試料に含まれていたが、試料処理の過程で水に洗い流されやすく、統計上表現されないものもある。

その他の鉱物はほとんどが赤色～暗赤色の鉱物である。また、ジルコンがNo.4, 7, 8, 9, 13, 14, 16で認められた。No.16の試料にはNo.17の軽石が少量含まれており、そのため黒雲母とジルコンが多くみられた。

No.17~21：普通角閃石、不透明鉱物、黒雲母の3種類で特徴づけられる。他にジルコンが最大4.3%含まれている。この重鉱物の組み合わせから、IV層の軽石層は御岳火山起源のPm-1A軽石層と判断される。またV層の灰白色粘土層は組成上Pm-1Aと同じであることから、Pm-1Aに伴って形成されたもの（粘土化した火山灰）と考えられる。

No.22：酸化角閃石(37%)、普通角閃石(29%)、不透明鉱物(28%)の3種類で94%を占める。他にシソ輝石と普通輝石を含み、黒雲母は認められない。

5.他の遺跡との比較

筆者が同じ方法で分析した遺跡に白山I遺跡（会田、1989）、永井原II遺跡（会田、1991年刊行予定）がある。白山I遺跡は本遺跡の南西約900m離れた地点にあり、しかも同じ地形面上に立地している。違いは標高が50mほど本遺跡のほうが高い。そこでまず白山I遺跡の土層断面図と対比を試みた。

白山I遺跡のIII～V層が本遺跡のⅠ層に、VIがⅢ層のNo.4～16に、VII層がVI層に（ともに灰色粘土層）、それぞれ対比できる（Fig.68）。したがって本遺跡のII層～III層上部（No.8～13）とIV～V層のPm-1A軽石層は白山I遺跡には分布していない。のことと、白山I遺跡の断面図でV層とVI層の境が大きな凹凸で示されていることから、白山I遺跡のV層とVI層は不整合関係にあるといえる。これは白山I遺跡では本遺跡のII層～III層上部のローム層が侵食されていることを意味している。したがって本遺跡のⅠ層のローム層とII～III層のローム層は区別して考えたほうがよい。仮にそれぞれ上部ローム層、中部ローム層と命名すると、これはまさに関東ローム層の中の立川ローム層と武藏野ローム層の関係に似ている。

永井原II遺跡のローム層は2、3、4層に3分されているが、2、3層は上部ローム層に対比されるのは確実である。永井原II遺跡の近くでPm-1A軽石層を確認しているので、4層はおそらく中部ローム層に対比されると考えられる。ただし組成上で本遺跡との対比に問題が残る。今後の検討課題としたい。

文 献

会田信行 (1989) 白山 I 遺跡の砂粒組成・重鉱物組成、「砲石遺跡・薬師堂遺跡・白山 I 遺跡」
P.46~50.

会田信行 (1991年刊行予定) 永井原 II 遺跡の砂粒組成・重鉱物組成

八ヶ岳団体グループ (1988) 八ヶ岳山麓の上部更新統、「八ヶ岳山麓の第四系 (地団研専報34)」
P.91~109.

吉川周作 (1976) 大阪層群の火山灰層について、地質学雑誌82巻8号、P479~515.

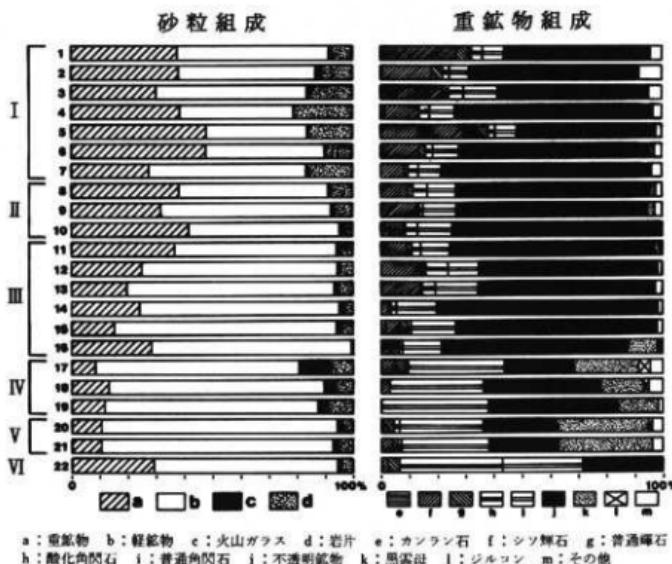


Fig. 66 分析試料の砂粒組成と重鉱物組成

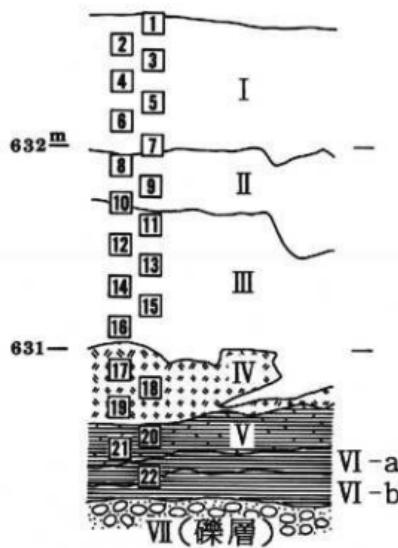


Fig. 67 分析試料採取位置

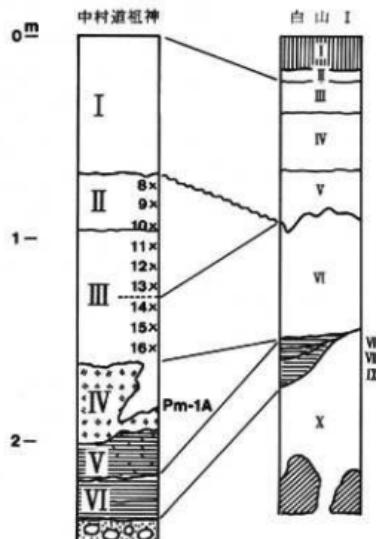


Fig. 68 中村道祖神遺跡と白山 I 遺跡の対比

写 真 図 版



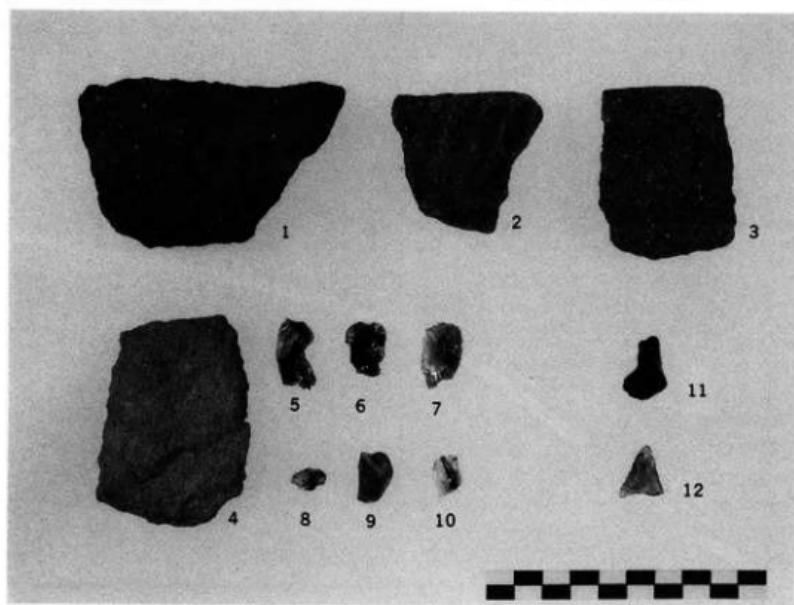
遺跡の位置（1：千野木I、2：千野木II）



調査風景（千野木 I）



調査風景（千野木 II）



千野木 I・千野木 II 遺跡出土遺物



遺跡の位置（1：池の下、2：踊石II、3：中村道祖神）



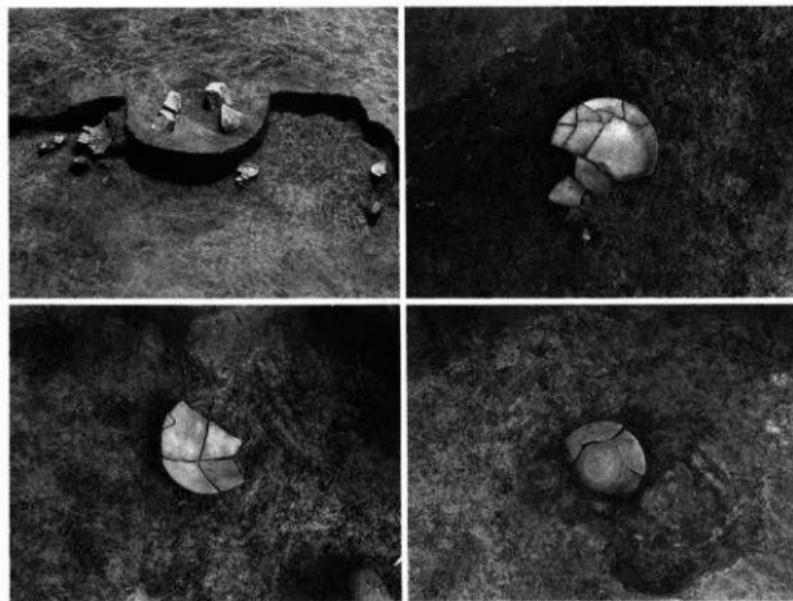
遺跡の遠景（1：池の下・中村道祖神 2：躰石II）



池の下遺跡調査風景



1号住居址



遺物出土状況

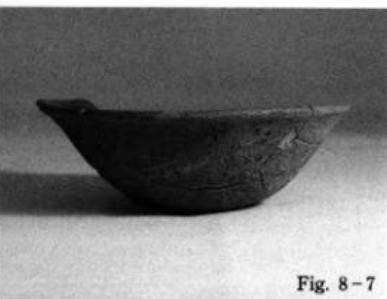


Fig. 8-7

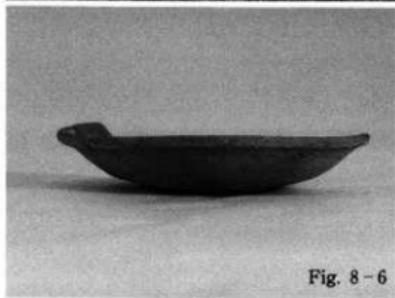


Fig. 8-6

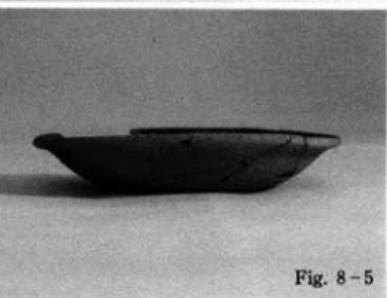


Fig. 8-5

遺物出土状況と出土土器



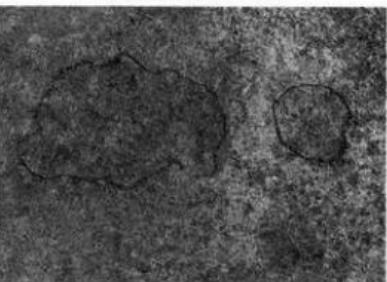
調査風景



1号住居址カマド石組



調査風景



1号焼土



Fig. 8-3



Fig. 8-1



Fig. 8-2



1号住居址出土土器



Fig. 9-1



Fig. 9-2



Fig. 9-4



1



2



3



4



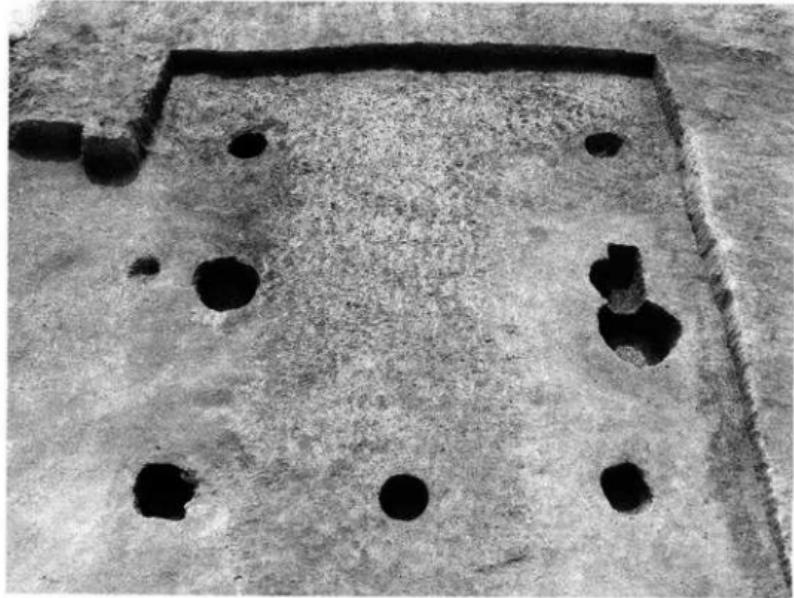
5



出土遺物



掘立柱建物跡（上部）



掘立柱建物跡（下部）



1(下)・2(上)号土壤墓



2号土壤墓古銭出土状況



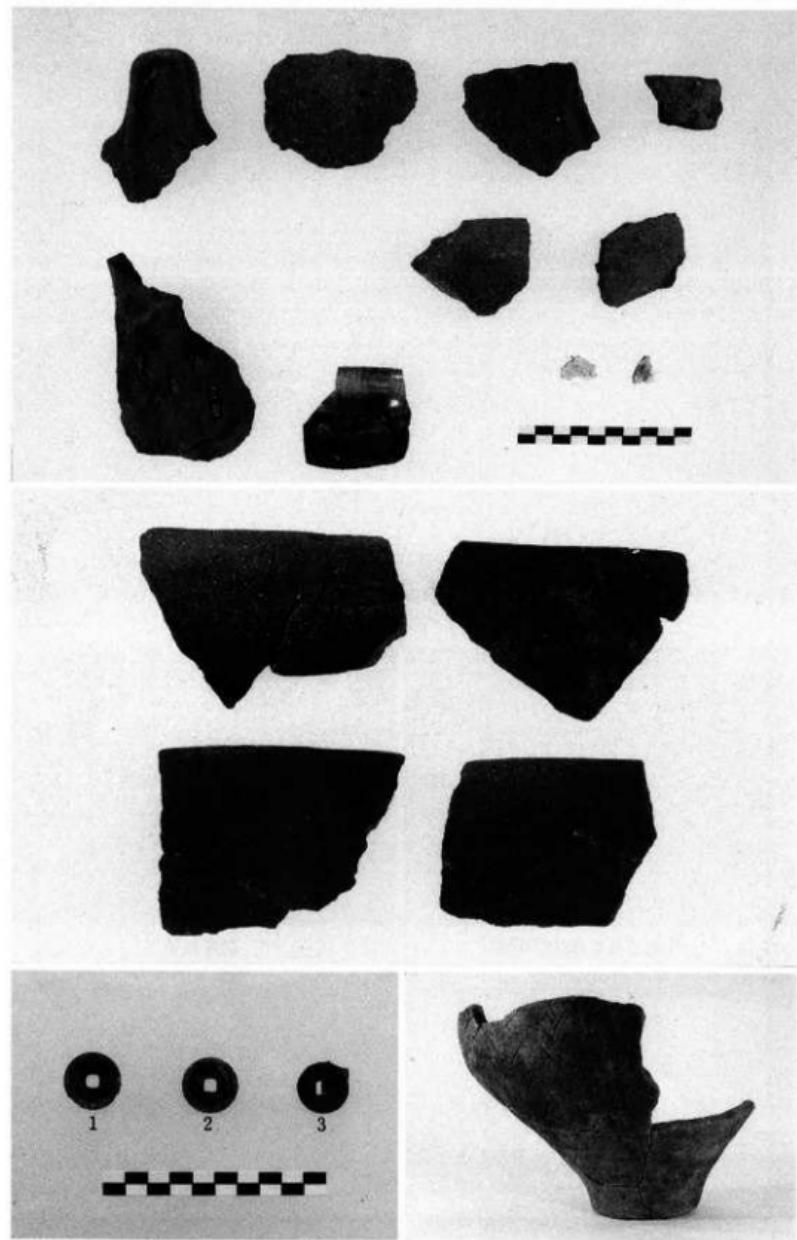
調査風景



調査風景



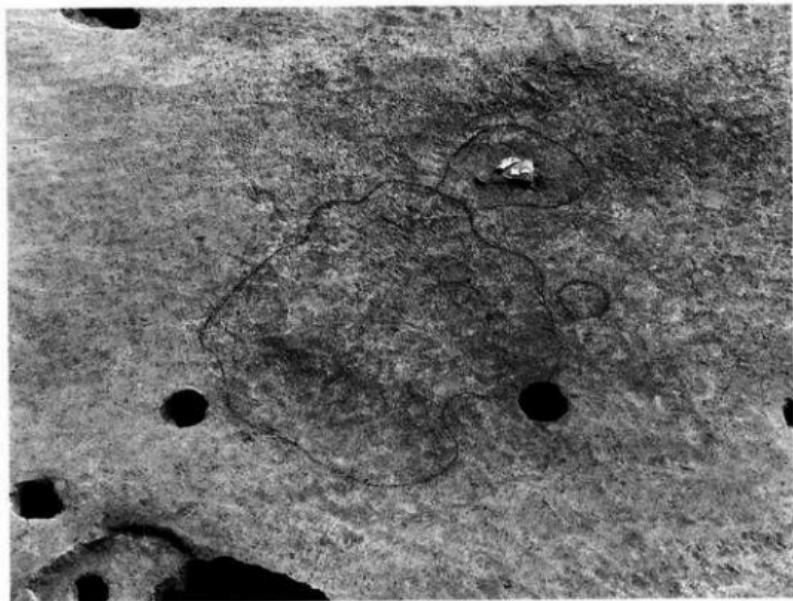
調査風景（実測）



石器 II 遺跡出土遺物



1号住居址



2号住居址



3号住居址カマド付近



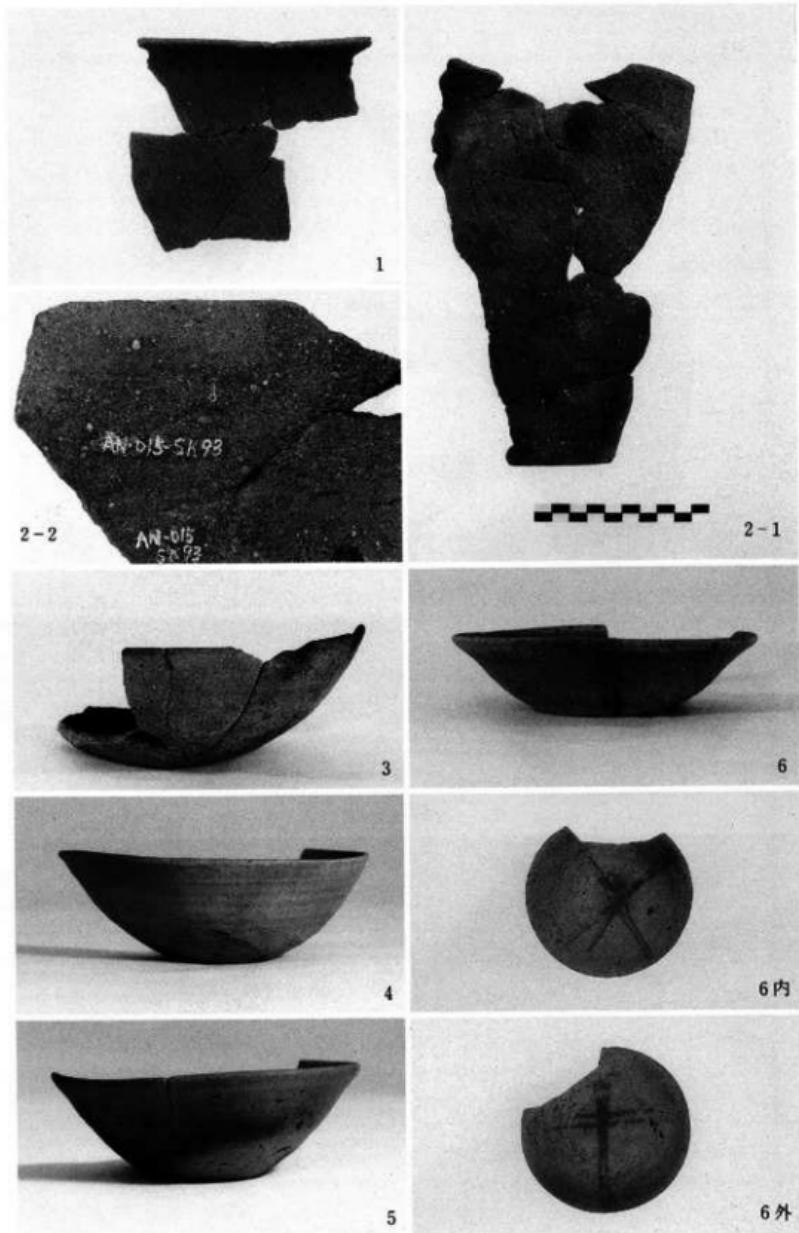
1号埋設土器



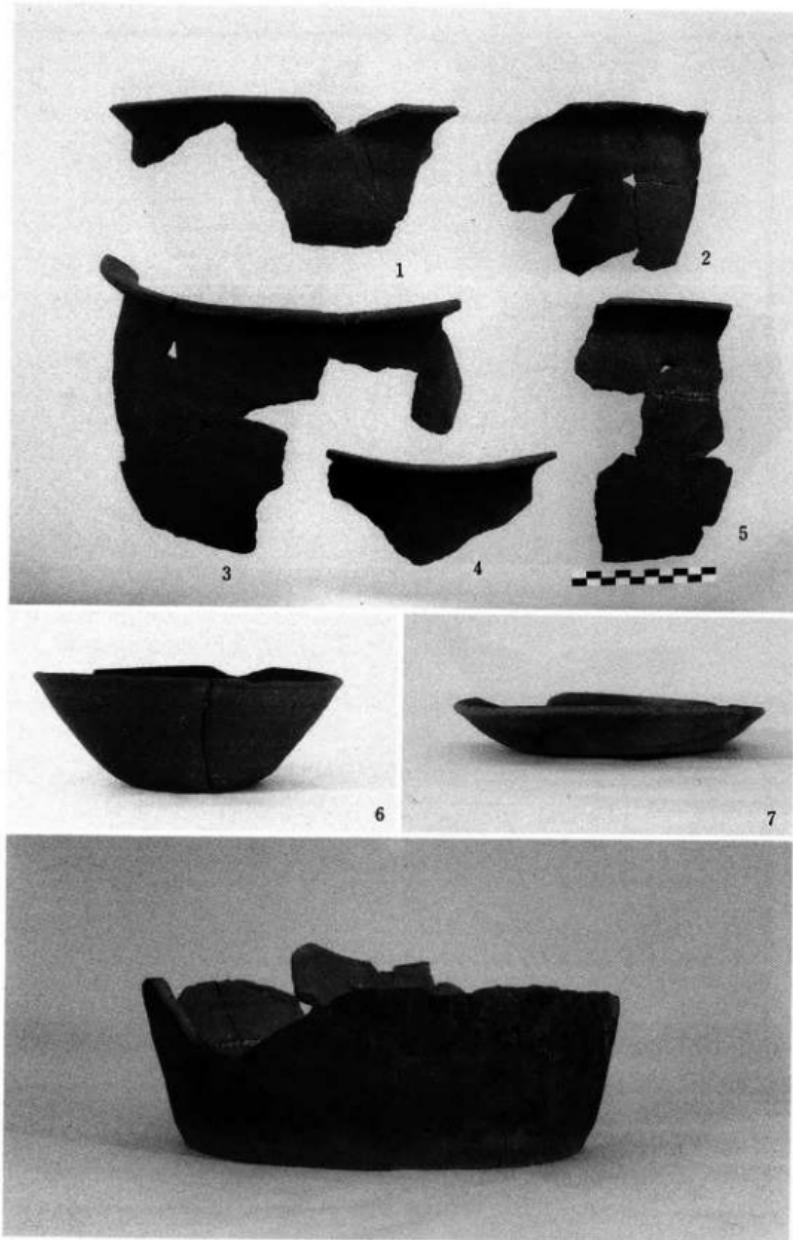
3号住居址土器出土状況



1号埋設土器内碟



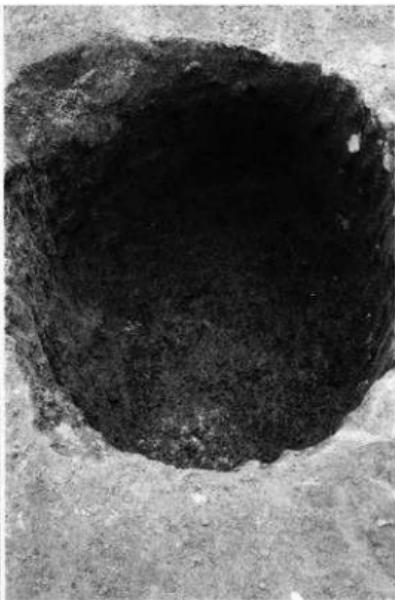
93号土坑、1・2・3号住居址出土遺物



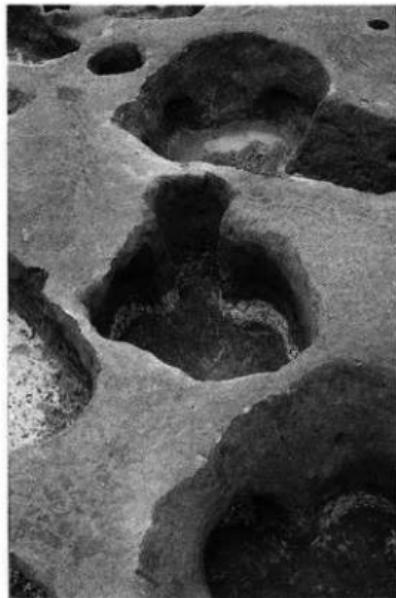
3号住居址出土遺物・1号埋設土器(下)



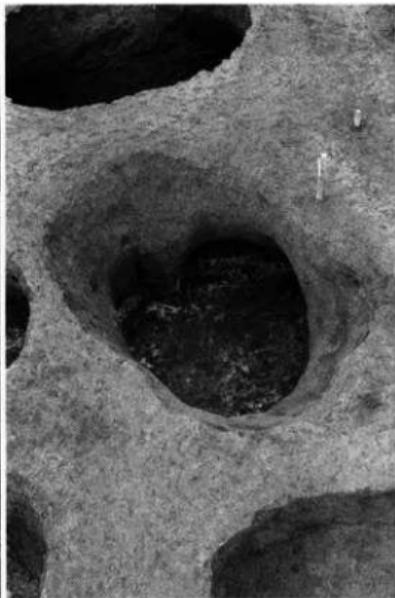
1号土坑



1号土坑炭化物出土状况



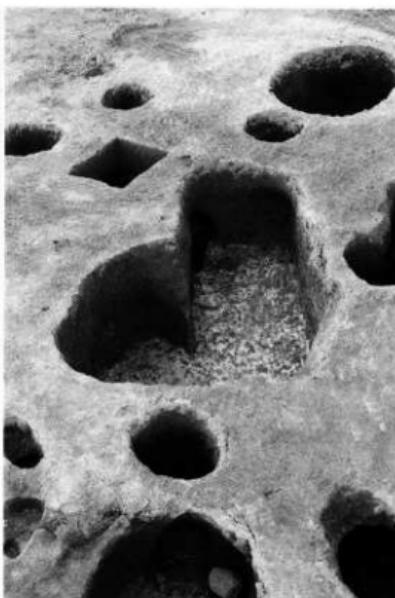
2号土坑



3号土坑



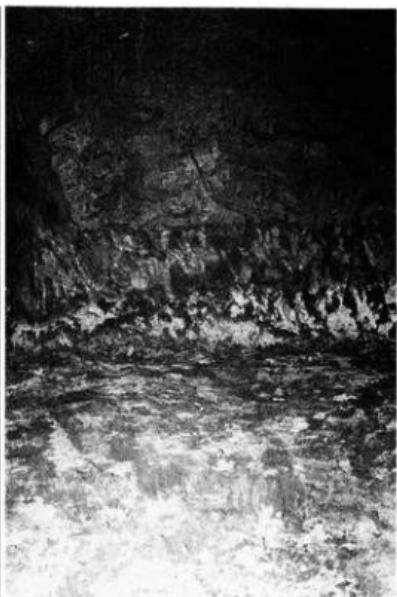
4号土坑



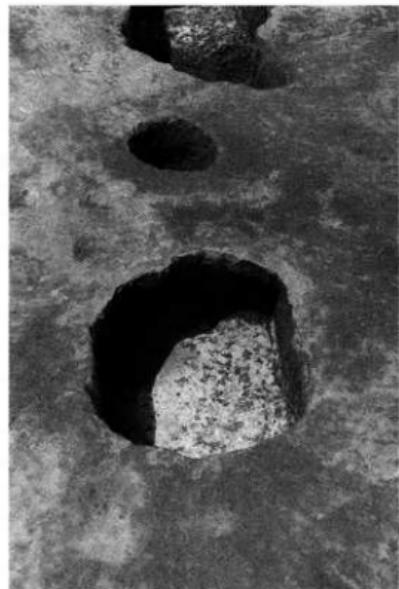
6(右)・18(左)号土坑



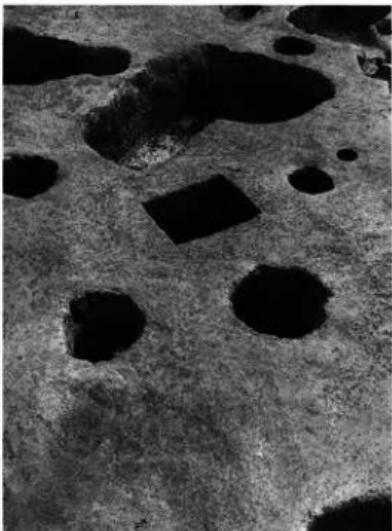
5号土坑竖坑入口(下)



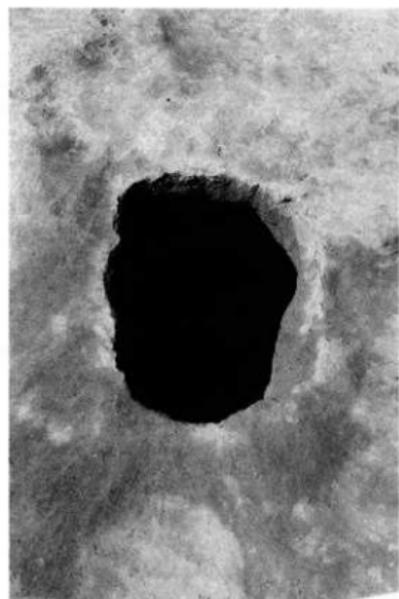
5号土坑地下室内部



7号土坑



9号土坑



11号土坑



9号土坑内部



11号土坑 坑床



17号土坑



35号土坑・土器出土状况（下）



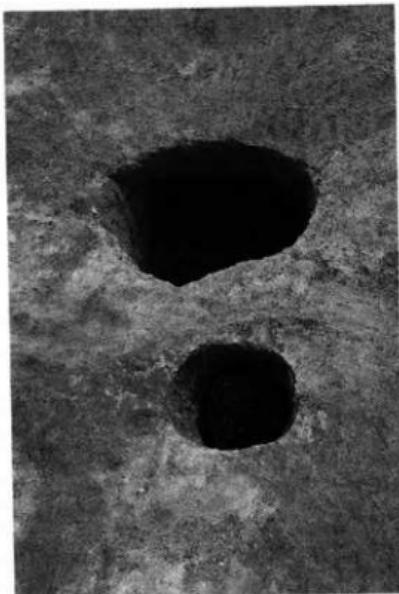
26号土坑



26号土坑内部土坑



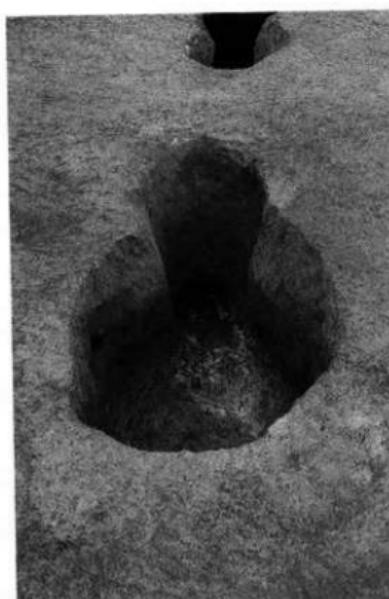
26号土坑工具痕



36号土坑



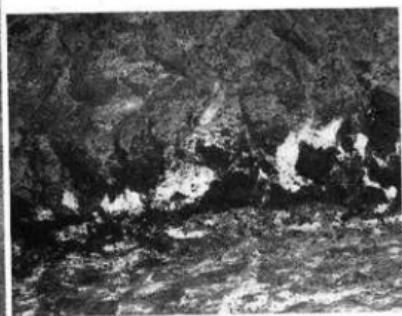
43号土坑



39号土坑



39号土坑第2室入口



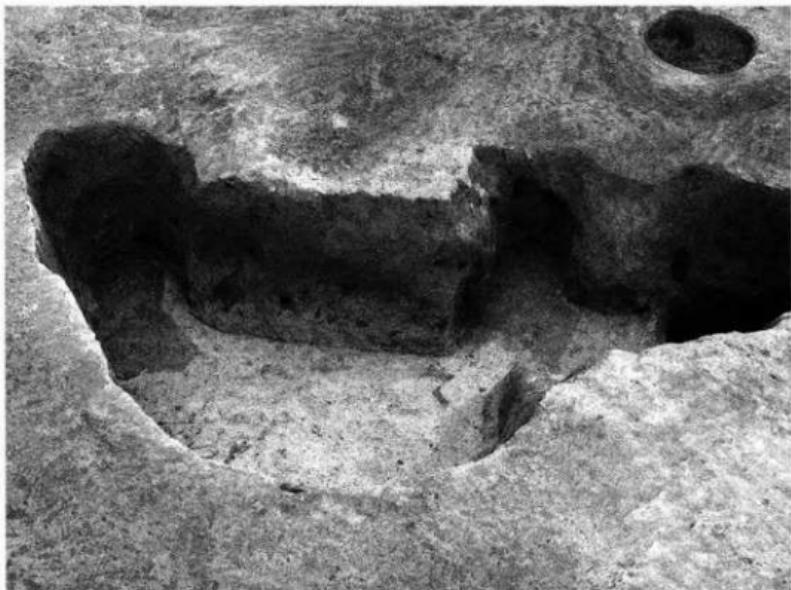
39号土坑第2室内部



44・52・65・106号土坑（南東から）



44・52・65・106号土坑（南西から）



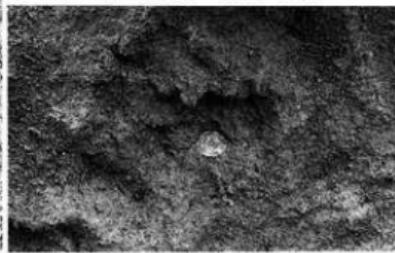
46号土坑



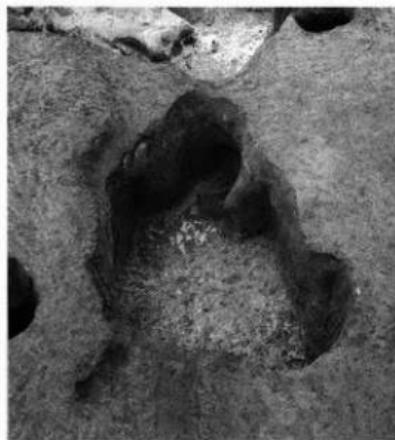
46号土坑炭化物出土状况



46号土坑内耳土器出土状况



46号土坑古钱出土状况



45号土坑



60号土坑竖坑入口



61号土坑



60号土坑地下室内部



61号土坑土器出土状况



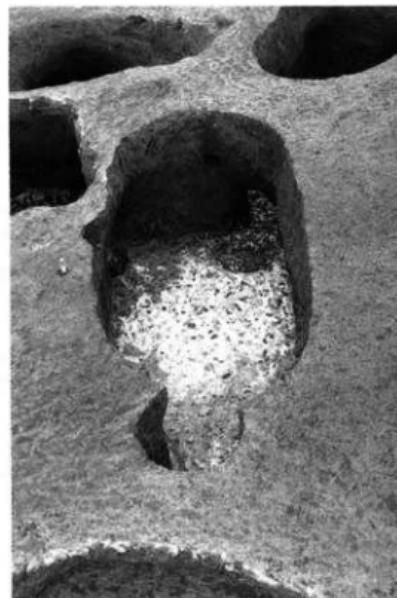
61号土坑ひで鉢（下）出土状况



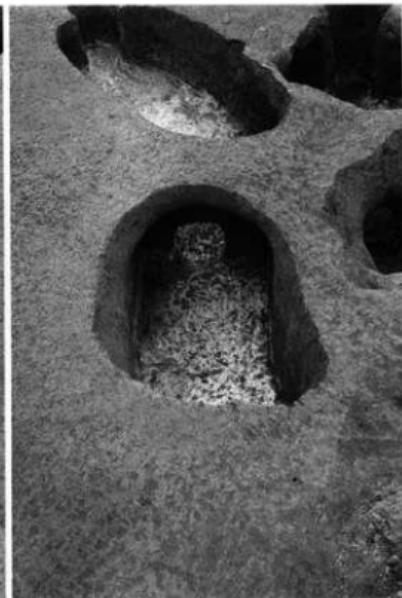
64号土坑



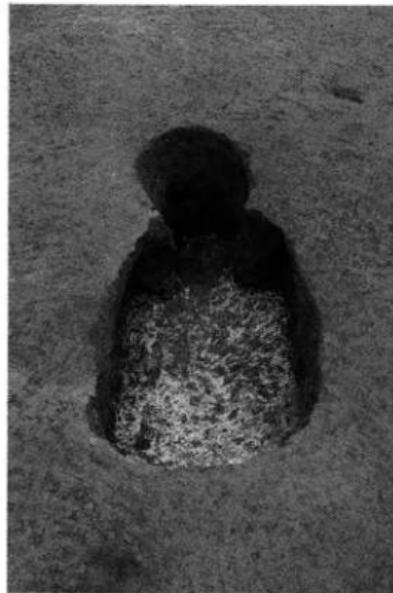
69号土坑



87号土坑



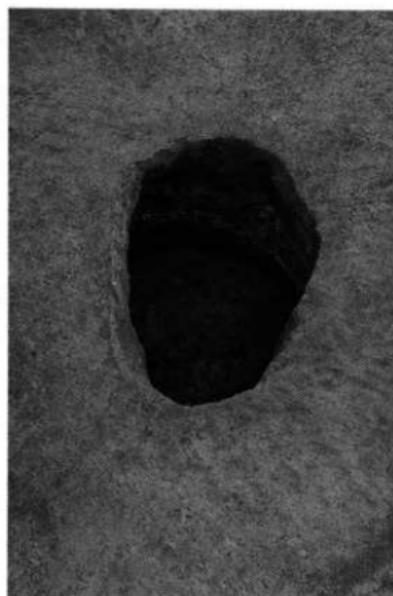
88号土坑



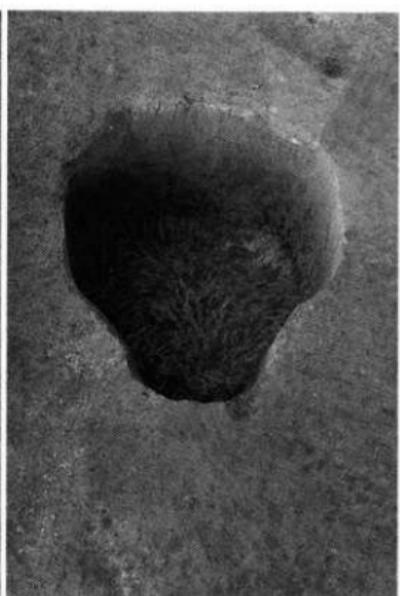
91号土坑



107号土坑



117号土坑



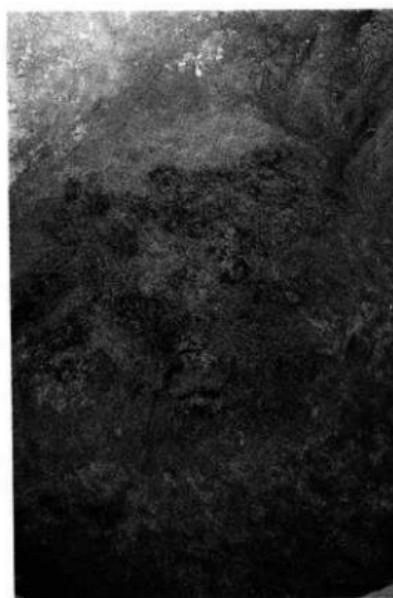
138号土坑



155・147・166号土坑（上から）



166・147・155号土坑（上から）



147号土坑炭化物出土状況



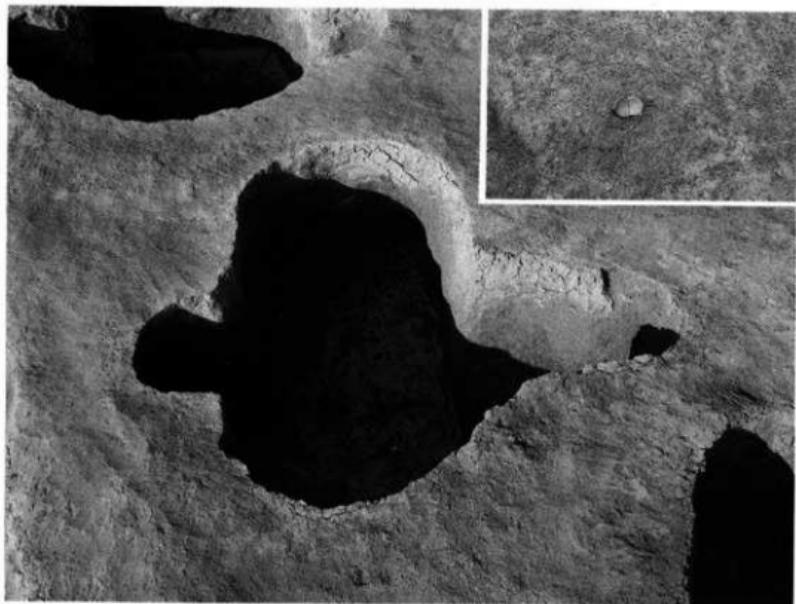
148号土坑



149号土坑



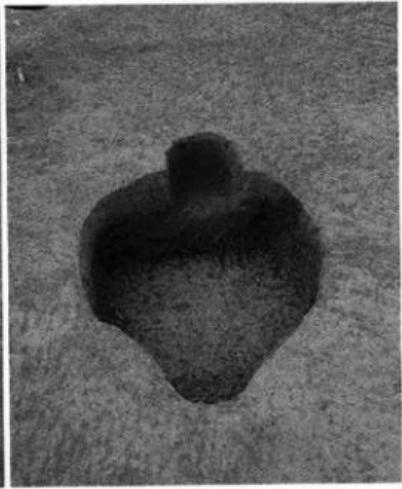
149号土坑遺物出土状況



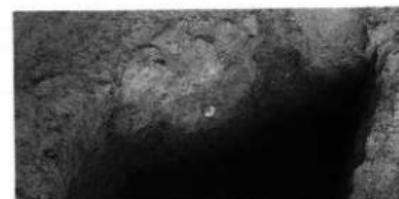
150号土坑・土器出土状況（上）



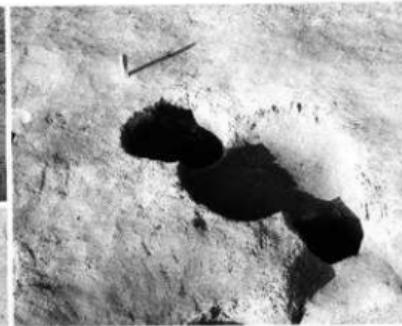
152号土坑



153号土坑



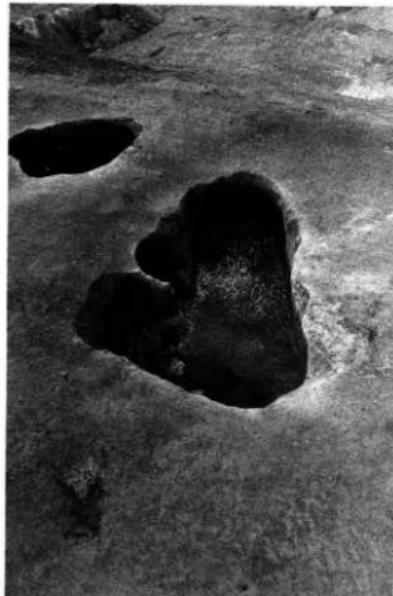
154号土坑・古錢出土状況（上）



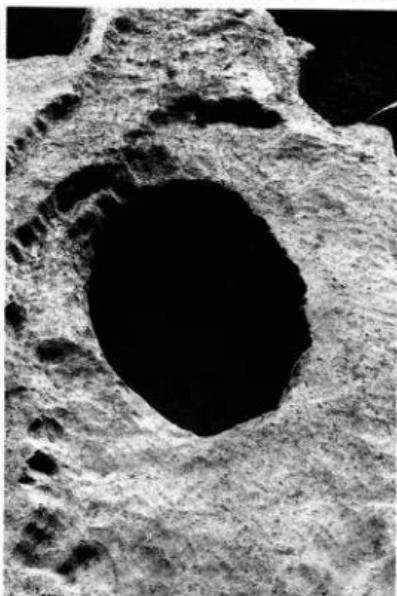
156号土坑竖坑入口(上)



156号土坑地下室内部



168号土坑



169号土坑



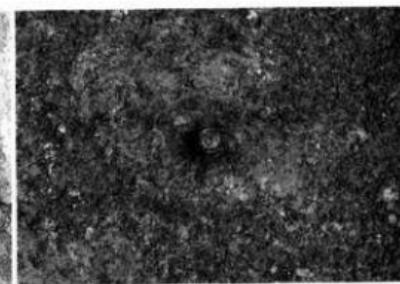
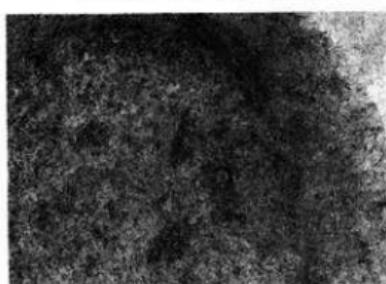
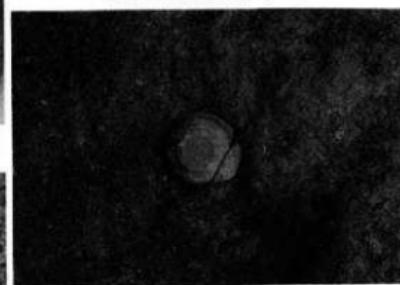
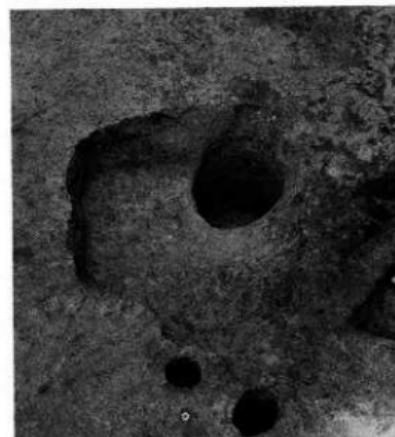
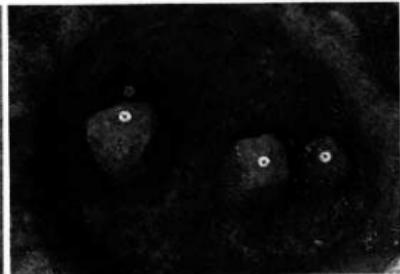
171号土坑

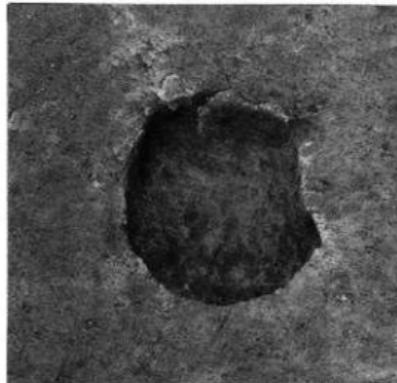


調査風景（実測）



調査風景

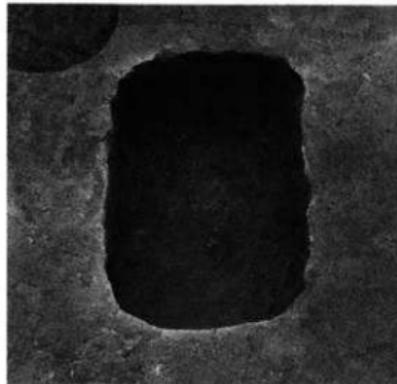




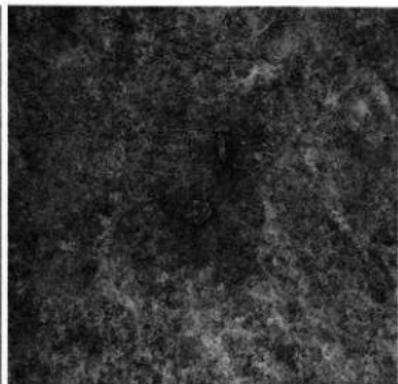
29号土坑



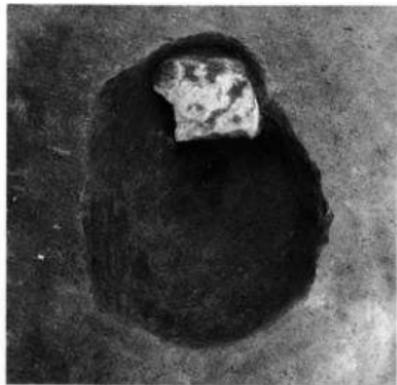
29号土坑古錢出土状况



41号土坑



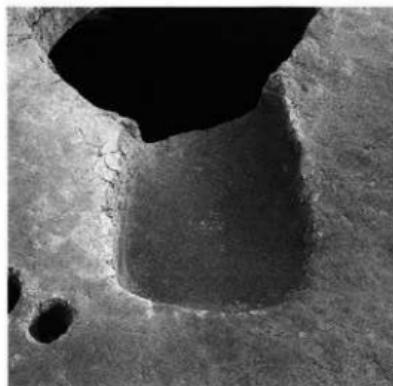
41号土坑古錢出土状况



53号土坑



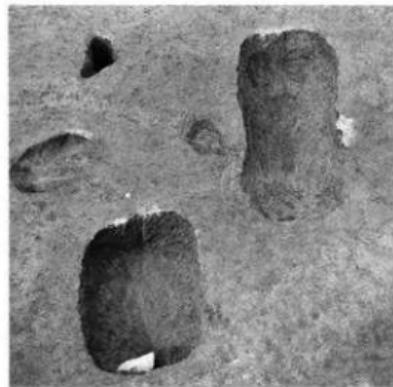
53号土坑古錢出土状况



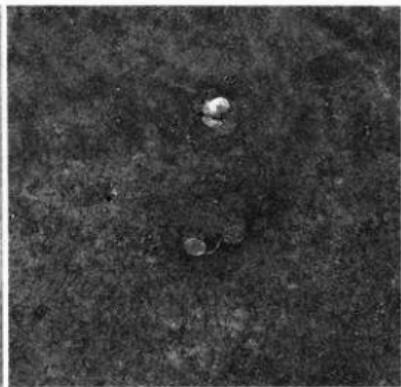
59号土坑



59号土坑古錢出土状况



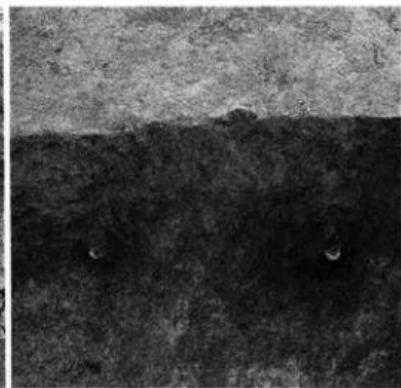
66（下）・68（上）号土坑



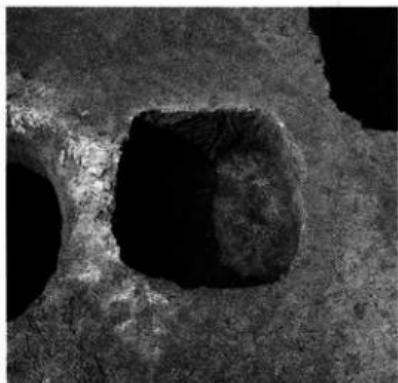
66号土坑古錢出土状况



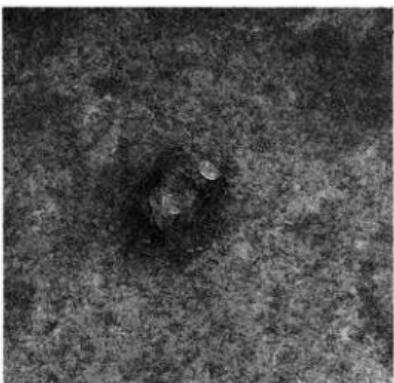
139号土坑



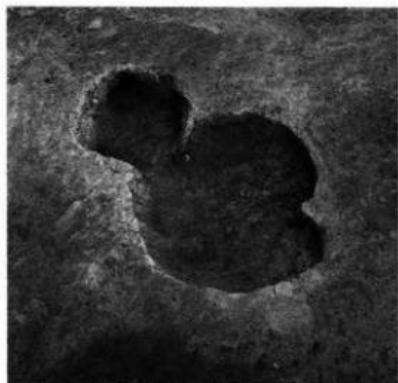
68号土坑古錢出土状况



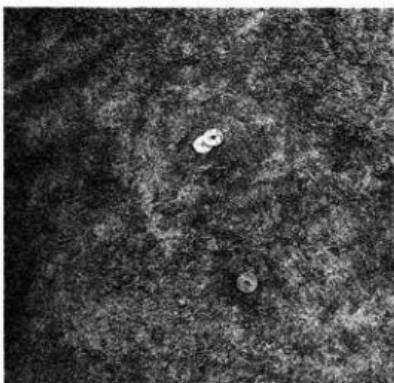
70号土坑



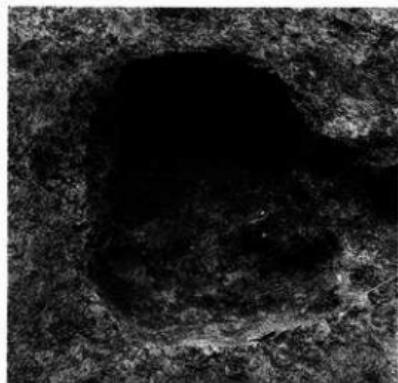
70号土坑古錢出土状况



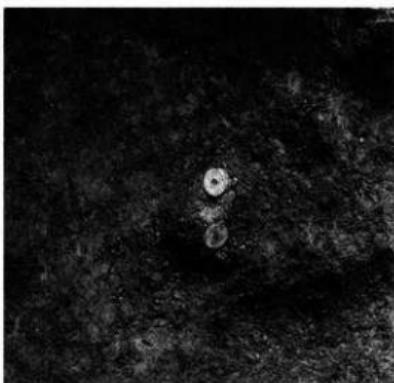
109号土坑（下）



109号土坑古錢出土状况



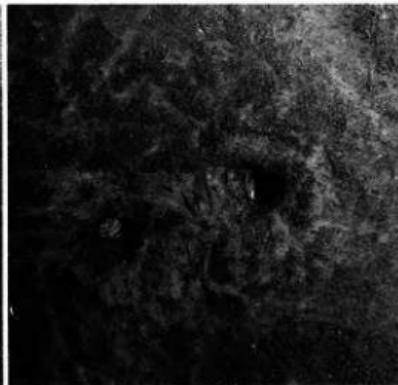
131号土坑



131号土坑古錢出土状况



135号土坑



135号土坑古錢出土状况



93号土坑



93号土坑土器出土状况



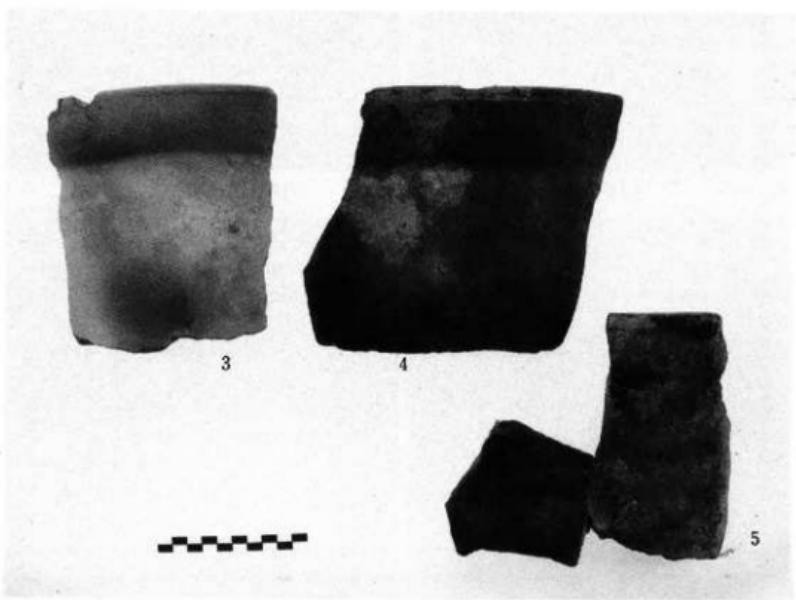
48号土坑



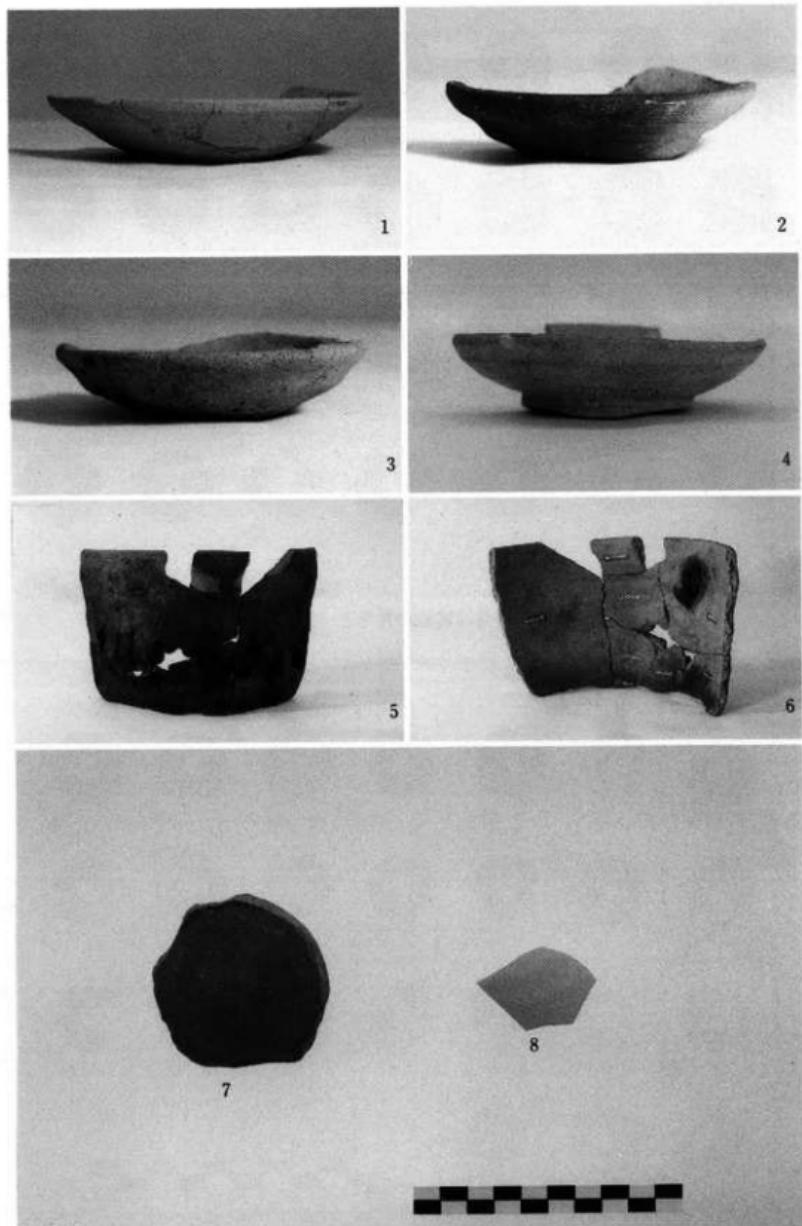
48号土坑土器出土状况



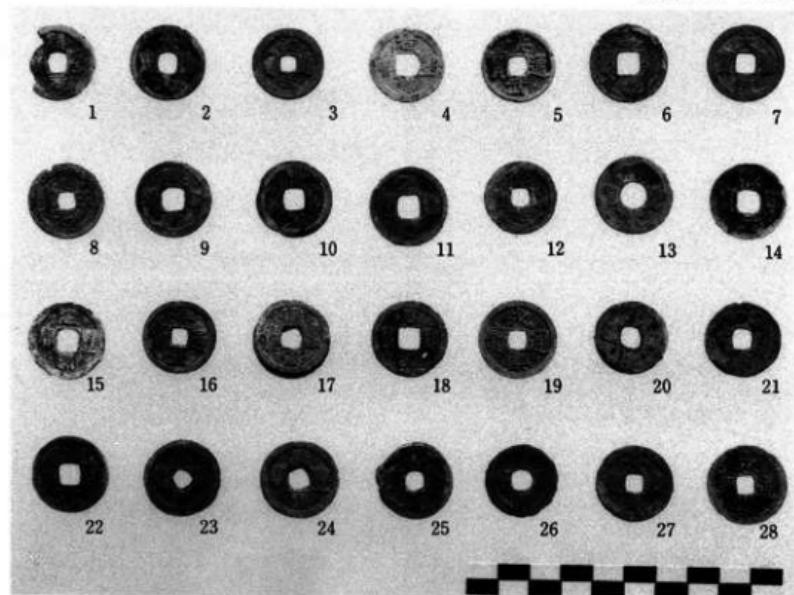
地下式坑出土土器



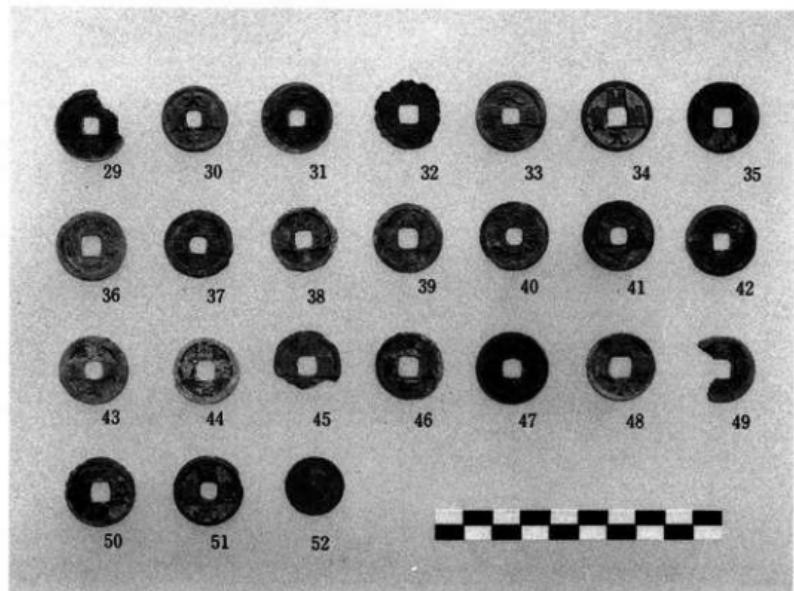
地下式坑出土土器



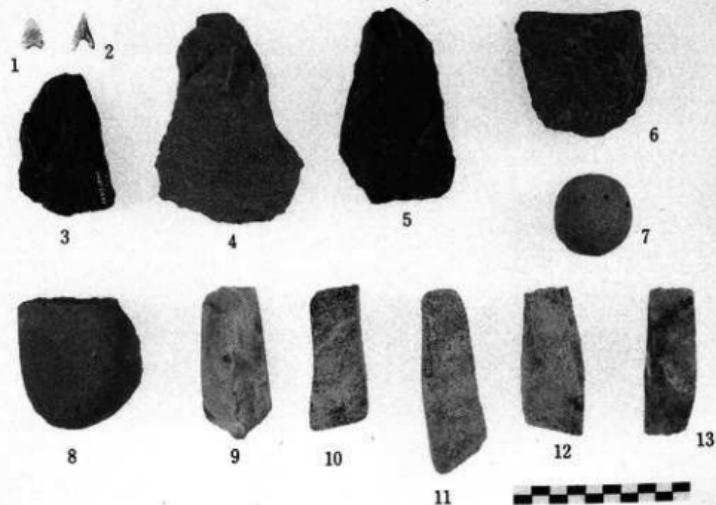
地下式坑・土壤墓・土坑出土遺物



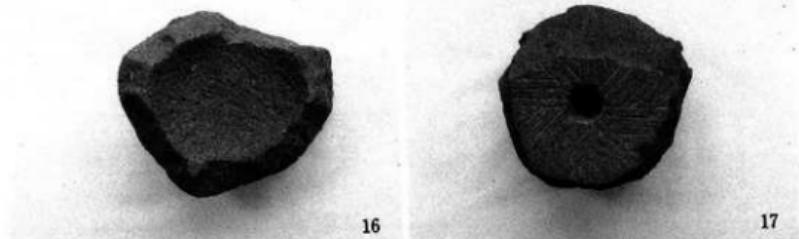
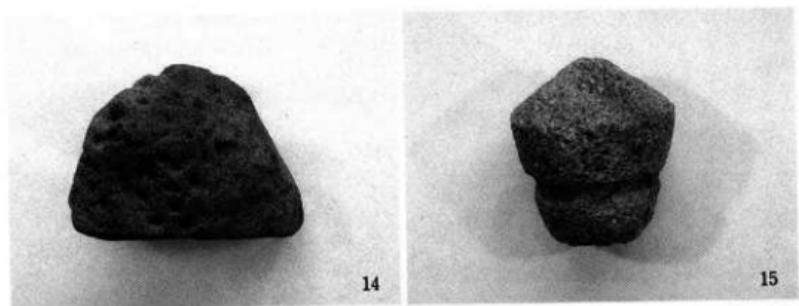
古銭（番号は図版の番号と一致する）



古銭（番号は図版の番号と一致する）



石器・石製品



石製品



1



5



2



6

土製品（馬）



4



石製品（1～5）

深掘りセクション



遺跡全景（東から）



遺跡全景（東から）

明野村文化財調査報告 5

千野木 I・II 遺跡・池の下遺跡
踊石 II 遺跡・中村道祖神遺跡

1990.3.31発行

発 行 明野村教育委員会
印 刷 株式会社 サンニチ印刷

